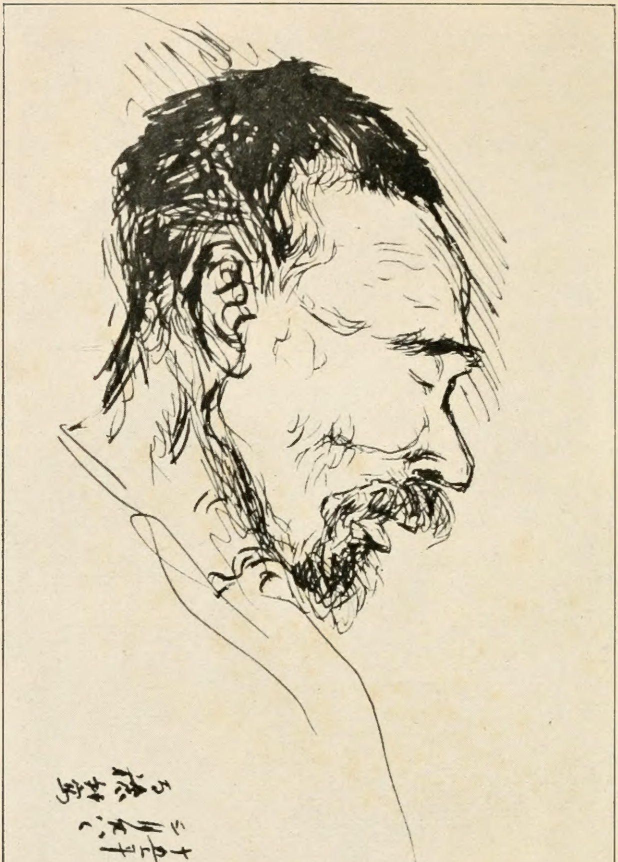
齋藤茂吉著

アララギ叢書第四十七編

念珠集

鐵塔書院



目次

小品集

挿畫

島木赤彦臨終記

島木赤彦臨終記

一

大正十五年三月十八日の朝、東京から行つた藤澤古實君が、柹蔭山房に赤彦君を見舞つた筈である。ついで攝津西宮を立つた中村憲吉君が、翌十九日の午ちかくに到著した筈である。廿日夜、土屋文明君が東京を立つた。

翌廿一日の午過ぎに、百穗畫伯、岩波茂雄さんと僕とが新宿驛を立つた。たまたま上京した結城哀草果君も同道した。少しおくれて東京から高田浪吉、辻村直の兩君が立ち、神戸から加納曉君が立つた。

上諏訪の布半旅館で、中村憲吉君、土屋文明君、上諏訪の諸君と落合つて、そこで一夜を過ごした。中村、藤澤兩君の話に據ると、十七日に、主治醫の伴鎌吉さんが、赤彦君の黄疸の一時的のものでないことの暗指を與へたさうである。その夜、夕餐のとき赤彦君は『飯を見るのもいやになつた』といつたさうである。十八日に攝津國を立つた中村君は、十九日に柿蔭山房に著いた。その時赤彦君は、『煙草ももう吸ひたくなくなつた』『ただ靜かにしてゐるのが何よりだ』と云つたさうである。翌廿日、中村、藤澤の兩君が諏訪上社に參拜祈願して護符を奉じて來た。赤彦君は、『ありがたう。おれにいただかせろ』といつた。これは既にかすかで、一語一語骨が折れる風であつた。夫人の不二子さんは護符を以て俯伏してゐる赤彦君の頭を撫でた。赤彦君は、『ありがたう』といつた。そして、『きたないとこに置くなよ』と云つたさうである。その夜、藤澤古實君に、言葉が跡切れ跡切れに、『己はな、いかんとも疲勞してしまつてなあ。

餘病のために、黄疸のために、まゐるかも知れん』と云つた。その終の『まゐるかも知れん』のところが急に大ごゑになつて、健康な時の朗々たるこゑを思はせたので、胸がぎくりとしたと古賀君が語つた。

廿一日朝、赤彦君は首をあげて、皆に茶を飲みに來るやうに云つた。中村憲吉、藤澤古實、丸山東一、久保田健次の諸君、不二子さん、初瀬さんが集まつた。その時、藤澤君の美術學校卒業製作塑像の寫眞を見せると、『ありがたう。素直だな。しづかなのは一層むづかしいものだ』と云つたさうである。それから、

『どうもな。本病より餘病の方がえらいやうだ。齋藤もさう云つて來たよ。伜も同じ意見だ。餘病が、餘病が餘病だけですめばいゝが、本病にはとりつけないで』とも云つたさうである。僕は、神保博士の意見として、どうも黄疸は單純な加答兒性のものでなく肝の方から來てゐることを手紙に書いたのであつた。

それでも癌の轉移證狀であることは書けなかつたのである。赤彦君はそれゆゑ飽くまで黄疸を餘病と看做し、餘病を先づ退治して置いて、そして生きられるだけ生きようと覺悟したのであつた。それであるから、極力友人に會ふことを厭うて、靜かに身を保たむとしたのであつた。赤彦君は四五月の候になれば餘病を退治して、今度は樂しく友にも會はうと思つてゐたのである。赤彦君はその夜こんなことをも云つた。『倅さんは本當に熱心だからな。己ははじめは知らなんだ。一遍見て貰つたらもう倅さんに限るやうになつた』『自分ひとりではと思ふときには屹度ほかの人にも相談してなあ』『腕はあるんだからなあ』などとも云つたさうである。

二

廿一日に、中村憲吉君は挽歌の話を爲出した。挽歌といふのは、秋田縣角館

中學校の校歌を平福百穗畫伯から囑付して赤彦君に作つて貰ふことになつてゐた。それを謂ふのである。すると赤彦君は、『北日本の脊梁の。千秋萬古やまのまに、偉靈の水を湛へたる。田澤の湖の水おちて。鰍瀬川となかれたり。』云々と低いこゑで云ひ、憲吉君の批評をも求め、もう七分どほりは出來てゐることを云つた。その時、藤澤古實君が傍から、『ちよつと其を書いて置きませうか』と云つて、それから不二子さんもそれをすすめると、『書いちやいかん。それだでこまる』『みどころを取つて行かれるやうだ』と云つたさうである。

そのうち腰の痛みが出て來た。『水脈坊水脈坊。お客様がゐていやかも知れんがおさへて呉れなくちや』と云つた。それから、『飲物も食物も皆さげてくれ。目のまへにあると溜まらんから』と云つたさうである。その時按摩が來たので皆が部屋を退いた。その時古實君に、『訂正を送つて呉れたか』と云つた。『はい、送りました』と答へると『確だな』と念を押したさうである。この訂

正といふのは、雜誌改造に出した、『風呂桶に觸らふ我の背の骨のいたくも我は瘦せにけるかな』の下の句を『斯く現れてありと思へや』と直し、憲吉・古賀君の意見をも徴して、其をアララギの原稿にしたのである。それを謂ふのである。尚今雜誌を調べて見ると改造に出した歌をアララギでは少しづつ直してゐる。

信濃路に歸り來りてうれしけれ黃に透りたる莖漬のいろ（改　造）
信濃路に歸り來りてうれしけれ黃に透りたる漬菜のいろは（アララギ）
神經の痛みに負けて泣かねども夜每寢られねば心弱るなり（改　造）
神經の痛みに負けて泣かねども幾夜寢ねねば心弱るなり（アララギ）

廿一日夕七時ごろ、古賀君との問答がある。

古賀『中村さんは明日か明後日歸ると云つてゐました。どうも己が行つて赤彥を興奮させて濟まなかつたといつてゐました』

赤彦『中村は己が相手をしなんで不服らしかつたかな』
古實『そんなことはありません』
赤彦『己は一言いふにもつかれるのだ』
古實『……』
赤彦『もう一度會ふさ』
古實『それでは明日でもお會することにしませう』
かういふ會話などがあつた。それから八時頃かういふことを云つたさうである。『畫伯、齋藤、岡、土屋、岩波――五人だなあ。……それへおれの病を君から委しく書いてやつて呉れ。まだ容態をくはしく書いてやらうとしてゐて書いてやらないから。……身のおきどころがない。……坐つてゐても玉のやうな汗が額から出る。いかんとも爲樣がないとさう書いてくれ。……そして物をいふと、それだけ疲勞するから、靜かにしてゐると書いて呉れ、醫者もさういつて

ゐるし、それが已に藥だ』から云つた。古賀君は『かしこまりました』といふと、『用件はそれだけ』『あつちで寢て行つて呉れ』と云つた。

その夜の十時頃、妹の田鶴さん、不二子さん、水脈さん、初瀨さん、健次君、丸山君、藤澤君等を部屋に呼び、『おれはなるべく物を云はぬから、そつちでお茶を飲んで呉れ』と云つた。間もなく、辛うじて身を起し、『明治四十一年淺間山へのぼる。雲の海の上にあらはるる信濃のやま上野のやま下野の山』『明治四十一年十一月とおぼえておけ』『日本新聞に出てゐる』と云つた。

その時、赤彥君のうしろに猫がうづくまつて喉を鳴らしてゐた。これは赤彥君がいつも猫を可哀がるので傍に來てゐるのであつた。皆が、猫の話をし、夏樹さんの猫をいぢめる話などをしてゐると、赤彥君は、『初瀨、歌の原稿を書け』と云つた。そして、『わが家の猫はいづこに行きぬらむこよひもおもひでて眠れる』と云つた。暫くして、『ちがつた。ちがつた。猫ぢやない。犬だ

わ』と云つて笑つた。これは數日前に居なくなつた犬のことを氣にして咏んだ歌である。

　わがいへの犬はいづこにゆきぬらむこよひもおもひいでてねむれる

その後は遂に歌を作らずにしまつた。この歌が赤彦君の最終の吟となつたのであつた。

三

廿二日朝、土屋君は僕を伴(ばん)さんのところに連れて行つて呉れた。僕は初對面(しよたいめん)の挨拶(あいさつ)をし、初診(しよしん)以來熱心の治療に對して謝した。伴さんはその前にも、赤彦君の病狀に就いて委しく通信され、また黃疸(わうだ)のあらはれた三月一日には態々電話で知らせて呉れたのであつた。午過ぎ(ひるすぎ)に、平福・岩波・中村・土屋の諸君と伴(ばん)さんと僕と柿蔭山房に出かけた。

家に入るところの道は霜解がして靴がぬかつた。松樹はもとの儘だが、庭は廣げられてあつた。大正十年の夏に僕夫婦の一夜宿つた部屋には炬燵がかけてあつて、そこに諏訪の諸君があたつてゐた。暫くして先づ作さん、中村憲吉君、僕の三人が部屋に入つて行つた。部屋は新築したばかりの書齋である。いままでのは、書齋も客間も一しよで、書きものなどの散らばつてゐる時には困るといふので、元の土間の處に書齋を造つたのであつた。その炬燵に赤彦君は俯伏して、頭のところに兩手を固く組んでゐる。作さんは來意を告げた。すると赤彦君は辛うじて顔をあげ、それから兩手を張つて姿勢を正し、そして、『ありがたう』と云つた。こゑは低くそして幽かであつた。そしてその儘また俯伏してしまつた。赤彦君の顔面は今は純黄色に變じ、顔面に縱横無數の皺が出來、頬がこけ、面長くて、一瞥沈痛の極度を示してゐた。

『だいぶ痩せたなあ』と僕は云うた。すると赤彦君は、『冷靜だ。極めて冷靜

だ』と云ひながらその儘俯伏してゐた。僕は咽のつまるやうにおぼえて唯『うん』と云うたのみであつた。僕はその時、三月十二日に、古今書院主人橋本福松君が柿蔭山房をたづねた時に、赤彦君がこゑを擧げて泣いたといふことを思ひ出したのであつた。赤彦君は暫くして極く靜かに、『伴先生は毎日診て下さるが齋藤君は久しぶりだから、どうか見て呉れたまへ』と云つた。僕は伴さんから聽診器を借りて型のごとくに診察をした。その間赤彦君は我慢をして起直つてゐた。それからまた俯伏してしまつた。暫くして僕は、『畫伯も、岩波主人も來てゐるから、どうか會つて呉れたまへ』といふと、赤彦君は『どこに』と大きなこゑを出して顔をあげた。そして黄色の大きな眼を睜つた。『此處に一しよに來た』といふと、今度はただ頷いた。そこに平福・岩波・土屋の三君が入つて來、中村・藤澤の二君も交つて談笑常の如くにした。赤彦君は新來の客には一々丁寧に會釋をし、をかしい時には俯伏した儘笑つた。それから、『若

い連中も來てゐるから會つて呉れないか』といふと赤彦君はただ點頭いた。そこに加納曉、結城哀草果、高田浪吉、辻村直の諸君が入つた。赤彦君は一寸うなづき、『おれはなるたけ物を云はぬが、君等はいろいろ話してくれたまへ』と云つた。それでも種々歌壇についての應酬などをも云つた。氣になると見えて發行所のことなどをも云つた。それから、『おれも生きられるものなら生きたいのだが』といふ幽かなこゑも聞えた。その間に僕等に茶を饗することを命じたり、ぼんかんを持つて來て食はせることを命じたり、いろいろ細かいところに氣が付いてゐた。そして僕等は諏訪湖からとれる寒鮒の煮たのを馳走になり、酒をも飲んだ。これは一々赤彦君の差圖によつたのであつた。僕等は病床の邪魔をしたことを謝しながら、それでも二回まで會つた。その時赤彦君は『何だかこれではあつけないやうだな』と云つた。僕等は、明日二たび邪魔するだらうことを告げて柿蔭山房を辭した。

その晩、急に氣のゆるんだやうにおぼえて、みんなは布半旅館で馬肉を食ひ、坐り相撲を取り、將棋などを差した。百穂畫伯は赤彦君の病顔の寫生圖を作つた。夜更けて温泉に浴し、靜かに眠らうとしたが、心が落付いて來ると赤彦君の顔容が眼前に髣髴としてあらはれて來た。諏訪の諸君も、それから中村憲吉君も、數日來の張りつめた心に幾分の緩みを得て、そして酒に醉うたのであつた。森山汀川君は今夜向うにつめてゐる。藤澤君は夜更けてから向うに宿りに行つた。

四

三月二十三日午前、皆して二たび柹蔭山房に行つた。ゆうべ、百穂畫伯の『丹鶴青瀾圖』の寫眞を赤彦君が見たときのことを森山汀川君が話して呉れた。赤彦君は努力して兩手を張つてそれを見た。そして、『これはたいしたものら

しい』と云つた。それから、『どうも寫生に徹したものだ』とも云つたさうである。そこで、けふも赤彦君の枕頭でその繪の話などをし、時に諧謔談笑した。午餐には諏訪湖の鯉と蜆とを馳走になつた。これは、『どうも何もなくていけないが、鯉と蜆でも食べて行つてくれたまへ』といふ赤彦君の心盡しであつた。靜かに籠つてゐたい赤彦君の病牀を邪魔したのさへ心苦しい。然るに赤彦君は苦しいうちにかういふ心盡しをされるのであつた。僕等は悉く馳走になつた。

午後三時に伴さんが見えて、注射を二とほりされた。僕もそのとき同坐した。注射の一つは强心の方の藥で、一つは神經痛のための藥であつた。この注射は赤彦君から進んで所望されるので、今朝から催促されてゐたものである。それから一時間ばかり經つて僕等は二たび病牀を見舞つた。その時には赤彦君は珍らしく機嫌好くていろいろの話をした。これは强心の方の藥にコフエンが入つてゐるので、それが神經に働いたためであらうか。角館中學校の校歌の話にな

つたとき、『つまり茶話會などの時に歌ふのもあつていいですね。何とか謂つた。佐竹義敦、小田野直武は日本洋畫の紅二點、といつた調子ですね。デカンショ式でも好し。男美術に女の美術、美術々々で苦勞する、と云つた調子ですね』『天にそびゆる秋田の杉も巖を貫く根元から。それから、行つて見たかや田澤の湖へ、そこの浮木の下のみづ。かういふのは幾らでも出ます。校歌の方は一遍妻に書かせてみます』こんなことを赤彦君は俯伏しながら云つたので、皆が愁眉を開いて喜んだのであつた。けれども赤彦君は、このごろ眠りと醒覺との界で時々錯覺することがあつた。ゆうべあたりも、『おれの膝に今誰か乘つてゐなかつたか』などと問うたさうであつた。

そこで、赤彦君は皆に茶を饗することを命じた。その間に赤彦君は冷水を音させながら飲下して、『實に旨い。これが一等です』などとも云つた。僕は、この分ならば赤彦君の壽命は三月一ぱいは保つであらう。そして短歌の方の製作

も幾つか出來るだらうと思つて、祕かに喜んだのであつた。そして、四月の四日過ぎには少し暇になるであらうから、その時また出直して來て邪魔するなどとも云つた。けれども僕の眼識は欲目のために鈍つてゐて、赤彦君は三月盡を待たずに歿し、短歌の製作も『犬の歌』以後は絶えたのであつた。

僕等は赤彦君のまへに僞を言ひ、心に暗愁の蟠りを持つて柿蔭山房を辭した。旅舍に著いて、夕餐を食し、そして一先づ銘々歸家することに極めた。それまで湯に入るものは湯に入り、將棋を差すものは將棋を差した。心が妙に興奮してゐて、思はぬ所ではしやいだりしたのであつた。

五

その夜十一時幾分かの上諏訪發の汽車で、中村憲吉君は攝津に向ひ、僕等は東京に立つた。平福百穗、岩波茂雄、土屋文明、高田浪吉の諸君同道である。

朝六時頃新宿驛に著くと、家根瓦の上に霜が眞白に置いてゐた。今ごろなんだつてこんなにきびしい霜だらう。さうおもひながら僕は家に著いた。家には父母も妻も誰もゐなかつた。これはゆうべ妹の死報に接して、その方につめかけてゐたのであつた。妹は、ゆうべ僕らが上諏訪を立つて少し來たころに歿したのである。僕は實に混亂せんとする心を無理におししづめて暫く眠つた。それから外來診察をし、溜まつてゐる手紙端書を少し書いた。そこへ、今井邦子さんから電話がかかつて、どうしても一度、島木先生にお目にかかりたいといふことであつた。僕は直ぐそのことを否定した。今井さんは涙を流してゐる風であつた。兎も角今夜アララギ發行所に來てもらひたい旨をいつて電話を切つた。

午後に僕は妹を弔ひに行つた。妹は安らかな顏をして死んでゐた。妹が生んだ大きい方の女の子は珍らしい客が來るので切りにはしやいでゐるのも、ひどく僕を感動せしめた。夕刻に妹の家を辭して、途中で蕎麥を食ひ、その足でア

ララギ發行所に行つた。

發行所で今夜は、同人の重立つた人々に來て貰つて、今日まで祕して居つた島木赤彦君の病氣の經過を報告しようとしたのであつた。席には土屋文明君、橋本福松君もすでに見えてゐた。僕は同人の重だつた人々に赤彦君の疾病の經過の大體を話し、一月廿一日に伜さんから胃癌の宣告を受けたこと。二月二日に胃腸病院の神保孝太郎博士の診察を受けたこと。次いで佐藤三吉博士の診察を受けたこと。今はすでに重篤の狀態にあることをも云つた。そして、赤彦門下の三人の女流は岡麓さんと一しよに明日信濃に立つこと。そのほかの諸君は病氣の邪魔になるから行かぬことを約したのであつた。同人のうちにはこらへ切れない程赤彦君に會ひたい者もゐたが、僕は、赤彦君の壽命は三月一ぱいは保つやうに思はれたので、强ひてさう約束してもらつたのであつた。僕はなほその席で、これまで口を緘して赤彦君の病氣を通知しなかつた訣をも話した。

『實は發行所に起臥してゐる高田浪吉君にも知らせなかつたのだから』といふやうなことも其時附加へたのであつた。夜ふけてから僕は家に歸つた。

翌廿五日午過ぎの新宿發の汽車で、岡麓さんは今井邦子さん、築地藤子さん、阪田幸代さんの三人を連れて信濃に立つた。午後に僕はアララギ發行所に行き、赤彥君と親交のあつた二三の方々に赤彥君の病のすでに篤きことを告げた。なほ數人の方々に手紙を書かうとしてゐるところに、發行所宛に赤彥君危篤の電報が屆いた。僕は手紙を書くことをやめて家に歸つた。家にもやはり電報が屆いてゐた。その夕すぐさま岩波茂雄さんは信濃へ立つた。夕食後、アララギ發行所に行くと土屋文明君はじめ七八人の同人が集まつてゐた。留守居萬事を土屋文明君、高田浪吉君に賴み、十時幾分かの汽車で新宿驛を立つた。橋本福松、高木今衞、馬場謙一郎の三君同道した。夜が更けても目が冴えてなかなか眠れない。甲府驛で辨當を買つて食つた。

『おや。雪だ雪だ。』暫くして汽車が信濃に入つたとおもふころ、かうひとりが云つた。

『成程たいへんな雪だ。いつこんなに降つたかな。ゆうべあたりかも知れんな』かうまた一人が云つた。二日まへ此處を通つた時には雪はすつかり消えてゐたからであつた。

『おや。まだ降つてゐますよ。吹雪ですよ』『なるほど、こいつはひどい。かうして見ると信州の氣候はやつぱり鋭いんだね』こんなことをも云ひ合つた。島木赤彦君の息は既に絶えてゐるだらうとも思ひながら、こんな會話をするのであつた。曉天に近い信濃の國は一めんの雪で蔽はれ、それを烈風が時々通過ぎて、吹雪の渦を起させてゐるのであつた。

六

三月二十六日午前五時四十分に、四人は急いで上諏訪の停車場で降りた。町の家々は、未だひつそりとして居る。雪のさかんに降るなかを四人は布半旅館にたどりついて、戸を破れる程たたいた。

布半には東京から來た人々はもう誰も宿つてゐなかつた。赤彦君はもう駄目に相違ないといふ豫感が強く僕の心を打つたが、女中は、守屋喜七さんの宿つてゐられることを告げたので、四人は守屋さんの部屋になだれるやうにして入り込んだ。守屋さんは、赤彦君の息のまだ絶えないでゐることを語られた。赤彦君の親しい友である守屋さんは病をおして長野から來てゐたのである。

四人は女中をせきたてて、人力車を雇つてもらつた。雪の降るなかを人力車は走るけれども、それがもどかしい程遲い。高木村の入口で人力車から降りて坂をのぼつて行つた。息を切らし切らし家に著いた時には、もう雪は小降りになつてゐた。入口から直ぐの部屋には昨夜來赤彦君の枕頭をまもつた人々の一

部が疲れて眠つてゐる。森山汀川君は直ぐ僕たちを赤彦君の病室に導いた

　赤彦君は今は仰臥してゐる。さうして、純黄色になつた顔面から、二日前に見たときのやうな縱横無數の皺が全く取れて、そのために沈痛の顔貌は極く平安な顔貌に變つてゐる。そして平安な息を續けてゐるけれども、意識はすでに清明ではなかつた。時々眼を半眼に開き、瞳はもはや大きくなつてゐた。

　主治醫の作さんは、きのふ以來歸宅せずに全く赤彦君の枕頭を護られたのであつた。作さんはかういふことを語られた。赤彦君はきのふ迄は、いつもどほり神經痛のための注射を要求されたさうである。『今日もやはり注射をしませうか』と問うたとき、『もちろん』と答へたが、それが非常に幽かなこゑであつたさうである。今までは神經痛のために仰臥することが出來ずに、おほむね炬燵に俯伏になつてゐたのが、昨夜以來は全く仰臥の位置の儘だといふことである。きのふ以來、急に脈搏が惡くなるので、虚脱の來るのを恐れたといふことと

である。さういふことを作さんは語られた。昨夜十二時過ぎに狀態が惡くなつて、みんなが枕頭につめかけたのであつたが、それが少しく持直して今日に及んだのであつた。

藤澤古賀君はかういふことを話して呉れた。きのふ、岡麓さん、今井邦子さん、築地藤子さん、阪田幸代さんの見えられたとき、『先生。岡先生がおいでになりました』といふと、赤彦君は辛うじてかうべを起して、銘々に點頭いたさうである。そして『ありがたう』といつたが、それが恐らく最後の言葉であつたのであらう、といふことであつた。

それからかういふことも話して呉れた。廿三日、僕等友人が皆辭して歸つた日である。その日の夕食後、長女初瀨さんが、『今夜はお父さんはえらい樂のやうだね』と云つたさうである。さうすると赤彦君は、『大敵退散した』と云つて笑つたさうである。『大敵』といふのは、赤彦君が靜かに靜かに籠つてゐた

かつた病牀に、どやどやとつめかけた平福・岩波・中村・土屋・僕その他の友人、門人を謂つたのであつた。さうして赤彦君はつづいて、『來る人も遠いところを容易ではないよ。感謝しなければならないよ。齋藤はおれの體を氣にして來て呉れたし』と云つたさうである。その言葉は遲く、切れ切れで、幽かなのである。一語いふにも骨が折れるのである。

炬燵に俯伏して頭のところに手を組んでうつらうつらしてゐた赤彦君は、その夜の十時過ぎに居合せた家族、親戚の皆を枕頭に呼んで、『今晩おれはまゐるかも知れない』と云つたさうである。併し暫らくすると、枕頭でみんなに茶を飲ませ、『これで解散だ』といつたさうである。それが廿三日夜のことであるから、廿四日なか一日置いて、廿五日には意識がすでに濁りかけたのであつた。

廿六日は午になり午後になり、赤彦君の狀態は刻々に變つて行つた。主治醫

は、三時間おきに强心の藥を注射した。次男周介君は、いま入學試驗に行つて居りけふの正午までに體格檢査が濟む筈である。そして直ぐ汽車に乘れば今夜の三時に上諏訪驛に著く筈である。それまで赤彦君の息を斷たせまいといふ主治醫の念願であつた。そこで夕刻、リンゲル氏液五百瓦をも右側大腿の內側に注入した。それから、息のあるうち寫眞も撮りたい。それから藤澤古實君が土を用意して來て居り、息のあるうち恩師の顏を塑にとりたいといふので、夫人不二子さんの許を得て、寫眞も撮り、面塑も出來た。そして廿六日は暮れた。

　夕食後、九時になり、十時になり、十一時になつたころ、息も脈も細り體が冷えかけた。そのうち夜半を過ぎたので一まづ皆が枕頭を去つて休むことにした。主治醫の伴さんと僕と交る交る容態をまもつてゐたが、ふたりも少し休むことにした。午前二時に上諏訪驛まで周介君のむかひに行くやうに人を賴み、それから脈搏、呼吸の方を初瀨さんに看てもらふやうに賴み、僕もそのまま布團

をかぶつてしまつた。さて小一時間も經つたかとおもふころ、しきりに赤彦君を呼ぶこゑがする。それは不二子さんのこゑである。それから初瀨さんのこゑである。それから周介君のこゑである。しかし、赤彦君は一言もそれに返辭をしない。呼ぶこゑは幾たびか續いて、それに歔欷のこゑが加はつた。僕は夢現の間にそれを聞いてゐるのであるから、何か遠い世界の出來事のやうに思へる。痛切に感じてゐるやうで、實は痛切に感じてゐない　けれども暫くそれを聞いてゐるうちに、僕は反射的に身を起して布團から顏を出した。これは何かの會釋でもするつもりであつたらしい。然るに僕が顏をあらはした時にはみんなの言葉が既に絶えてもとの靜寂に歸つてゐる。僕は急劇に明るい電燈の光を目に受けたので、一語も發せずに二たび布團をかぶつてしまつた。布團をかぶつてしまふと意識がだんだん晴れて來るのをおぼえた。そして先程の赤彦君を呼ぶこゑのことが寫象となつて意識にのぼつて來た。氣丈な不二子さんは僕等のまへに

つひぞ今まで涙を見せたことはなかつた。これは侍の女房の覺悟に等しい心の抑制があつたからであらう。然るに今は他人の盡くが眠に沈んでゐる。赤彥君の枕頭に目ざめてゐるものは皆血緣の者である。そして終焉に近い赤彥君を呼ぶこゑが幾つ續いても、赤彥君はつひに一語をもそれに答ふることをしない。血緣の者はいま邪魔なく、障礙なくして慟哭し得るのである。僕は布團をかぶりながら兩眼に涙の湧くのをおぼえてゐた。間もなく雞鳴がきこえ、曉が近づいたらしい。その頃から僕は二たび少しく眠つた。

七

廿七日の午前六時半ごろ、主治醫と二人で診察すると、脈搏はもはや弱く不正で結代があつた。息も終焉に近いことを示してゐた。そこで主治醫の注意によりみんなが枕頭に集つた。赤彥君は稀に齒ぎしりをし、唸つた。その唸が

十ばかり續くと、息が段々幽かになつて行つた。そして消えるやうになるかとおもふと、また唸がつゞいた。それがまた十ばかりつゞいてまた息が幽かになつた。そのうち八時になつたので、みんなが暫く休んで朝食をした。その間に赤彦君を看護つてゐたが、平安な顔貌に幾らか苦しみの表情が出て來た。それを僕が凝視してゐると、幾ばくもなくその表情が取れて行つて、もとの平安な顔になつた。ときどき唸があつて、それが矢張り十ばかり續いた。九時に脈搏が觸れなくなつたので、居合せた人々が盡く枕頭に集つた。

嚴父、夫人の不二子さん、健次さん、周介さん、夏樹さん、初瀬さん、水脈さん、妹の田鶴さん、弟の華穗さん、その他の血族。長野から來られた守屋喜七さん。諏訪の田中一造、五味繁作、森山汀川、兩角喜重、丸山東一、藤森省吾、兩角丑助、堀内皆作の諸君。東京から來た金原省吾、白水吉次郎、鹿兒島壽藏の諸君。京都から來た宇野喜代之介、竹尾忠吉の諸君。それに上に記した

岡麓、岩波茂雄、橋本福松、藤澤古實、高木今衛、馬場謙一郎、今井邦子、築地藤子、阪田幸代等の諸君。僕が姓名を知らずにしまつて、また問合せるのに時の無い約十名。あはせて約四十名が枕頭に集つた。北海道の令弟塚原瑞穂さん、それから小原節三、平福百穗、森田恒友、中村憲吉の諸君はいまだ途中にあつた。

赤彦君の安らかな顔貌は一瞬何か笑ふに似た表情を口脣のところにあらはしたが、また元の顔貌に歸つた。その時不二子さん以下の血縁者はかはるがはる立つて赤彦君の口脣を濡した。それから主治醫作さんの靜肅な診査があり、赤彦君の息は全く絶えた。時に、大正十五年三月廿七日午前九時四十五分である。

續いて朋友、門人の銘々が赤彦君の脣を濡した。その時僕等は、病弱のゆゑに、師の臨終に參ずることの出來ない土田耕平君をおもはざることを得なかつ

た。けふは天が好く晴れて、雪がどんどん解けはじめてゐる。友島木赤彦君はつひに歿した。痩せて黄色になつた顏には、もとの面影がもはや無いと謂つても、白きを交へて疎らに延びた鬚髯のあたりを見てゐると、柿の村人時代の顏容をたもひ起させるものがあつた。

念珠集



1 八十吉

僕は維也納（ウインナ）の敎室を引上げ、笈（きふ）を負（お）うて二たび目差（めざ）すパヴアリアの首府民顯（ミユンヘン）に行つた。そこで何や彼（か）や未（いま）だ苦勞の多かつたときに、故鄕の山形縣金瓶村（かなかめむら）で僕の父が歿した。眞夏の暑い日ざかりに畑（はたけ）の雜草（ざつさう）を取つてゐて、それから發熱（はつねつ）してつひに歿した。それは大正十二年七月すゑで、日本の關東に大地震（おほぢしん）のおこる約一ヶ月ばかり前のことである。

僕は父の歿したことを知つてひどく寂（さび）しくおもつた。そして晝のうちも床の

うへに仰向に寢たりすると、僕の少年のころの父の想出が一種の哀調を帶びて幾つも意識のうへに浮上つてくるのを常とした。或る時はそれを書きとどめておきたいなどと思つたこともあつて、ここに記入する『八十吉』の話も父に關するその想出の一つである。かういふ想出は、例へば念珠の珠の一つ一つのやうにはならぬものであらうか。

八十吉は父の『お師匠様』の孫で、僕よりも一つ年上の童であつたが、八十吉が僕のところに遊びに來ると父はひどく八十吉を大切にしたものである。讀書がよく出來て、遊びでは根木を能く打つた。その八十吉は明治廿五年舊暦六月二十六日の午すぎに、村の西方をながれてゐる川の淫淵で溺死した。

そのときのことを僕はいまだに想浮べることが出來る。その日は村人の謂ふ『酢川落ち』の日で、水嵩が大分ふえてゐた。川上の方から瀬をなしてながれて來る水が一たび岩石と粘土からなる地層に衝當つてそこに一つの淵をなして

ゐたのを『葦谷地』と村人が稱へて、それは幾代も幾代も前からの呼名になつてゐた。目をつぶつておもふと、日本の東北の山村であつても、徳川の世を超え、豐臣、織田、足利から遠く鎌倉の世までも溯ることが出來るであらう。『葦谷地』といふから、そのあたり一面に蘆荻の類が繁つてゐて、そこをいろいろの獸類が恣に子を連れたりなんかして歩いてゐる有樣をも想像することが出來た。明治廿五年ごろには山川の鋭い水の爲めにその葦原が侵蝕されて、もとの面影がなくなつてゐたのであらうが、それでもその片隅の方には高い葦が未だに繁つてゐて、そこに葦切がかしましく啼いてゐるころが今僕の心に蘇つて來ることも出來た。その廣々とした淵はいつも黝ずんだ青い水を湛へて幾何深いか分からぬやうな面持をして居つた。

　瞳を定めてよく見るとその奥の方にはゆつくりまはる渦があつて、そのうへを不斷の白い水泡が流れてゐる。その渦の奥の奥が龍宮まで屆いて居るといつ

て童どもの話し合ふのは、彼等の親たちからさう聞かされてゐるためであつて、それであるから縦ひ大人であつてもそこから餘程川下の橋を渡るときに、信心ふかい者はいつもこの淵に向つて掌を合せたものである。その淵も瀬に移るところは淺くなつてその底は透き徹るやうな砂であるから、水遊する童幼は白い小石などを投げ入れて水中で目を明いてそれの拾競をしたりするのであつた。

　舊暦の六月廿六日は『酢川落ち』の日であつたけれども、もう午過ぎであるから多くの人は散じてしまつて、恰も祭禮のあとの様な靜かさが川の一帶を領して居た。弱くて小さい魚は死骸となつて川の底に沈み、なかには浮いて流れてゐるのもある。割合に身が大きく命を取留めた魚は川下に下れる限り下つたのもあり、あるものは眞水の出づるところにかたまつて喘いでゐるのもある。さういふ午過ぎに十四ぐらゐを頭に十又は九つ八つぐらゐまでの童が淵の隅の割合淺いところに水遊をしてゐた。水遊と云つてもふだんの日の水遊とは違つ

て、一方には底に潜つて行つて死んだ小魚を拾ふのもその樂の一つなのである。間が好くば弱つて喘いでゐる大きな魚をつかまへることが出來たりするので、童らは何時までも陸に上らうとはしない。

泳げるものは最も氣味の悪い深いところまで泳いで行つて、渦のところを二まはり三まはりぐらゐ廻つて來るのが自慢の一番と謂つてよかつた。すると淵の向う岸に八十吉がたつたひとり淺瀬のところで何かしてゐるのが見えた。向う岸と云ふと童らの居るところからは平らな光つてゐる水面を中に置いて可なりの距りがある。八十吉は唯一人で小魚でも見つけて居るのかも知れんと思つてから五分間位も經つた頃であらうか。岸から少し淵に入つた鏡のやうな水面に人の兩方の手が五寸ぐらゐひよいと出たのが見えた。童らの驚く間もなく、人の兩方の手が二たび水面から五寸ばかり出た。ほんの刹那である。

そのとき十四になる童が水中に飛込んで泳ぎ出した。稍しばらく泳いでゐた

が人の兩手が水面から出たあたりに行著くと、頭の方を下にして水中ふかく潛つて行つた。その童の兩の足の活潑な運動も見えなくなつて、いよいよ水中ふかく潛つて行つたことを觀念すると、こんどはみんな息を屏めて、小さい心臟の鼓動をせはしくしてそこの水面を見てゐた。水面は全く水の動搖を收めてこの事件を毫しも暗指してゐる樣な氣色がない。やや暫くすると、童はつひに空しく水面に浮上つて來て、しきりに手掌で顏を撫でた。その時である、はじめて事の輕々しくないといふ一種の不安が僕らの心を壓して來て、そこに居たたまらないやうな氣がした。童は二たび身を逆まにして水中に潛つて行つた。けれども暫くのちまた手を空しうして水面に浮上つたとき、水面にあつて、人を呼べとこゑを立てた。それから童らはひた走りに走つて田畑に働いてゐる大人を呼びに行つた。

村の人々が數十人集つて、かはるがはる淵の中に飛込んだのは、人の兩手が

見えてから三十分ぐらゐも經つてゐたであらうか。大人が息こんで水中に潜るのであるが、八十吉はなかなか見つからない。入りかはり立かはり水中にもぐつて、また三十分間ぐらゐも經つた頃であつたらうか。一人の若者がたうとう八十吉を肩にかついで水面に浮上つて來た。若者は何か鋭く叫んで、その肩には生白い人の體がぶらさがつて、首の方がだらりとして腕などは日にからびた葱の白いところを見るやうな、さういふ光景が電光のごとくに僕に見えた。

『お關の婿だ。あれあ』

『お關の婿あ八十吉を見つけた』

かういふこゑが聞こえた。お關は村はづれに小さい店を開いてそこで揚物だの蒟蒻煮などを賣つてゐた。八十吉を引上げたお關の婿といふのはそこへ他村から入婿に來た若者のことであつた。この若者は其の數年後隣村の火事に消防に行つて身を挺んじて働いたとき倉の鉢卷が落ちてつひに死んだ。八十吉が水

の中からやうやく上つてから暫くは、人間の重苦しい鋭い一種の叫びごゑがそのあたり一帶にきこえて居たが、間もなく元の靜寂に歸つた。

藏王山の麓に湧出る硫黃泉の湯尻が、一つの大きい瀧瀨をなして流れてゐる。それが西に向つて里へ里へと流れ下つて、金瓶村の東境に出るとそこから急に折れて北へ向つて流れる。此の川の川原の石はいつも白い樣な色合を帶びてゐて水苔一つ生えない。淸く澄んだ流であるが味が酸いので魚も住まず蟲のたぐひも卵一つ生むことをしない。又この水を田に引くと稻作に害があるので、百姓にとつて此の川は一つの毒川だと謂つてよい。これを酢川と何時の頃からか名づけて來た。それから、金瓶村の西方を流れる川は米澤境の分水嶺から出てくるもので、山形の平野に出てから遂に最上川に入るのであるが、これは淡水であつて多くの魚類を住まはせてゐる。然るに昔、雨降の後に洪水が出た時、村の東境まで西へ向つて流れて來た酢川が、北へ折れる處で北へ折れずにそこ

を突破したから、村の西方を北へ流れてゐる淡水の川に、酢川の水が混つてしまつた。いはば西洋文字のHの樣な格好になつたのである。すると其の川に住んでゐる魚族が一度にむらがり死ぬといふ現象が起つた。さういふ害のある水が淡水の川に混つては困るから、村では破れたところに堤防を築いてその混入を防いだのである。然るにいつの頃からであらうか。時代はずつとずつと溯るであらう。深夜人無きに乘じてその堤防を破つて、故意に酸い水を淡水の川に灑いだものがあつた。その酸い水が混じると、魚の族は眞黑になるほど群がつて川下へ川下へとくだる。それを梁で取れるだけ取つて、曉にならぬうちに家に歸つて知らんふりしてゐるのである。これを『酢川落ち』と唱へる。

曉に先立つて草刈に行く農夫の一人二人がそれを見つけて、村役場へ屆ける。村役場では人足を出して堤防の修理をする。然るに一方では村の老若男女童男童女が我先にと川へ出かけて行つて、弱り切つてゐる魚を捕まへるので、つま

り餘得にありつくのである。この『酢川落ち』はさうたびたびは無い。また村人も一種の樂みとおもふので、役場がそれを大目に見て、罪人を發見しようと努めるやうなことはない。『酢川おとし』の行爲は法に觸れるべきものであるが、『酢川おち』の現象は村民にとつては無くてはならぬ、謂はば一つの年中行事の如き觀を呈するに至つた。それがずつとずつと古い代から續いて來たのである。泳を知らない、常には川遊などをしない八十吉が、この『酢川おち』の日に、ただのひとりで川に遊びに來てゐたのである。

　八十吉は終に蘇らなかつたことを下男が來て話して呉れた。八十吉のこの事があつた時父は他村に用足しに行つて、日暮時に入つてやうやく歸つて來た。父の顔を見るや否や、あわてて僕は父の側に行き、八十吉の溺れる有様、それから八十吉を水から揚げてから、藁火をどんどん焚いて、身の皮のあぶれる程八十吉を温めたこと、八十吉の肛門から煙管を入れて煙草のけむりを骨折つて

吹き込んだこと、さういふことを息をはずませながら話をした。

『八十吉の尻の穴さ煙管が五本も六本もずぼずぼ這入つたどつす。ほして、煙草の煙が口からもうもう出るまで吹いたどつす。』

かういふ僕の話を聞いてゐた父は、どうしたのか一ことも云はずにいきなりと僕をにらめつけるやうな顔をして、僕は豫期しない父の此の行爲に驚愕するいとまもなく、父はあたふたと著物を著換へて出て行つてしまつた。祖母も母もみんな八十吉の家につめ切つてゐた時である。

僕は父の歿した時、民顯の假寓にあつてこのことを想出して、その時の父の顔容を出來るだけおもひ浮べて見ようと努めたことがあつた。歸國以來僕は心に創痍を得て、いまだ父の墓參をも果さずにゐる。家兄の書信に據ると八十吉は十二で死んでゐるから僕の十一のときであつた。八十吉は金瓶村寶泉寺に葬られてあつて、圓阿香彩童子といふ戒名をもつてゐる。

2 痰

父は長い間、痰を煩つてゐた。小男で痩せた父が咳込んで來ると、少し前かがみになつて、何だかお腹の皮でも捩れるやうに咳込むのがいかにも苦しさうであつた。ところが、その苦しさうな咳が一とほり濟むと、イッヘ、イッヘ、イッヘ、イッヘといふ咳が幾つか續いて、それから、イッシ、イッシ、イッシイッシといふ咳になる。その工合がどうもをかしいので、幼童の僕がその眞似をしたものであつた。佛壇の勤めなどがまだ終らぬうちに父が咳込んで來てさういふ異様な咳になると、勝手元で働く母の傍にくつついてゐながら僕がイッシ、イッシ、イッシ、イッシといふ眞似をして、母から睨まれたりするけれど

も、母もたうとう笑つてしまふのであつた。

年に一度、多くは冬を利用して人形芝居が村にかかつた。夕飯を終へてから翁媼も、婦も孫も、みんな、深く積つた雪がかんかんと氷る道を踏んでその人形芝居を見に行つた。時にはひどい吹雪の夜のことなどもあつた。その人形芝居には、美しい娘をさらつてゐる大猿を一人の侍が來て退治したり、松前屋五郎兵衛が折檻されて血を吐いたり、若い女房がひとりの伴を連れて峠を上つて行くと、そこに山賊が出て來たりした。杉の木立の向うは暗闇で星が輝いてゐるやうにも拵へてあつた。ある晩に父は僕を背中に負つてその人形芝居を見に行つたときにも、父はひどく咳込んでいかにも困つた様子であつたが、僕がまたそれの眞似して、それでも穉ごころに惡いことをしたやうな氣持でゐたことをおぼえてゐる。

父の痰持は僕の生れる前からであつた。祖父が隱居してから樂みに飼つた鯉

が、水が好いので非常に殖え、大きな奴がいつも澤山泳いでゐた。雪がもう二三度降つてからのことであつたさうである。大雪にならぬ前に、その鯉池の浚ひをする方がいいといふので、寒さの嚴しい日に父は若者を督促して働いたのが本で、たうとう痰になつてしまつたといふことであつた。痰になつてからも父はやはり働いてゐた。僕の生れたのは父が痰になつてから後のことである。僕は小さい時は腺病質でひよろひよろしてゐた。父が痰でなやんでゐたときの子だからだなぞと祖母の云ふのを聞いたことがある。

　父は痰持であつたから、水飴だの生薑の砂糖漬などを買つてしまつて置いた。水飴は隣の寳泉寺からよく貰つて來たやうである。寳泉寺では村人が餅を搗くたびに持つて行くので、餅の食べきれないときにはそれを水飴に作つた。いつか寳泉寺では、琥珀色の透とほる水飴が甕に一ぱいあるのを持つて來て分けて呉れたことを僕は覺えてゐる。父の居ないときに時折兄と僕とがその水飴を盗

んで嘗めた。
　或る時僕は生薑の砂糖漬をも盗んで來たことがあつた。そして砂糖だけを嘗めて生薑を外に棄てた。外には雪が一めんに降積つて居る。生薑が雪の上におちると二三四の雀が勢よく飛んで來てそれを爭つたことをおぼえてゐる。痰と生薑とに何かの因緣があるやうに思へたがそれが穉い僕には分からない。それから大分經つて僕は東京にのぼるやうになり、好んで浪花節を聞いた。浪花節かたりは、『せめて生薑の一へげも』といふことをうたふ。その度ごとに僕は父の痰のことを追憶した。醫學を學んでから僕は漢方または民間醫方に興味をもつたこともある。さて生薑のことを注意するに、『思邈の云く。八九月に多く食へば、春にいたりて眼を病む。壽を損じ筋力を減らす。妊婦これを食へばその子六指ならしむ』なんぞと說明したのもあつて僕を驚かしたが、多くの漢醫方には、生薑に開痰の作用あることが說いてある。痰火の條に薑汁を用ゐる

ことゝもあり、治㆓寒痰咳嗽㆒といふ句もあり、導痰丸。導痰湯などの處方もあるので、父が砂糖生薑をしまつてゐたことが、何だか一種の哀ふかいやうな氣持で僕の心に浮んでくることもあつたのである。

父は三山や藏王山あたりを信心して一生四足を食はずにしまつた。僕の寢小便がなかなか直らぬので、牛が好い、馬が好い、犬が好いなどと教へて呉れるものがあつたが、父はわざわざ町まで行つて、朝鮮人蔘二三本買つて來てくれたことをおぼえて居る。それであるから、兄が十五になつて、若者仲間に入つてから間もなく、大雪が降つてそれの固まつた或る晩に、鮭の頭に爆發する爲掛をして、狐六疋を殺した。六疋の狐は銘々行くところに行つて死んでゐたさうである。垂れてゐる血を辿つて行くと其處に狐が死んでゐるので、一つなどはそれでも、林の中の泉の傍まで行つてゐたさうである。兄達五六人の若者は夜業の藁爲事が濟んでからそれを煮て食つた。兄は爆發爲掛の旨く行つたこと

を得意に話しながら、どうも少し臭くて駄目だな。牛よりも旨くないな。こんなことを話した。それを次の日父が聞きつけて非常に怒り、何でも狐のことをひどく勿體無がつたことをおぼえてゐる。

　父は痰を病んでから、いつのまにか何かの神に願を掛けて好きなものを斷つことを盟つた。ただ、酒も飲まず煙草も吸はぬ父は、つひに納豆を食ふことを罷めた。幾十年も納豆を食ふことを罷めて、もう年寄になつてから或る日納豆を食つたが、どうも痰に好くない。また痰がおこりさうだなどと云つたことがある。父はその時から命のをはるまで納豆を食はずにしまつただらうと僕はおもふ。父は食べものの精進もした。併しさういふ普通の精進の魚肉を食はぬほかに穀斷。鹽斷などもした。みんなが大根を味噌で煮たり、鮭の卵の汁などを拵へて食べてゐるのに、父はただ飯に白砂糖をかけて食べることなどもあつた。併し僕には何のために父がそんな眞似を爲るかが分からなかつた。

3 新道

六歳ぐらゐになつた僕を背負つて、父は早坂新道を越えて山上へ向つて歩いた。雨あがりの道はよく固まつて、天がよく晴れても塵の立ちのぼるやうなことはない。兩側に密生した松林がしばらくの間續いてゐて寂しいやうである。人どほりの尠い朝のうちで、街道は曲折のなるべく無いやうについてゐるから、遙か向うから人の來るのが見えてその人に逢ふまでには大分かかる。それからその人が後の林の角に見えなくなるまでも大分かかる。さういふ街道を父はいい氣持で歩いて行つた。時節は初夏の頃ではなかつたらうかと思はれる。さういふ記憶は朦朧としてゐるが、松蟬でも鳴いてゐたやうな氣持もする。

上山は温泉場で、松平藩主の居城のあつたところである。御一新後はその城をこはして、今では月岡神社の鎮座になつてゐる。後年俳人の碧梧桐がここを旅して、『出羽で最上の上山の夜寒かな』といふ句を殘した。僕の村からこの廣い新道を通つて上山まで小一里ある。そこまで村の人が大概買物などに行つた。

さういふ街道を父は獨占したやうなつもりで街道の眞中を歩いて行つた。然るに稍しばらくすると、僕のうしろの方で人力車の車輪の軋る音がした。さうしてヘエ、ヘエ、といふ懸聲がした。これは避けろといふ合圖に相違ないから、父は當然避けるだらうとおもつてゐると依然として避けない。その刹那にどしんといふ音がして人力の梶棒がいきなり僕の尻のところに突當つた。父は前にのめりさうになつた。

すると父は突嗟に振向きしなに人力車夫の頂のところをつかまへて、ぐいぐ

い横の方に引いたから人力車がくつがへりさうになつた。人力車夫は慌しく梶棒をおろさうとしたが父はなほ攻勢をゆるめない。人力車夫はつひにた方になつて倒れた。父は人力車夫の咽あたり頂のあたりを二三度こづいたが、それでも人力車夫は再び起き上つて父と爭はうとした。そのとき乘つてゐた老翁が頻りにそれを止め父に詫をした。

父は威張つた恰好で尻を高くはしより再び街道の眞中を歩いた。その老翁を乘せて後から來た人力車は今度は僕らを避けて追越して行つた。追越すときに車夫は何か口の中で云つてゐたが父はそれにはかまはなかつた。僕は事件のあつた時父の背中で聲を立てて泣いたことをおぼえてゐる。

僕は明治四十二年に熱を病んで、赤十字病院の分院にゐたときに、終日少年の頃の回想に耽つたことがある。そしてなぜあの時、人力車夫が梶棒をあんなにひどく突當てたであらうと考へたことがある。この文章を書いてゐる現在の

僕がやはりそのことを思ふのと同じであつた。

この街道の開通されるまでは、小山を幾つも越えて漸く上山に行著くのであつた。そこは如何にも寂しい山道で、夜遊に上山まで行く若者が時々道が分からなくなつて終夜そのあたりをさまよふといふやうなことがあつた。上山から魚を買つて夜道すると屹度道が分からなくなるといふこともいはれた。夜更けてから、ほうい。ほうい。といふこゑがその山道あたりから聞こえるのはさう稀なことではなかつた。

一つの小山の中腹に大きな石が今でもある。それを狼石と稱へてゐるのはそこには狼が住んでゐて子を生むと、村の人が食べ物を持つて行つてやる。小さい狼の子が出て來て遊ぶといふやうなことがあつて、夜半などに鋭い狼のこゑがよく聞こえたものださうである。その石の近くを上山へ行く山道が通つてゐた。この山道には狐狸の變化に關する事件がなかなか多く、母も度々さういふ話を

した。

そこへ御一新が來、開化のころがからういふ山の中にも這入つて來るやうになつた。三島縣令が赴任するとたうとう小山の中腹を鑿開いて山形から上山を經て米澤の方へ通ずる大街道が出來た。早坂新道と村の人が稱へたのはこの新道である。この新道は僕の生れるずつと前に開通されたものだが、連日の人足で村の人々の間にも不平の聲が高かつた。ある時、縣令の臨場の際に人足に寢そべつてゐる者のあるのを役人が咎めると、『人としてねぶたきことはあるものを吞にはゆるせ三島縣令』といふ一首を差上げたなどといふ逸話も傳へられた。その男は僕が東京に來てからも年取つて未だ存命して居つたが餘程前に亡くなつた。

さて新道が出來ると人力が通る。荷車は干魚などを積んで通る。郵便脚夫が走る。後には乘合馬車が通り、新發田の第十六聯隊も通つた。たまには二頭馬

車などの通ることもあり、騎馬の人の通ることもある。珍らしいものの通るときには、寶泉寺まで走つていつて遠目鏡でそれを見た。

人力車夫が此の大街道を勢づいて走つてゐるときには心中に一種の誇があつただらう。恰もヴアチカノの宮殿を歩いてゐるときに何か胸が開くやうに感ずるが如きものである。僕の父にしてもさうである。父がこの大街道を獨占したやうにして歩いてゐたときには、そこにやはり不意識の矜尙があつたに相違ない。父の剛愎な態度は人力車夫の矜尙の過程に邪魔をしたから、梶棒をどしんと僕の尻に突當てたのである。その不意打の行爲が僕の父の矜尙の過程に著しい礙を加へたから父は忽然として攻勢に出でたのではなかつたらうか。

4　仁兵衛。スペクトラ

仁兵衛は謡の上手で、それに話上手であつた。仁兵衛はいつも日の暮方になると丘陵にのぼつて川に沿うた村だの山ふところに點在してゐる村だのを眺める。村の家から豐かに煙の立ちのぼるのを見極めると、仁兵衛はいつも著換してその家に行く。その家には必ず婚禮があつた。祝言の座に請ぜられぬ仁兵衛ではあるが、いつも厚く饗せられ調法におもはれた。仁兵衛は持前の謡をうたひ、目出度や目出度を諧謔で收めて結構な振舞を土産に提げて家へ歸るのであつた。村の人々はその男を『煙仁兵衛』と云つた。

その仁兵衛が或る夜上等の魚を土産に持つて歸途に著くと、すつかり狐に騙

されてしまふところを父はよく話した。どろどろの深田に仁兵衞が這入つて酒風呂のつもりでゐる。そして、『あ、上燗だあ。上燗だあ』と云つてゐるところを父は話した。そこのところまで來ると父のこゑに一種の勢が加はつて子供等は目を大きくして父の顔を見たものである。父は奇蹟を信じ妖怪變化の出現を信じて、七十歳を過ぎて此世を去つた。

　寺小屋が無くなつて形ばかりの小學校が村にも出來るやうになつた。教員は概ね士族の若者であつた、なかには中年ものも居た。『窮理の學』といふことがそれらの教員の口から云はれた。父は冬の藁爲事の暇に教員のところに遊びに行くと、今しがた屆いたばかりだといふ三稜鏡を見せられた。さうして日光といふものは斯うして七色の光から出來て居る。虹の立つのはつまりそれだ。洋語ではこれをスペクトラと謂つて七つの綾の光といふことである。舊弊ものは來迎の光だの何のと謂ふが、あれは木偶法印に食はされてゐるのだ。教員は

信心ぶかい父のまへにかう云つて氣焰を吐いた。

　父は切りにその三稜鏡をいぢつてゐたが、特別に爲掛も無く、からくりも見つからない。しかしそれで太陽を透して見ると、なるほど七綾の光があらはれる。

　父は暫く三稜鏡をいぢつてゐたが、ふと其を以て爐の火を覗いた。すると意外にも爐の炎がやはり七つの綾になつて見える。父は忽ち胸に動悸をさせながら、これは、きりしたん伴天連の爲業であるから念力で片付けようと思つた。

教師様。お前はきりしたん伴天連に騙されて居るんではあんまいな。これを見さつしやい。お天道さまも、ほれから圍爐裏のおきも、同じに見えるのがどうか。からくりが無いやうにして此の中に有るに違ひないな。きりしたん伴天連おれの念力でなくなれ。

　かういつて、父は三稜鏡をいきなり爐の炎の中に投げた。教員は驚き慌てて

それを拾つたが、忿怒することを罷めて、やはり父がしたやうに爐の炎をしばらくの間三稜鏡で眺めてゐた。教員は日光と爐の焚火と同じであるか違ふものであるかの判斷はつかなかつた。教員の窮理の學はここで動搖した。父は威張つてそこを引きあげた。

　後年父は屢その話をした。文明開化の學問をした教員を負かしたといふところになかなか得意な氣持があつた。けれども單にそれのみではなかつたであらう。神を念じて穀斷鹽斷してゐたやうな父は、すぐさまスペクトラの實驗の腑におちよう筈はないのである。腑に落ちるなどと謂ふより反撥したといつた方がいいかも知れない。

　それからずつと月日が立つて、父は還暦を過ぎ古稀をも過ぎた。父は上山町のとある店先で、感に堪へたといふ風で、蓄音機の喇叭から傳つてくる雲右衛門の浪花節を聞いてゐたことがある。けれども、父はその蓄音機は窮理の學に

本づくものだといふことなどは追尋しようともしなかつた。スペクトラを退治した寫象なども無論意識のうへにのぼつて來なかつたのである。

5 漆瘡

村の學校が隣村の學校に合併されて、そこに尋常高等小學校の建つたのは、森文部大臣が殺されて、一二年も經つたころであつただらう。學校まで小一里あつた。雪の深い朝などには、せいぜい炭つけ馬が一つ二つ通るぐらゐなところで、道がまだ附いてゐない。雪が腰を沒すといふやうなことは稀でなかつた。子供等は五六人固まつてその深雪を冒して行くのであるが、ひどく難儀をしたものである。途中で泣出して學校に行著くまで默らなかつた子などもゐた。

けれどもそこを辛抱すれば、柳に銀色の花が咲くころから早春が來て、雪の

降るのがだんだん少くなつて來る。それから一月も立てば、麗かな天氣が幾日も續いて、雪がおのづと解けてくる。道は『雪解みち』になつて、朝のうちは氷つても午過ぎからは全くの泥道で、歩くのにまた難儀なのが幾日も幾日も續く。さういふ時には草鞋は毎日一足ぐらゐづつ切れた。八つか九つになつた僕はかうして毎日學校へ通つた。

それを通越すと、道の片隅の方などに乾いたところが見え初めてくる。それが日一日と大きくなり、向うの方に見えてゐた乾いたところと連續してしまふ。さういふ土の乾いたところを、子ども達は『草履道』と云つて、そこを踏んで躍上がつて喜んだ。

街道の雪が消え、日あたりの林の雪が消え、遠山を除いて、近在の山の雪が消えると、春が一時に來てしまふ氣持である。太陽はまばゆいやうに耀く。木の芽がぐんぐん萌えはじめる。苞をやうやく破つたばかりの、白つぽいやうな

芽だの、赤味を帶びたやうなものだの、紫がかつたものだの、子供等は道ぐさ食ひながらさういふ木の芽をぽきりと摘んで口の中で弄ぶものもゐる。雲雀は空氣を震動させて上天の方にゐるかとおもふと、閑古鳥は向うの谿間から聞こえる。楢、櫟の若葉が、風に裏がへるころになれば、そこに山蠶が生れて、道の上に黑く小さい糞を澤山おとすのであつた。

五六人總勢十人ぐらゐの子供等が、さういふ日に恣に道草を食つて毎日おなじ道を往反する。蟻の穴に小便をしたり、蛇を殺してその口中に蛙を無理におし込んだり、さういふ悪戯をしながら、時間が迫つてくると皆學校まで驅出して行つた。

然るにそれらの子供を威壓してゐる童子がひとりゐた。年はそのころ十一ぐらゐであつた。年かさも大きいし猛烈なところがあつて、村の學校の子供等を征服してゐた。周圍の子供等を引率して學校の授業も何もかまはずに山や澤に

出掛けるので、そのやり方が何處か猛烈なところがあつた。一度教員は忿怒して學校の梁木にその童子をつるして折檻したことがある。それは森文部大臣が東北の學校を視察して、山形から上山に行くために早坂新道を通られるといふ日であつた。僕らは文部大臣を敬禮するために四五日の間その稽古をし、滅多に穿くことのない袴などを穿き、中にはこれも滅多には著ぬ襯衣などを著たりなどして學校に行つたのであつたが、童子は何時の間にかさういふ子供等を引率して山に遊びに行つてしまつた。それであるから、文部大臣を敬禮する時がだんだん近づいてくるのに子供等が歸つて來ないといふのであつた。併し文部大臣の敬禮がどうにか間に合つて、僕等は早坂新道に整列し、人力車で通つた文部大臣森有禮に小さいからうべをさげた。教員はその日は平穩な風をしてゐたが、次の日にその童子を學校の梁木に吊して、鞭で續けざまに打つてみんなに見せたのであつた。それから間もなく森文部大臣が殺されたのだといふやうな

氣がする。さういふことは總てまだ學校の合併されない前のことである。學校が合併されてからは、その童子もやはり學校に通つて、おのづから周圍の子供どもを威壓してゐた。

美しく晴れた朝、その童子は僕らを合せた七八人の中心になり、思ふ存分道ぐさを食ひながら學校へ出掛けて行つた。硫黄泉を源とする酢川の橋から石を投げたりなんぞして、しばらく歩くと、道端に五六本の漆の木がある。これは秋には眞赤に紅葉したのであつたが、今は小さい芽が枝の尖端のところから萌えいでてゐる。

その漆の木のところに行くと、童子はみんなに列ぶやうに言附けた。そして自分で漆の芽を摘み取ると芽の摘口から白い汁が出て來た。童子はみんなに腕をまくらせて、前膊の内面のところに漆の汁で女陰と男根とを畫いた。女陰などといふとすさまじく聞こえるが、實は支那の古篆の『日』の字のやうな恰好を

してゐるものに過ぎない。男根でもさうである。皆 Präputium などが無く思ひきり單純化されたものである。中江兆民は癌に罹つて餘命いくばくもないといふとき、『一年有半』といふ隨筆を書いた。そのなかに慥か、『陰陽二物』の何のと云つて日本國を貶してゐたとおもふが、あれは無理だ。羅馬は無論巴里に行つても、倫敦、伯林に行つても、さういふ邪氣の無い繪はいくつも描いてある。この童子もただ邪氣の無い繪をかいたに過ぎない。童子はそれでも漆の芽を幾つか取換へたりなどしてそれを描いた。描いて貰ふと皆が聲を擧げて笑つた。そして汁の乾くのを促すために息を吹きかけたりなどした。

大小いろいろと描いて來て、僕の腕に小さいのを描いてくれた。それは今からおもへば降誕八日めに割禮した耶蘇の男根のやうな恰好であつたとおもへばいゝ。童子は最後に自分の腕に思ひ切り大きいのを描いておしまひにした。

次の日の朝みんなが集まつて腕の繪を見せ合つて大聲で笑つた。繪のところ

だけが黑くなつて乾いたから、きのふに較べてはつきりして來てゐる。然るに僕のだけは繪のところが黑くならずに赤くなつて少し腫れあがつてゐる。

その次の朝もみんなが繪を見せあふと、繪のところが益々黑くなつて乾いてゐるのに、たゞ僕のだけはゆうべから痒味が增して來、それに痛味が加はつて繪のところから汁が出はじめた。僕は授業をうける時にも痒いのと痛いのとでなやんで居た。さうすると、澤蟹をつぶしてつけると直るといふものがあつた。學校の裏は直ぐ澤になつてゐて、石を一寸避けると小さい蟹を幾つも捕へることが出來る。僕はそれをつぶして臟腑をかぶれかゝつてゐる腕になすりつけたけれども、赤く腫れて汁の出て來たところは今度は結痂して行つた。

繪のところだけが黑く結痂したから、直つたのかといふとさうでない。それだから風呂に入つた時などに、秘かにその痂を除いてみると、その下は依然として爛れて居つて深い溝のやうになつてゐる。そして次の日には二たびそこに

結痂するといふ具合でなかなか直らない。ほかの子供等は、さういふ女陰•男根圖のことなどはいつのまにか忘れて行つた。それはその筈で描いて貰つてからすでに一ヶ月餘も經過したのであるから剝げて取れてしまつたのが多かつた。縱ひ殘つてゐてもそんなものはもう珍らしくはなかつた。たゞ僕ひとりは毎日そのことで苦しんだ。そして痛いのを我慢して痂を除いてはそこに蟹の臓腑をつけてゐるに過ぎなかつた。痂を取つたところの潰がだんだん深くなるのに氣付いてもそれを母や父に打明けることが出來ない。僕は空しく一月を過ごした。

けれども、或時たうとうそれを母から見付けられその成行を一々白狀してしまつた。母は僕を父のところに連れて行つた、僕は恐る恐るすでに結痂した男根圖を父に見せた。父も母も共に笑つた。叱られるつもりのところ叱られなかつたので僕も大きなこゑを立てて笑つた。その晩に父はどろどろした油藥のやうなものを拵へて來て塗つて呉れた。さうすると二三日で痂が取れて行つた。

そこへまた油藥のやうなものを塗つて呉れた。ひどく苦んだ漆瘡の男根圖はかくのごとくにしてつひに直つた。瘡は極く『平凡』に癒えた。

『はじめは脫兎の如く』と云つておいて、そして、『をはりは處女のごとし』と云ふあたりは、味はつてみるとどうも旨いところがある。たゞ餘り陳腐になつてゐるから、今までそれを味はぬのであつた。その陳腐さは、レオナルド・ダ・ヴインチの畫いた、モナ・リザ・ジヨコンダの像のやうなものであつた。そして僕の漆瘡物語の結末が消えるやうにして無くなつてしまつたときに、この諺、警句をおもひ起したのであつた。おもひ起して味はつてみるとどうも言方に旨いところがあつた。僕は心中ひそかに滿足をおぼえた。レオナルド・ダ・ヴインチをおもひ起したのはかういふ訣である。

『凡そ兒童はその父の能力に就いてどう思惟してゐるか』といふことに就いて、ある時期には兒童は父の萬能を信ずることがある。さて時が經つと、兒童のま

へには父は追々と平凡化されて行く。僕の父もその數に漏れなかつた。僕が少しづゝ大きくなるに連れて僕の父も益々平凡化されたから、父が三稜鏡を炎のなかに投じた話などをしても僕は心中感服したことはない。然るに僕が漆瘡であれほど苦しんだ時に、父は極めて平凡にそれを直して呉れた。僕はその時、父には何か知らんやはり特殊の『能力』があるのではあるまいかと思つたのである。ここで父の平凡化は別な色合を以て姿を變へたのであつた。それから『平凡治癒』といふ概念である。これは實地醫家は必ず思當るに違ひない。疾は幾ら骨折つても癒えぬときがある。さうしてゐて癒ゆるときには極めて平凡に癒えてしまふ。即ち疾を『平凡治癒』の機轉に導くのが名醫である。

彼の童子から漆の汁で描いて貰つた繪がかぶれて二月も苦しんだけれどもそれは癒えた。癒えたが痂を結んだところが瘢痕組織で補はれたと見えてそこに痕が殘つた。その小さい男根圖の痕は、小學校を出て中學校に入り中學校を出

て高等學校に入るころまでは殘つてゐた。僕は風呂に入つたりするとその痕を凝視して追憶にふけることもあつた。然るにその痕はいつのまにかおぼろになつて行き今ではもはやその形を認めることが出來なくなつた。僕もそろそろ初老期へ近づいて來た。南獨逸の客舍で父の死報に接した時も僕は忽然として漆瘡のことを想出し、床のなかで前膊の内面を凝視したけれども形はすでになくなつてゐた。

　漆瘡に、生蟹黄調塗とか、蟹沫塗之とか、または蟹殼滑石研細摻之乾者蜜和塗などといふ療方のあるのは漢醫方に本づくのであつた。和文に漆まけを癒しとあるのも亦さうである。父の拵へて吳れたものはそんなものではなかつた。油藥のやうなどろどろしたものであつたが、その藥の色やなんかはどうしてもおもひ起すことが出來ない。そのあたりの父の顏も分からない。努めておもひ浮べようとすると、晩年の老いた父の顏のみが浮んでくるのである。

6 初詣

明治二十九年に丁度僕が十五になつたので、父は湯殿山の初詣に連れて行つた。その時父は四十五六であつただらうから現在の僕ぐらゐの年であるがもう腰が屈つてゐた。これは田畑に體を使つたためであつた。しかしそれまで幾度となく湯殿山に參詣し道中自慢であつた。

僕も父もしばらくの間毎朝水を浴びて精進し、その間に喧嘩などを避け魚介蟲類のやうなものでも殺さぬやうにし、多くの一厘錢を一つ一つ鹽で磨いて賽錢に用意した。參詣というても今時のやうに途中まで汽車で行くのではない。夜半にならぬ頃に出立して夜の明けぬうち五六里は歩くのである。第一日は本

道寺といふところに泊つた。そこまでは村から行程十四里である。第二日は、まだ曉にならぬうちに志津といふ村に著いて、そこで先達を頼んだ。それからの山道は雪解の水を渡るといふやうなところが度々あつた。まだ午前であつたが、湯殿山の谿谷にかゝると風の工合があやしくなつてきてたうとう『御山』は荒れ出して來た。豪雨が全山を撫でゝ降つてくるので、笠は飛んでしまひ、蓙もちぎれさうである。大木の枝が目前でいくつも折れた。それでも先達はひるまずに六根清淨御山繁盛と唱へて行つた。さうするうち、渡るべき前方の谿は一めんの氷でうづめられてそれが雨で洗はれてすべすべになつてゐる。下手の方は深い谿に續いてひどくあぶないところである。僕は恐る恐るその上を渡つて行つたが、そこへ猛風が何ともいへぬ音をさせて吹いて來た。僕は轉倒しかけた。うしろから歩いて來た父は、茂吉匍へ。べたつと匍へ。鋭い聲でさういつたから僕は氷のうへに匍つた。やつとのことでしがみ付いてゐたといふ

方が好いかも知れない。さういふことを僕はおぼえてゐる。

『語られぬ湯殿にぬらす袂かな』といふ芭蕉の吟のあるその湯殿の山に僕は參拜して、『初まゐり』の願を遂げた。鐵の鎖で辛うじて谿底の方へくだつて行つたことだの、それから、谿間の巖から湯が威勢よく湧いてながれてゐるところだのをおぼえてゐる。もどりに志津に一泊して、びしよぬれの衣服をほした。この日の行程十六里と稱へられてゐる。

第三日は、麗かな天氣に歸路に就いた。七八里も來たころ、父は茶屋に寄つてゐた餅を註文した。ゐた餅と謂ふのは枝豆を擂鉢で擂つて砂糖と鹽で鹽梅をつけて餅にまびつたものである。父は茂吉なんぼでも食べろと云つた。それから道中をするには腹を拵へなければ駄目である。山を越す時などには、麓で腹を拵へ、頂上で腹を拵へて、少し物を持つて出懸けるといゝなどといつてなかなか上機嫌であつた。

もう山形の街も近くなつたころ、當時の中學校で歴史を擔任してゐる教諭の撰した日本歴史が欲しくなり、しきりにそれを父にせがんだ。その日本歴史は表の様に出來てゐて工面のいゝ家の子弟は必ず持つてゐたし小學校でも先生がそれを教場に持つて來たりするので、僕は欲しくて欲しくて溜まらなかつたのである。然るに父はどうしてもそれを買つて呉れない。僕らは山形の街に入つた。僕は幾たびも頼むが父は承諾しない。そのうち、書物の發行書店のまへを通りすぎてしまつた。僕はなぜ父はそんなに吝嗇だらうかなどと思ひながら父の後ろを歩いたのであつた。

7 日露の役

日露戰役のあつたときには、僕はもう高等學校の學生になつてゐた。日露の役には長兄も次兄も出征した。長兄は秋田の第十七聯隊から出征し、黒溝臺から奉天の方に轉戰してそこで負傷した。その頃は、あの村では誰彼が戰死した。この村では誰彼が負傷したといふ噂が毎日のやうにあつた。恰も奉天の包圍戰が酣になつた時であつただらう。夜半を過ぎて秋田の聯隊司令部から電報がとどいた。そのとき兄嫁などはぶるぶるふるへて口が利けなかつたさうであつた。父は家人の騒ぐのを制して、袴を穿きそれから羽織を著た。それから弓張を灯し、佛壇のまへに据わつて電報をひらいたさうである。そのことを僕が偶々歸

省したりすると嫂などがよく話して聞かせたものである。

父は若いころ、田植をどりといふのを習つてその女形になつたり、堀田の陣屋があつた時に、農兵になつて砲術を習つたり、おいとこ。しよがいな。三さがり。おばこ。木挽ぶし。何でもうたふし、祖父以來進歩黨時代からの國會議員に力瘤いれて、隆應和尚から草稿をかいてもらつて政談演説をしたり、劍術に凝り、植木に凝り、和讃に凝り、念佛に凝り、また穀斷、鹽斷などをもした。

僕のやうな、物に臆せ、ひとを恐れ、心の競ひの尠いものが、たまたま父の一生をおもひ起すと、そこにはあまり似寄の無いことに氣付くのであつたが、けれども是は自ら斯う思ふといい。僕は父が痰を煩つたときの子である。生薑の砂糖漬などを舐つてゐたときの子である。さういふ時に生れた子である。ただ、どちらにしても馬胎を出でて驢胎に生じたぐらゐに過ぎぬとは僕もおもふ。

8 青根温泉

父は五つになる僕を背負ひ、母は入用の荷物を負うて、青根温泉に湯治に行つたことがある。青根温泉は藏王山を越えて行くことも出來るが、その麓を縫うて迂回して行くことも出來る。

父の日記を繰つて見ると、明治十九年のくだりに、『八月七日。雨降。熊次郎、おいく、茂吉、青根入湯に行。八月十三日、大雨降り大川の橋ながれ。八月十四日。天氣吉。熊次郎、おいく、茂吉三人青根入湯返り。八月廿三日。天氣吉。傳右衛門、おひで、廣吉、赤湯入湯に行。九月朔。傳右衛門、おひで、廣吉、赤湯入湯かへる。』ここでは、父母が僕を連れて青根温泉に行つたこと

を記し、ついで、祖父母が僕の長兄を連れて、赤湯温泉に行つたことを記してゐる。父の日記は概ね農業日記であるが、かういふ事も漏らさず、極く簡單に記してある。青根溫泉に行つたときのことを僕は極めて幽かにおぼえてゐる。父を追慕してゐると、おのづとその幽微になつた記憶が浮いてくるのである。

父は小田原提灯か何かをつけて先へ立つて行くし、母はその後からついて行くのである。山の麓の道には高低いろいろの石が地面から露出してゐる。石道であるから、提灯の光が搖いで行くたびにその石の影がひよいひよいと動く。その石の影は一つ二つではなく澤山にある。僕が父の背なかで其を非常に不思議に思つたことをおぼえてゐる。

まだ夜中にもならぬうちに家を出て夜通し歩いた。あけがたに強雨が降つて合羽まで透した。道は山中に入つて、小川は水嵩が増し、濁つた水がいきほひづいて流れてゐる。川幅が大きくなつて橋はもう流されてゐる。山中のこの激

流を父は一度難儀してわたつた。それからもどつてこんどは母の手を引かへて二人して用心しながら渡つたところを僕はおぼえてゐる。それから宿へ著くとそこの庭に四角な箱のやうなものが地にいけてある。清い水がそこに不斷にながれおちて鰻が一ぱい泳いでゐる。そんなに澤山に鰻のゐるところは今まで見たことはなかつた。

帳場のやうなところにゐる女は、いつも愛想よく莞爾してゐるが、母などよりもいゝ著物を著てゐる。僕が恐る恐るその女のところに寄つて行くと女は僕に菓子を呉れたりする。母は家に居るときには終日忙しく働くのにその女は決して働かない。それが童子の僕には不思議のやうに思はれたことをおぼえてゐる。

僕は入湯してゐても毎晩夜尿をした。それは父にも母にも、もはや當りまへの事のやうに思はれたのであつたけれども、布團のことを氣にかけずには居ら

れなかつた。雨の降る日にはそつとして置いたが、天氣になると直ぐ父は屋根のうへに布團を干した。器械體操をするやうな恰好をして父が布團を屋根のうへに運んだのを僕はおぼえてゐる。

或る日に、多分雨の降つてゐた日ででもあつたか。湯治客がみんなして芝居の眞似をした。何でも僕らは土戸のところで見物してゐたとおもふから、舞臺は倉座敷であつたらしい。仙臺から湯治に來てゐる媼なども交つて芝居をした。その時父はひよつとこになつた。それから、そのひよつとこの面をはづして、囃子手のところで笛を吹いてゐたことをおぼえてゐる。

父の日記に據ると、青根溫泉に七日ゐた訣である。それから、明治二十丁亥年六月二日。晴天。夜おいく安産。と父の日記にあつて、僕の弟が生れてゐるから、青根溫泉湯治中に母は懷妊したのではないかと僕は今おもふのである。

9 奇蹟。日記鈔

不思議奇蹟などいふことは中江兆民には無かつた。それは開化を輸入するには物質窮理の學を先づ輸入せねばならぬから、兆民は當時『理學』と謂つてゐる哲學をも輸入したが、いきほひ『奇蹟』を對治する立場にあつた。けれども僕のやうな氣の弱いものには、『奇蹟』は幾つもある。

大正十三年の暮に火事があつて、僕の書籍なんどもあんなに燒け果てゝしまつたのに、僕が郷里から持つて來て、新聞紙に一包にしてゐた祖父と父の覺帳が煙にこげたまゝ燒けずにゐた。びしよぬれになつてゐた日本紙で綴つた帳面を一枚一枚火鉢の火で乾かしながら、僕は實に强い不思議を感じてゐた。僕の

甥は、紙を乾かすのを手傳ひながら、『輕いものですから、二階の燒落ちるときに跳ね飛ばされたんでせう』などと云つた。また『被服廠の時のやうにつむじ風が起つて吹き飛ばしたのかも知れませんね』『併しあんなぺらぺらな紙の帳面ですから、直ぐ燒けてもいゝ筈ですがね』などとも云つた。甥はなるべく物理學の理屈で說明をつけようとするのであるがそれでは分からない點が幾らもあつた。

　祖父のものは、俳諧連歌か何かを記入したものであつたが、父のものには、『品々萬書留帳』といふ、明治七甲戌年二月吉日に拵へたものである。これは長兄が生れたとき、祝に貰つた品々などの記入から始まり、法事の時の献立、病氣見舞の品々、婚禮のときの献立など、こまごまと記してあるので、僕は珍しいと思つて貰ひ受けたのであつた。例へば、明治廿三年二月廿三日夜より廿四日。盛華院清阿妙淨善大姉三回忌佛事献立控の廿四日十二人前の條に、平

(かんぴよう。いも。油あげ。こんにやく。むきたけ)。手しほ皿(奈良漬。なんばん)ひたし(韮)。皿(糸こん、くるみ合)。巻ずし(黒のり、ゆば)。吸物(包ゆば二つ。しひたけ。うど)あげ物(午蒡。いも。かやのみ。くわい。柿)。煮染(くわい。氷こん。にんじん。竹の子。しひたけ)。手しほ皿(焼とうふ。くづかけ。午蒡黒煮)。皿(うこぎ。わらび漬)。下あげもの(くわい。午蒡。柿。かやのみ。赤いも。大平(くわい。しひたけ。ゆづ)。汁(とうふ。ふのり)。茶くわし(せんべい)。引くわし(うんどん五わ但四十めかば。まんぢゆう七つ但一つに付四厘づゝ)。こんなことが書いてある。これで思起すのは、陰暦の二月すゑには、既に韮が萌え、木の新芽が饌に供し得る程になつてゐるといふことである。それから、『わらび漬』などとあるのも少年の頃をしのばしめるのであつた。

その父の帳面に、僕が生れた時祝に貰つた品々を記した個所があるから一寸

書とどめておきたいと思ふ。明治十五壬午年三月廿七日生出。守谷茂吉義豊。安産見舞受帳。小玉餘魚七枚、菅野彌五右衛門。金二十錢外に味噌一重、金澤治右衛門。金十錢、鈴木庄右衛門。金十錢、鈴木作兵衛。金十錢、齋藤三郎右衛門。鰹ぶし一本外に味噌一重、永澤清左衛門。燒かれい三枚、松原村山木善十郎。金五錢、齋藤富右衛門。金十錢、大澤才兵衛。以上である。同じ村から八軒祝を貰つてをり、他村から一軒貰つて居る。他村の松原村と記してあるのは、母の姉が嫁入つたところである。それから最後に、大澤才兵衛とあるのは、父の弟で、漆の芽で僕の腕に小男根を描いてくれた童子の父である。明治十五年頃の東北の村ではこんな程度であつた。

僕は留學から歸つて來て、家兄に頼んで少しばかり父の日記から手抄して貰つたのであつた。そのうちに僕に錢を呉れたのを記したところが處々に見つかる。明治十九年十月十五日曇り。二錢柿代富太郎、茂吉え遣し。明治二十年七

月十五日。四錢茂吉え遣し。明治廿三年正月七日。十八錢、茂吉授業料正二二ケ月分。三錢茂吉え遣し。十日休日。三錢茂吉え遣し。十五日休日。一錢茂吉え遣し。七月二日。五錢茂吉書物代。十二日。四錢茂吉え遣し。十二月廿四日。二十二錢茂吉藥代。こんな工合である。ここに二十二錢茂吉藥代とあるのは、僕が繪具に中毒して黄疸になつたとき、父は何處からか家傳の民間藥を買つて來てくれた。それを云ふのである。

　明治廿四年。二月十五日。一錢直吉笛代。五錢富太郎え遣し。三錢茂吉え遣し。三月三日。二十錢茂吉書物代畫學紙共。十五日。一錢茂吉え遣し、廿八日。二錢茂吉え遣し。八月十四日。天氣吉。茂吉直吉おみゑ上山行。九錢茂吉筆代。十月廿一日。天氣吉。七錢茂吉下駄代。廿二日。天氣吉。廣吉茂吉は半郷學校え天子樣のシヤシン下るに付而行。熊次郎紙つき。富太郎金三郎深田の葦刈。女中三人は午前菜つけ。午後裏畑草取。傳太郎を頼で十一俵買。

合併になつた隣村の學校に、御眞影がはじめて御さがりになつた時の趣で、それは明治廿四年十月廿二日だつたことが分かるが、これはすべて陰暦の日附である。大雪にならぬ前に深田の葦を刈り、菜を漬け、畑の草を取つて播くべきものは播き、冬ごもりの準備をする光景である。父の日記は、大凡農業日記であつて、そのなかに、ぽつりぽつり、僕に呉れた小遣銭の記入などがあるのである。明治廿二年の條に、寶泉寺え泥ぼう入、傳右衛門下男刀持て表より行。熊次郎槍持て裏より行、などといふ事件の記事もある。これは、寶泉寺住職隆應和尚が上京して留守中、泥棒が入らうとして日本刀で戸をずたずたに切つた。倔強の若者が二人ばかり宿つてゐたが、恐れてしまつて何の役にも立たなかつた時の話である。傳右衛門は祖父の名で未だ存命中であつた。熊次郎は父の名である。

一時劍術に凝つたり、砲術を習つたりした名殘で、どちらかといへば、さう

いふ時に槍など持つことを好んでゐた。父はさういふとき『得手まへ』といふ言葉を好く使つた。

10 念珠集跋

『念珠集』は、所詮『わたくしごと』の記に過ぎないから、これは『秘録』にすべきものであつた。それであるから、僕の友よ、どうぞ怒らずに欲しい。

ミユンヘンに留學中は、主に實驗腦病理學のことをやつた。少い暇に讀む書物も、それから考へることもさういふことが主になつてゐた。ischämische Zellveränderung といふやうなこと、Kolliquations-Nekrose とか、koagulierende Nekrose とか、例へばさういふ概念が頭を領してゐるのであつた。そのまた暇に僕は心理書を讀んでみた。Hylopsychismus といふことだの、Zerlegung der Gignomene とか、Unbewusstheit der Reduktionsbestandteile とかいふことだの、さういふこ

とが頭を惱ましたのであつた。

ところが、僕の下宿に馬琴のものが置いてあつた。もう古びて、何代もの留學生が異郷の寂しさをそれで紛らしたといふことを證據立ててゐた。馬琴のものなどはこれまで讀んだことのない僕が、ある時ふとそれを讀んでみた。久遠のむかしに、天竺の國にひとりの若い修行僧が居り、野にいでて、感ずるところありてその精を泄しつ、その精草の葉にかかれり。などといふやうなことが書いてあつた。僕は計らずも洋臭を遠離して、東方の國土の情調に浸つたのであつた。さういふ心の交錯のあつたときに、僕は父の訃音を受取つた。七十を越した齢であるから、もはや定命と看ても好いとおもふが、それでもやはり寂しい心が連日湧いた。夜の曉方などに意識の未だ清明にならぬ状態で、父の死は夢か何かではなからうかなどと思つたこともある。併し目の覺めて居るときには、いろいろと父の事を追慕した。それは盡く東海の生れ故郷の場面であつ

た。『念珠集』は所詮、貧しい記録に過ぎぬ。けれどもさういふ悲しい背景をもつてゐるのである。僕を思つてくれる友よ。どうぞ怒らずに欲しい。

大正十四年八月に、比叡山のアララギ安居會に出席して、それから先輩、友人五人の同行で高野山にのぼつた。登山自動車の終點で駕籠に乘らうとした時に、男が來て北室院といふ宿坊を紹介してくれた。それから豪雨の降るなかを駕籠で登つて宿坊へ著いた。そこに二晩宿り、貧しい精進料理を食つた。饅頭が唯ひとつ寂し相に入つてゐる汁で飯を食べたことなどもある。而して、そこで勸められる儘に、父の追善のために廻向をして貰つた。その時ふと僕は父が死んでからもう三回忌になると思つたのであつた。

本來からいへば七月に三回忌の法事をするのであるが、稻作の爲事が終へてから行ふことになり、八月、九月、十月と過ぎて、十月のすゑに行つた。けれども僕は東京の事情に礙げられて列席することが出來ないので、そのことをも

僕はひどく寂しくおもつた。法事終へてから家兄が父の小さい手帳を届けて呉れた。これは大正四年に西國に旅した時の父の日記である。

五月六日。舊三月廿三日。天氣吉。吉野町より、朝六時吉野山のぼり、午前十一時吉野驛發。高野口驛え午後一時三十分着。是より五十丁つめ三里高野山え上り、午後八時頃北室院に着。一圓、吉野町宿料拂。五十錢、吉野山見物車ちん。五十錢、同所寺に參詣費。三十錢、吉野口驛より高野口驛迄切符代。五十錢、晝飯料。二圓六十錢、籠に乘賃拂。七圓五十錢、日ばい料北室院に上げる。

五月七日。舊三月廿四日。晴天。朝の八時より參詣致。總參詣人一日へいきん二萬人以上づつ有由。午後一時より高野山より下り高野口驛え午後四時に着。是より粉河驛え着。かなも館支店宿泊。一圓、參詣費。一圓五十錢、北室院宿料。五十錢、荷物負賃。一圓、途中小使。五十錢、晝飯料。五十錢、車賃。四

十錢。汽車賃。

これを見ると、父は十年前に高野山にのぼり偶然にも北室院に宿泊して、宿料が一圓五十錢なのに、日牌料七圓五十錢も上げてゐる、これは、僕の母のために供養して貰つたのに相違ない。母は大正二年に歿したのだから、大正四年は三回忌に當る都合である。父の日記に據ると、高野山を半日參詣して直ぐその午後には下山して居る。佛法僧鳥を聞かうともせず、寶物も見ず、大門の砂のところからのびあがつて、奥深い幾重の山の遙か向うに淡路島の横ふのも見ようともせず、あの大名の墓石のごたごたした處を通り、奥の院に參詣して半日つぶして直ぐ下山して居る。道中自慢であつた父も、その時は既に六十四五歳になつて居り、四十歳ごろから腰が屈つて、西國の旅に出るあたりは板に紙を張りそれを腹に當てて歩いてゐた。さうすれば幾分腰が延びていいなどと云つてゐたのだから、高野の旅なども矢張り難儀であつたらうと僕はおもふ。そし

て、僕らが食べたやうな、汁の中にしよんぼりと入つた饅頭を父も食べたのだらうとおもふと、何だか不思議な心持にもなるのであつた。これを『念珠集』の跋とする。大正十五年二月記。

小品集

佛法僧鳥

大正十四年八月四日の朝奈良の宿を立つて紀伊の國高野山に向つた。吉野川を渡り、それから乘合自動車に乘つたころは、これまでの疲れが幾らか休まるやうな氣持でもあつた。これまでの疲れといふのは、比叡山上で連日『歌』の修行をし、心身へとへとになつたのをいふのである。

乘合自動車を乘り棄てると、O先生と私とは駕籠に乘り、T君とM君とは徒歩でのぼつた。さうして、途中で驟雨が沛然として降つて來たとき駕籠夫は慌てゝ駕籠に合羽をかけたゝした。駕籠夫は長い間の習練で、無理をするといふやうなことがないので、駕籠はいつも徒歩の人に追越された。徒歩の人々は何

か山のことなどを話しながら上つて行くのが聞こえる。それをば合羽かむつた駕籠の中に聞いてゐては、時たま眠くなつたりするのも何だかゆとりが有つていい。

駕籠は途中の茶屋で休んだ時、O先生も私も駕籠からおりて、そこで茶を飲みながら景色を見て居た。茶屋は斷崖に迫つて建つてゐるので、深い谿間と、その谿間を越えて向うの山巒を一日に見ることが出來る。谿間は暗緑の森で埋まり、それがむくむくと盛上つてゐるやうに見える。白雲が忙しさうに其間を去來して一種無常の觀相をば附加へる。しばらく景色を見てゐた皆は、高野山の好い山であるといふことに直ぐ氣がついた。徒歩の二人はもう元氣づいて、駕籠の立つのを待たずにのぼつて行つた。

併し、女人堂を過ぎて平地になつた時には、そこに平凡な田舍村が現出せられた。駕籠のおろされた宿坊は、避暑地の下宿屋のやうであつた。

小賣店で、高野山一覽を買ひ、直接に鯖の燒くにほひを嗅ぎながら、裏通にまはつて、山下といふ小料理店にも這入つて見た。お雪といふ女中さんが先づ來て、それから入りかはり立ちかはり愛想をいひに女中さんが來た。

『院化はんも時たま來なはります』

かういふ言葉をそこそこにO先生をはじめ山下を出た。私等はこの日靈寶館を訪ねる豫定であつたが、まだ雨が止まぬので此處に一休するつもりで來て、雨の霽れるのを待たずに此處を出たのである。併し女中さんが二人で私等を靈寶館まで送つて來た。靈寶館の廊下から振返ると、二人の女中さんは前の小賣店の所で何か話込んでゐるのが見えた。靈寶館では、繪だの木像だのいろいろの物を觀たが繪には模寫もあり本物もあつた。薄暗いところで佛像などを觀てゐると眠くて眠くて堪らないこともあつた。これは先刻麥酒を飲んだためである。

それから私等は、杉の樹立の下の諸大名の墓所を通つて奥の院の方までまゐつた。案内の小童は極く無造作に大小高下の墳塋をば説明して呉れた。

『左手向う木の根一本は泉州岸和田岡部美濃守』

『この右手の三本は多田滿仲公です。當壇石碑の立はじまり』

『左手うへの鳥居三本は出羽國米澤上杉公。その上手に見えてあるのは當壇の蛇柳です』

『右手、鳥居なかの一本は奥州仙臺伊達政宗公。赤いおたまやは井伊かもんの守』かういふことを幕無しに云つて除けた。

『太閤樣が朝鮮征伐のとき。敵味方戰死者位牌の代りとして島津へうごの守よしひろ公より建てられた』といふ石碑の面には、爲高麗國在陣之間敵味方閧死軍兵皆令入佛道也といふ文字が彫つけてあつた。さういふところを通りぬけ玉川に掛つてゐる無明の橋を渡つて、奥の院にまゐり、先祖代々の靈のために

さかんに燃える護摩の火に一燈を獻じた。これは自身の諸惡業をたやすためでもある。それから裏の方にまはつて、夕景に宿坊に歸つた。

その夜、奧の院に佛法僧鳥の啼くのを聽きに行つた。夕食を濟まし、小さい提灯を借りて今日の午後に往反したところを辿つて行つた。この佛法僧鳥は高野山に啼く靈鳥で、運好くば聽ける、後生の好くない者は聽けぬ。それであるから、可なり長く高野に籠つたものでも、つひに佛法僧鳥を聽かずに下山する者の方が多い。文人の書いた紀行などを讀んでも、この鳥を滿足に聽いて筆をおろしたものは尠いのであつた。

私等は奧の院の裏手に廻り、提灯を消して暗闇に腰をおろした。其處は暗黑であるが、その向うに大きな唐銅の鼎があつて、蠟燭が幾本となくともつてゐる。奧の院の夜は寂しくとも、信心ぶかい者の夜詣りが斷えぬので、燈火の斷

えるやうなことは無い。また夜籠りする人々もゐると見え、私等の居る側に莫蓙などが置いてある。私等は初めは小聲でいろいろ雜談を始めたが、時が段々經つに從つて口數が減つて行き、そこに横になつてまどろむものもあつた。

『かう開化して來ては三寶鳥も何もあつたものぢやないでせう』

『第一、電車の音や、乘合自動車の音だけでも奴等にとつては大威嚇でせう』

『それに、何處かの旅團か何かの飛行機でもこの山の上を飛ぶことはあるでせう』

『いよいよ末法ですかね』

『それに山上講演のマルキシズムと、先刻の女中の、院化はんも來なはるとで攻め立てられては三寶鳥も駄目ですよ』

『山はこれでも可なり深いらしいですがね。どれ、小便でもして來るかな』

『もつと奧の方でなさいよ。こゝだつて靈場ですから』

『承知しました』
杉と檜と欝蒼として繁つて、眞晝でも木下闇を作つてゐるらしいところに行き、柵のところで小用を足した。そのへんにも幾つか祠があり、種々の神佛が祭つてあるらしいが、夜だからよくは分からない。老木の梢には時々木兎と蝙蝠が啼いて、あとはしんとして何の音もしない。
それから小一時間も過ぎてまた小用を足しに來た。小用を足しながら聽くともなく聽くと、向つて右手の山奥に當つて、實に幽かな物聲がする。私は、『はてな』と思つた。聲は、cha—cha といふやうに、二聲に詰まつて聞こえるかと思ふと、cha—cha—cha と三聲のこともある。それが、遙かで幽かであるけれども、聽いてゐるうちにだんだん近寄るやうにも思へる。それから二つゐるやうにも思へる。私は木曾に一晩宿つたとき、夜ふけて一度この鳥のこゑを聽いたことがあるので、その時にはもう佛法僧鳥と極めてしまつてゐた。

『O先生、いよいよ啼きだしました。T君もM君も來ませんか』。

四人は杉の樹の根方の處に蹲踞み、樹にもたれ、柵の處に體をおしつけてその聲を聽いてゐる。聲は、木管で聽いたのよりも、どうも澄んで朗かである。私は心中祕かに、少し美し過ぎるやうに思つて聽いてゐたが、その時に既に心中に疑惑が根ざしてゐた。併し聲は蔑るべからずいゝ聲である。その澄んで切實な響は、晝啼く鳥などに求めることの出來ない夜鳥の特色を持つてゐた。

そのうち、聲は段々近寄つて來た。

さうして聽くと鳥はまさしく二つ居て、互に啼いてゐるのである。鳥は可なり高い樹の梢で啼くらしいが、少くとも五六町を隔ててゐる。私等は約一時間その聲を聽いた。

『どうも有難い。ようございましたね。』

O先生はかう云はれた。四人は踵を返した。

『これで愈々、後生も惡くはないやうなものだ』などと云ひ云ひ石段を下りて無明の橋のへんに差しかゝつた頃であつた。

『どうですか。木曾のと同じですか』かう突然T君が私にたづねた。

『いや實は僕もさつきから少し美し過ぎると思つて聽いてゐたんだが』かう答へた。その間にくどい思慮をめぐらすといふやうなことも無かつた。

『さうでせう。あれは怪しいですよ。ひよつとすると人工かも知れませんよ。ひどい奴だ』

かうT君が笑ひながら云つた。

『Tさんは鋭いからねえ。あれはどうも本物だと思はれる。やつぱり疑はない方が好いんですよ』。かうO先生が云はれた。

『いや、私ひとつ見破つて見せます』T君も今度は少しく氣色ばんでゐた。

四人はもう一度奥の院のかげに行つた。鳥は相變らず啼いてゐるが、先程よりももつと近くなつて來てゐる。その聲は澄明で、林間に反響してゐるところなどは、或は人工的のものゝやうな氣もするが、よくよく聽くと、何か生物の聲帶の處をしぼるやうな肉聲を交へてゐる。私は折角運好くて聽いた佛法僧鳥であるからなるべく本物にした方が具合が好い。强ひてさうしようとするのであるが、矢張り心中に邪魔をするものがあつていづれとも決定しかねて二たび踵を返した。T君は途々にも、あれくらゐの聲は練習さへすれば人工でも出來る。それに高い月給を拂ひ一家相傳の技術として稽古させてゐるのかも知れないなどゝいふ說をも建てた。そこでO先生を除くほかは、若い淨土宗門の僧侶であるM君も、それから私も、あの佛法僧鳥の聲は人工の聲だといふ說に傾きながら歸路についた。時は十時半を過ぎてゐた。

その途中で一人の青年に會つた。その青年は矢張り比叡山上で私等と一しよ

に歌の修行をし、會の散じてから單獨で高野に來、今やはり佛法僧鳥を聽きに奥の院に行く途中なのであつた。

『今しきりに啼いてゐるところだから、非常にいゝ都合だ。たゞ君に賴むがね何時ごろ迄啼き續けてゐるか面倒だが確かめて呉れませんか。僕等はKといふ宿坊にゐるから明日の朝一寸知らして呉れたまへ』

からT君が靑年に賴み、何か期するところがあるやうな面持で歩いた。その時にはもういつのまにか大きな月が出て、高野の滿山を照らして居り、空氣が澄んでゐるので光が如何にも美しく、惡どく忙しくせつぱつまつた現世でも、やはり身に沁みるところがあつた。私等はそれでも提灯をつけたまゝ到頭宿坊に歸つて來、何か發見でもした樣な氣分で一夜ねむつた。

翌朝T君は、起きると直ぐ高野山の地圖を買つて來て調べてゐた。貧しい朝

食をすまして横になつてゐると、そこにゆうべの青年が報告に來た。青年はゆうべ奥の院に行つた時には、鳥の聲はしきりにして居つたさうである。それが十一時半になるとぴたりと止んで、午前一時まで二たび啼くのを待つてゐたが到頭啼かずにしまつたといふのである。

この報告は、T君の說を確かめるのに非常に有力であつた。それのみではない。T君の調べた地圖に據ると、ゆうべ鳥の啼いた方向にはさう深い森林が無い。寧ろ淺山と謂つて好い。それから、そこを通ずる道路がありそこに一二軒の人家がある。

『どうです。聲の發源點は此處ですよ』

かう云つてT君は大きな手の指で、その人家のところを壓しつけたりした。青年は最初は何の事だか分からず、怪訝の顏をしてゐたが、佛法僧鳥の聲の人工說だといふことを知つて、『實に惜い』といふ顏をありありとした。茲に於

て私等の三人と一人の青年とを加へて四人は人工説に傾いてしまつた。けれども、O先生はこの説を是認されなかつた。『それは、Tさんの説のやうに人工かも知れない。けれども人工であつたとしても、數百年間この事を他へ漏らさない一山の人々は偉いんです。やつぱり本物の鳥と思つてきくんですね。それが空海の徳でせう。正岡子規先生ではないが、弘法をうづめし山に風は吹けどとこしへに照す法のともしび。ですよ。』かう云はれるのであつた。

私等は雨の晴れ間を大門のところの丘の上に上つて、遙か向うに山が無限に重なるのを見たとき、それから其處のところから淡路島が夢のやうになつて横はつてゐるのを見たときには、高野山上をどうしても捨てがたかつた。または金堂の中にゐて轟く雷鳴を聞きながら、空海四十二歳の座像を見てゐたときなどは、寂しい心持になつてこの山上を愛著したのである。

併し或堂内で、疊の上にあがつて杉戸の繪を見てゐると小坊主に咎められた。そこにあたかも西洋人夫婦を案内して來た僧がゐて佛境の内陣の方までも見せてゐる。『あれはどうしたのだ』といふ。『あれは寄附をしたのです』と答へる。『馬鹿いへ。僕らも寄附はして居るんだぞ』と云ふ。斯かる問答は如何にもまづい表出の運動であつた。けれどもこの機緣も佛法僧鳥人工說に一つの支持を與へたのである。

私等はかういふやうな經驗をして高野山をくだつた。そして和歌の浦まで來たが、もう海水浴も過ぎた頃なので旨い魚を直ぐ食はせるところも見當らず、逝春に和歌の浦にて追ひ付きたりといふ句境にも遠いので、其處に夕がたまでゐてＯ先生と別れ三人は那智の方に行く汽船に乘つたのであつた。

それから丸一年が過ぎた。私等は去年やつたやうな歌の修行の集まりをば武州三峰山上で開いた。然るに三峰山上には佛法僧鳥がしきりに啼いた。もう日が暮れかゝると啼く。月明の夜などには三つも四つも競つて啼いた。その聲は如何にも清澄で高野山上で聽いたのよりももつともつと美しかつた。それから三峰では直頭の上で啼くので、しぼる樣な肉聲も明瞭であり、人工說などの成立つ餘裕も何もなかつた。T君も私もしばらく苦笑して居らねばならなかつた。ただ私等はおもふ存分佛法僧鳥のこゑを聽き、數日してO先生が山の上にのぼつて來られたとき、T君も私もO先生のまへに降伏してしまつた。

私の寫生文はこれでしまひであるが、約めて一言とすることが出來る。どうも高野山上の佛法僧鳥のこゑは、あれは人工ではなかつた。あれを人工だと疑ひ、それを立證しようとした學說には手落があつて、結局その學說は負けた。

けれどもかういふことが云へるだらう。あゝいふ夜鳥は早晩高野山上から跡を絶つかも知れない。さうして玩具の佛法僧鳥をばあそこの店で賣る時が來るかも知れんとかういふのである。

（昭和二年十二月）

佛法僧鳥の辨

一

時事新報の正月に載つた、僕の『佛法僧鳥』といふ短い文章が、はからずも一代の批評家片上伸氏の目に留まり、一つ二つ難癖を附けられてゐるのを、時事新報の二月四日、五日の文藝欄で讀んだから、ついでに一言を費さうと思ふのである。

第一。片上氏は、僕らが高野山上で聽いた佛法僧鳥は、實は佛法僧鳥ではなく鼯鼠のたぐひでも聽いたのであらう。肝腎の佛法僧鳥を聽きそこねながら、いろいろの邪推を並べてゐるのは笑止でもあり、不純な自惚で、謙虚な心を失

つてゐる證據だと、かういふのである。然し片上氏のかういふ言葉は實は無駄な心配に過ぎないのであつて、あの短文にもすこしづゝ書いておいた如くに僕は三たび佛法僧鳥を聽いて居り、それが皆まことの佛法僧鳥なのであつた。こゝで少しくそれに註を加へるなら、一度は木曾山中で聽いた。その時には木曾の研究家と一しよに聽き、夜が明けてからは佛法僧鳥の巢やら糞の落ちてゐるのやらをも見せてもらひ、剝製をも見せて貰つた。佛法僧鳥といへば高野山の獨壇のやうにいふが、やはり諸國の山中にも啼くことが分つたといふので、其時木曾の人々は得意であつた。二度目は高野山で聽いた。このことは僕の短文の主眼點であつたから、こゝに繰返すまでもないが、その聲を聽くまでには山上でいろいろ問ひたゞしてからの末であり、あの中にも、『私は木曾に一晩宿つたとき、夜ふけて一度この鳥のこゑを聽いたことがあるので、その時にはもう佛法僧鳥と極めてしまつてゐた』とさへ明記してある。それのみではない。

鳥の啼き聲の具合をさへ說明してある。僕は高野山で聽いた夜鳥のこゑを佛法僧鳥の聲だと斷定してゐるのに、さうでないとはどうして云へるか。それから三度目は三峰山上で聽いてゐる。これも僕の文章に明記してあつて、疑ふ餘地も無い佛法僧鳥のこゑだと斷定してゐる。以上の事實を打破るべき根據を一つでも片上氏は持つては居まい。若しそれでもぐづぐづいふなら、一たび八月の候に三峰山上に行つて、片上氏が高野山上で聽いたといふ佛法僧鳥の聲と比較するがよい。

　然し片上氏はかういふだらう。そんなら、高野山上の夜鳥の聲を佛法僧鳥と斷定して置いて、なぜ人工の聲だなどゝ云ふ疑問が成立するかと、かう云ふだらう。それは疑問を起したところで毫もかまはない。人間には多少の差別こそあれ、いつでもさういふ懷疑心の働きがあり得るものと看做していゝのである。

　僕の文章は、さういふ一寸した心的過程に觸れたに過ぎないのであるが、さう

いふ心の萌しをさへ、自惚とか、謙虚な心がないとか云つて得々としてゐる片上氏の如きは、猫八の猫眞似を以て眞の猫の交尾のこゑとなし、魯西亞渡來の女人の手品を目して不可測の心靈作用となし、まかり違へば僧侶淋汗の垢を飮んでこれを醍醐水となすの徒ではあるまいか。

二

第二。僕は佛法僧鳥の啼聲を、Cha……Cha……Cha……と啼くと書いた。それが片上氏の腑に落ちなかつたので、僕の聽いた夜鳥は佛法僧鳥ではなく、むさゝびでもあつただらうといふことになつたらしい。そこで片上氏は一面僕の不用意と準備知識の貧弱とを冷笑しながら、佛法僧鳥の啼聲の講釋をして呉れた。

片上氏に從ふと、『その名に佛法僧鳥と呼ばれる如く、Bupposo と鳴く』のだ

さうであるが、さういふ初學向きでは困る。佛法僧鳥が佛法僧と啼くといふのは、故意にさう思つて聽くからさう聞こえるのである。恰も慈悲心鳥が慈悲心と啼くといふ如きたぐひで、佛教僧侶のこじつけから、さういふ錯覺に導かれたものである。それであるから、假りに、南洋土人とか、普通の兒童とか、歐羅巴人とか、佛法僧といふ文字の難有味を知らない者をしてあの聲を眞似させてみるがよい。決して佛法僧などゝはいはぬであらう。

併し、佛法僧といふ名は、慈悲心鳥、ホトトギス、ツクックホウシ、コホロギ、スイッチョ、ガチャガチャなどの名の如くに、擬聲に基づいた名であるから、まんざら無根據ではない。無根據ではないが、その啼き聲をば唯一の Bupposo だけが眞實で他が間違ひであるといふが如き説はあんまり幼稚なのである。ホトトギスの異名の如きは地方によつて隨分違ふのがある。それらもみんな經驗から出た命名であるから、一をのみ採つて他を貶してはならぬ。實用の

場合は杜鵑なら杜鵑のみを採用して好いが、廣く之を論ずる場合にはいろいろの異名でもそれが間違ひだとは云へない。

もう一つ具體的にいへば、例へばツクックホウシの鳴きごゑが、地方によつていろいろになつてゐる。クックックツホウシともいふ。オーシンツクツク。ツクシショウ。ツクシコヒシなどである。歌などには、ウツクシヨシと詠んだのさへある。俊頼の歌に『女郎花なまめきたてるすがたをやうつくしよしと蟬の鳴くらむ』といふのがあるのがその一例であるが、或人は『美し好し』と聽き或人は『筑紫戀し』と聽く。慈悲心鳥でもまたさうである。或人は『十一』と聽き或人は『慈悲心』と聽く。さういふことをも片上氏は少しは知つておく必要があるとおもふ。

三

そんなら、なぜ僕は Cha……Cha……Cha…… といふやうに眞似たか。これはいろいろに試して見たすゑに、佛法僧鳥の鋭い肉聲（聲帶の顫動）をばあらはすに最も適當だと思つたからである。僕はこの鳥の啼聲をば種々に眞似て試み得るが、今でも Cha……Cha といふこの眞似方で佛法僧鳥のこゑをば彷彿せしめることが出來ると信じてゐる。片上氏のいふやうに Bupposo では絞るやうな肉聲があらはれないのが缺點であり、片上氏の說明したやうに、裂帛の勢ひで響くところが出て來ない。それから佛教語の概念が混じて來て、聲の感じに邪魔を與へる。さういふことを避けるために、僕はあゝいふ眞似方を取つた。

ちなみに云ふ。三峰山上で多勢の友人で佛法僧鳥の啼き聲を眞似たことがあるが、銘々極めてまちまちであつた。カアーン……カアーン……カアーンとも聽いた人さへゐた。その人は鳥聲の肉聲よりも林間に響く鳥聲の鑛物音の要素に重きを置いたゝめであつたゞらう。から考へて來ると、僕の文章中の、T君

がなぜあゝいふ説を樹てたかといふことに就き、自惚とか何とか一言にして貶してしまはずに、もう少しT君に即しての行方を取つて見てもいゝと僕はおもふのである。

四

第三。僕の『佛法僧鳥』といふ文章の如きは誠に果敢ないものであるから、まづいならまづいと云つて呉れるのなら僕は恐縮して引下がつたのである。然るに、片上氏は單に中味一部の事實詮議に就て義憤のやうな難癖を付けたので受動的に一言辨ぜねばならぬことになつた。

有態にいふと、あれは一つの懺悔話なのであつて、山上僧侶の惡口などをいふのが主眼ではないのである。それであるから、『寺僧の墮落』などいふ文字は一ヶ所でも使つてない筈であり、たゞT君の說を書き進めて行く關係上、寺

僧のことにも、料理屋のことにも、魚の香にも氣を留め、それ等を有の儘に寫生したに過ぎない。然も最後に『約めて一言とすることが出來る。どうも高野山上の佛法僧鳥のこゑは、あれは人工ではなかつた。あれを人工だと疑ひ、それを立證しようとした學說には手落があつて、結局その學說は負けた』と、僕は文中の『私』に云はせてゐる。僕は最後まで夜鳥の聲の人工說を固守してゐるのならば、片上氏は彼此いつてもいゝだらうが、僕は懺悔し恥入つて、人工說をば棄てゝゐるではないか。それを僕と同じ結論を繰返すために『高野の寺僧いかに墮落せりといへども、まさか三寶鳥の鳴き聲までウソを言つて敎へはしなかつたらう』と云ふごときは餘り幼稚ではないか。一體、イデオロギーを力說する片上氏がこんな幼稚なことを云つて文章の批評になつてゐるつもりなのか知らん。

五

それから、片上氏は、『齋藤氏があの文中高野山寺院及び僧侶等の腐敗墮落を皮肉に見てをられるのは無理もないが』といひ、『僧侶が墮落したからだらうなど〻高野の參詣人どもは惡口をきく』といひ『高野の各坊も、經濟上の苦境から淺ましい狀態に在ることは事實であるにしても』といふ。この片上氏自身の文章中の『無理もない』『僧侶が墮落』『淺ましい』等は、念を押すが、文字どほりに解して別に差支ないのであらう。

さうしておいて、『寺院も墮落してゐるだらうが、近世の歌人輩が自らひとり純なりと自惚れて、いかにすなほな心に乏しくなつてゐるかをも思はせられる』といふ最後の結論は、どこから導かれ來るのか。『無理もない』と肯定しておきながら、直に、『歌人輩が自らひとり純なりと自惚れて』と續けたあたり

は、少しく臆面が無さ過ぎたのではあるまいか。

片上氏は、『近世の歌人輩が』といふ。けれども、かういふ言葉は少しく愼むと好い。なぜかといふに、かういふ言葉づかひは僕以外の歌人、然も徳川時代あたりまでの歌人をも包含するきらひがあるからである。そして、徳川時代の歌人であつたら、鳥聲人工說の如きものをば、片上氏と同樣に單に『笑ふべき失敗』などゝして仕舞ふであらうが、僕らはそれをば餘り義憤化せずに取扱はうとしてゐる。概念に生きるものと、個々の經驗を重んずるものとの差別はそこにあり、舊派歌人のいけなかつたのは其處にあるのであるが、近世歌人を罵る片上氏は丁度そのへんの程度に居るのではあるまいか。

それから片上氏は、僕の佛法僧鳥の記述に科學者としての不用意があると云はれるが、あゝいふ種類の寫生文に向つて科學的、自然科學的の記述を註文するのは少々困ることである。恰も二月四日の朝日新聞で片上氏は青野氏の批評

に答へてゐる文中、『もし青野君が、今少し親切丁寧に私の文章を全體的に理解、把握することの勞をしまなかつたなら』といふのがある。これは片上氏としては僞りのない感慨であつたのであらう。議論文同志でさへ筆者の側に立てば、かういふ讀者に對する慾が出るのであるから、單純化を必要とする寫生文に向つて、筆者の意圖をば細かく感受することを讀者の側に望んでも、あへて不遜ではないと僕はおもふが、片上氏はどうおもふだらうか。特に僕の文中にO先生といふのがある。片上氏はちつともさういふところには觸れて居らぬ。僕の眼には片上氏はそれほど單純で幼稚で無邪氣だと見えるのであるが、かういふことも僕の自惚のせゐに片上氏は結論してしまふか奈何。

以上、若し僕の言に間違つたことがあるなら、一通りの修身談ではなしに、骨髓を訓へてもらひたい。熟慮のうへ若し僕が惡ければ僕は片上氏にあやまるであらう。

那智には勝浦から馬車に乘つて行つた。昇り口のところに着いたときに豪雨が降つて來たので、そこでしばらく休み、すつかり雨裝束に準備して瀧の方へ上つて行つた。瀧は華嚴よりも規模は小さいが、思つたよりも好かつた。石疊の道をのぼつて行くと僕は息切れがした。

さてこれから船見峠、大雲取を越えて小口の宿まで行かうとするのであるが僕に行けるかどうかといふ懸念があるくらゐであつた。那智權現に參拜し、今度の行程について祈願をした。そこを出て來て、小さい寺の庫裡口のやうなところに、『魚商人門内通行禁』と書いてあり、その側に、『うをうる人とほりぬ

けならん』と註してあつた。

瀧見屋といふところで、腹をこしらへ、辨當を用意し、先達を雇つていよいよ出發したが、この山越は僕には非常に難儀なものであつた。いにしへの『熊野道』であるから、石が敷いてあるが、今は全く荒廢して雜草が道を埋めてしまつてゐる。T君は平家の盛な時の事を話し、淸盛が熊野路からすぐ引返したことなども話して吳れた。僕は一足每に汗を道におとした。それでも、山をのぼりつめて、くだりにならうといふところに腰をおろして辨當を食ひはじめた。道に溢れて流れてゐる水に口づけて飮んだり、梅干の種を向うの笹藪に投げたりして、出來るだけ長く休む方が樂であつた。

そこに一人の遍路が通りかゝる。遍路は今日小口の宿を立つて那智へ越えるのであるが、今はかういふ山道を越える者などは殆ど絕えて、僕等のこの旅行

なども寧ろ醉興におもへるのに、遍路は實際たゞひとりしてからいふ道を歩くのであつた。遍路をそこに呼止め、いろいろ話してゐると、この年老いた遍路は信濃の國諏訪郡のものであつた。T君はあの邊の地理に精しいので、直ぐ遍路の村を知ることが出來た。併しこの遍路は一生かうして諸國を遍歴してどこの國で果てるか分からぬといふのではなかつた。國には妻もあり子もあつたが、信心のためにかうして他國の山中をも歩き、今日は那智を參拝して、追々歸國しようといふのであるから前途はさう艱難ではなかつた。T君は朝鮮飴一切れを出して遍路にやつた。遍路はそれを押しいたゞき、それを食べるかと思ふと、胸に懸けてある袋の中に丁寧にしまつた。

僕などは、この遍路からたいへん勇氣づけられたと謂つていい、さうして遂に大雲取も越えて小口の宿に著いたのであつた。實際日本は末世になつても、

かういふ種類の人間も居るのである。遍路は無論、罪を犯して逃げまはつてゐる者などではなかつた。遍路のはいてゐる護謨底の足袋を褒めると『どうしまして、これは草鞋よりか倍も足疲れる。たゞ草鞋では金が要つて敵ひましねえから』といふのであつた。これは大正十四年八月七日のことである。

一夜明けて、僕等は小口の宿を立つて小雲取の峰越をし、熊野本宮に出ようといふのである。そこでまた先達を新規に雇つた。川を渡つたりしてそろそろのぼりになりかけると、細い雨が降つて來た。僕等はしばし休んで合羽を身に著はじめた。その時遙向うの峠を人が一人のぼつて行くのが見える。やはり此方の道は今でも通る者がゐるらしいなどと話合ひながら息を切らし切らし上つて行つた。

三十分もかゝつて、やうやく一つの坂をのぼりつめるとそこで一段落がつく。

そこに一人の遍路が休んでゐた。さつきの雨が既にあがつてゐるので遍路は茣蓙を敷いてそのうへで刻煙草を吸つてゐた。見晴らしが好く、雲がしきりに動いてゐる山々も眼下になり、その間を川が流れて、そこの川原に牛のゐるのなども見えてゐる。

僕等もそこで暫時休んだ。遍路は昨日のと違つて未だ若い青年である。先程見た一人の旅人はこの遍路であつたのだから、遍路は彼此三十分も此處に休んで居るのであつた。遍路は眼が惡いといふことを云つた。なるほど彼の眼は一眼全く濁り、片方の瞳にも雲がかゝつてゐた。遍路の話を聽くに、もとは大阪の職人であつた。相當に腕が利いたので暮しに事を缺くといふことが無かつたのだが、ふと眼を患つて殆ど失明するまでになつた。そこで慌てゝ大阪醫科大學の療治を乞うたけれども奈何にも思はしくない、そのうち一眼はつぶれてしまつた。それのみではなく、片方の眼もそろそろ見えなくなつて來た。彼はせ

つぱつまつて思ひ惱んだ揚句、全く浮世を棄てゝ神佛にすがり四國遍路を思立つた。然るに、居處不定の身となり靈場を巡つてゐるうちに、片方の眼が少しづゝ見えるやうになつて來た。彼は益々神佛にすがつて到頭四國の遍路を了へた。その時には眼が餘程好く見えるやうになつた。

その時彼は、もうこれぐらゐで澤山である。もうそろそろ信心の方も見きりをつけて、浮世の爲事をして見ようと思つたさうである。そして逡巡してゐるうちに、眼は二たび霞んで來てもとのやうになりかけたさうである。

彼は驚き心を決して二たび遍路の身になつてしまつた。そして既に數年を經た。けふは小川の宿を立つて熊野の方へ越えようとしてゐるのだと、かういふのであつた。

彼はさういふ事を事こまかに大阪辯で話した。併し僕は大阪辯を寫生することが得手でないから、その儘書くことが出來ない。

遍路は、けれども現在の狀態に安住してはゐなかつた。若い身空を働きもせず、現世の慾望をも滿たさうともせずにゐることが殘念でならなかつた。彼は『いまいましい』といふ言葉を使つた。T君は遍路に五十錢呉れたが遠慮をしながら丁寧にそれをしまつた。それから遍路はM君の呉れた紙卷煙草を一本その場で吸つた。

僕等は遍路をそこに殘して一足先に出發した。一山巡つて、も一つ山にさしかゝらうとする頃うしろの方で鈴の音が幽かに聞こえてゐた。

『奴も歩き出したね』

『あの奴なかなか面白いね。ぷりぷり云つてゐるところなんか面白いぢやないですか』

『いまいましいなんて云ひましたね』

『いまいましくても、遁世の實行家だね。あれだけの生活は加特利敎徒の勞働

者なんかでは出來ないよ。』

『强ひられた實行なんですね』

『さうかも知れない。併し觀音力にすがるところに盲目的な强味があるとおもひますね。一時流行した覺めた人間にはあゝいふ苦行生活は到底出來ませんよ』

『しかしみんな遁生菩提でも困りますからね』

『さうかも知れない』

僕等は疲れきつて熊野本宮に著いたのは午後二時ごろであつた。そこで熊野權現に參拜した。熊野川は藍に澄んで目前を流れてゐる。けふの途中に、山峽からたまたま熊野川が見え出し、發動汽船の鋭い音が山にこだまさせながら聞こえてゐたが、あれも山水に新しい氣持を起させた。

この山越は僕にとつても不思議な旅で、これは全くT君の勵ましによつた。然も偶然二人の遍路に會つて隨分と慰安を得た。なぜかといふに僕は昨冬、火難に遭つて以來、全く前途の光明を失つてゐたからである。すなはち當時の僕の感傷主義は、曇つた眼一つでとぼとぼと深山幽谷を歩む一人の遍路を忘却し難かつたのである。然もそれは近代主義的遍路であつたからであらうか、僕自身にもよく分からない。

山峡小記

晩秋の或る日に、信濃國、飯田町の方から電車に乗つて伊那町の方へ向つた。太陽がだんだん西の方へ傾き、赤石、白根の高峰には雪がもう眞白に降つて見える。その前山はすつかり色づいてゐてもまだ雪が降つてゐない。山脈は南方へ南方へと低くなつて、それらの山の見えなくなる方に天龍川が流れてゆくのである。

上伊那郡と下伊那郡との境界をなしてゐるといふ松川をば電車は音をたてゝ渡つた。さうすると、そこの林中から一羽の鳥が飛び出した。鳥は迅速に飛ぶ

のではなく虚空に浮かぶ雲のやうな具合であつた。『おやおや』と誰かゞいつて、五六人がその鳥を凝視したときには、鳥は二たび林中に隠れてしまつた。同車してゐた翁は、それを梟の子だといつた。梟の子は電車の響に應じて、空中に舞あがつたが、雲の漂ふが如き格好をしてまた二たび林中に入つてしまつたのであつた。かゝる瞬間の光景も山峽を行く僕には新しい親しさをおこさせたので、いまだに梟の子を僕は眉間にゑがき出すことが出來る。

日が駒ヶ嶽の方に沈んで行き、日光からかげつて暮色のせまる山嶽の襞は極めて峻嶮の氣持を起させるのであつた。僕等は入船といふ停車場で下りて、そこから自動車で高遠の町へ向つた。自動車は夕暮の街道に砂塵をあげながら走つた。僕等の自動車が追越す、幾つも幾つもの馬車は秋刀魚を澤山に積んで、伊那町の方から高遠町の方へ終日通ふのであつた。その馬車のひゞきは山峽の

澄んだ空氣に遠くの方まで聞こえてゐるところは、自動車の中からでも、一種の旅愁を感ずることが出來た。『鹽負うて山人とほく行く秋ぞ』といふ俳諧などを僕はおもひ浮べるのであつた。

高遠に入る手前の斷崖を切り開く道普請が始まつてゐた。高遠に一夜寢て、次ぎの日の朝、町を歩いてゐると、向うの横丁を白衣を著た朝鮮の女がこちらの方へ來つつあつた。信濃の國のこの山中の町に朝鮮の女を見るのも、何かしらエキゾチックなところがあつていいが、道普請に働いてゐる朝鮮人の女房であるから別に不思議ではなかつた。女はもう土地馴れをしたやうな格好をして悠々とこちらへ來つつあつた。

高遠では旅舍の一間に炬燵をかこんで僕等は飯をたべた。そして飯が終ると

北村勝雄さんが繪島の物語をしてくれたのであつた。松澤平一、藤澤正俊、小島守人、三澤孔文、丸山東一の諸氏は、それに幾らかづつ補充をしながら私に話してくれたので、僕は夜ふけてひとり床に入つてからも繪島の生涯をおもつてゐたのであつた。

繪島がいよいよ高遠に遠流になるについて、高遠の城主内藤駿河守の家來、城戸十兵衞といふものが繪島を受取に行つたとき、繪島が懷妊をしてゐないといふ證據をとつたさうである。さういふことも僕にはなかなかおもしろい。それから、『かね附申度候旨申候者道具出し可申候哉』といふ伺書に對して『無用候』といふ阿部豐後守の指圖が出てゐる。これなどもおもしろい。繪島は、それゆゑ配所にあつては白い齒をしてゐたのであつた。

繪島は高遠の配所に二十八年も生きてゐて、六十一歳の時に歿した。繪島が歿したとき、江戸から檢使が來た。その時の覺書のなかに、『繪島煩付候者何

時分に候哉』といふ問に對して、『元文五年申閏七月二十一日より少々浮腫有之氣分不相勝候得共それ以後段々快方に罷成候然所當酉四月二日より風氣寒熱往來浮腫氣手足に相見え申候』といふ答へがあるから、綸島は元文五年ごろから、そろそろ腎を患つてゐたのではあるまいか。症状はその間に幾らかづつの消長があつて、さうして綸島はその年の冬を越してゐるから、醫師の手當がとどいたものである。

その次の日、北村氏に導かれて蓮華寺に綸島の墓を弔ひ、かつて綸島の著てをつたといふ布團地を見せてもらつた。色は褪せてゐたが、むかしのおもかげを偲ぶことが出來た。墓はあはれな小さいもので、そのあたりから水が湧いて流れてゐて、それは落葉でうづまつてゐた。

高遠の朝は、もはや嚴しい霜が降つてゐた。道芝が霜をかうむつてうらがれ

てゐたのみではなく、車前草のたぐひも黄褐色になつて枯れつつあつた。もと牢獄のあつた跡だといふところを左手に見て、谷の方に下つて來たとき、僕等のあたまの上を一羽の鴉が大きな柿をくはへて飛んで行くのが見えた。僕は立止まつてしばらくその鴉を見てゐたが、鴉は谷が狹くなつて盡きる、山の彼方の方に隱れてしまつた。僕は歸朝以來、いろいろと苦しんで、山水の靜寂に親しむ折は實に尠かつた。

あたかも、繪島の遺物を見せてもらつた部屋に、德川時代に日蓮宗を宣傳した札が掛物になつて懸けられてあつたが、日蓮大菩薩の方が無論、日本の神々などよりも上座で、その名も大きな文字で書いてあつた。德川將軍家の如きは小さな字で末座の方に書いてあつた。いまならば一種の廣告術であるが、日蓮の末徒には、さういふ勇猛な、はにかむことの少い特徴があつた。ただその部屋に繪島の遺物を持つて來てくれた少女は、いかにも靜かな善良な娘さんであ

つた。

高遠を去つて辰野の方に來、それから、下諏訪高木の小山のうへに、亡友島木赤彦の墓を弔つた時には、師團の演習がはじまつてゐて、大砲の大きな音が雷のやうなこだまをおこし、機關銃のひびきは鋭く地べたを匍ふやうな音を立てて聞こえてくるのであつたが、戰ひの稽古だとおもへば、別に氣味わるくもなく、心しづかにその音を聞くことが出來た。

上諏訪から汽車に乘つた。汽車の中は、もう暖めてあつた。僕の直ぐ前に二人の男が向うむきに乘つてゐて、しきりに血壓のことを話してゐた。『どうも硬化といふ奴は、色んなことに關係しますんですつてね。へへへ』などといふことが聞こえたりした。僕は、なるほど疾病の流行といふことは、單に傳染病

に限らぬものだといふことを考へた。僕も開業醫になつてそろそろ二年にもなるからである。二人は、このごろ新聞に廣告してゐる、アニマザといふ藥のことなども談合してゐた。

あるところに來ると、客が乘込んで來た。このあたりは未だ山國で、嵐氣に滿ち、トンネルを幾つもくぐつた。その客は義太夫か何かの話をしてゐる。『きらはるるは皆わたしのぶちよう法。なんてね。いいころだね』などといふ。

山峽を少し出でここらを通るともはや町らしい色つぽさがあつた。僕は、高遠の旅舍にゐたとき部屋に來て甲斐甲斐しく世話してくれたのは、旅舍の姉娘さんであつた。妹娘さんの方は、圍爐裏のそばにゐて魚などを燒いてゐた。そして部屋には出て來なかつたけれども、僕が外出するときなどには、やはり立つて來て辭儀をした。その娘さんの女中さんでないといふことは、こちらで質

問して確めたのであつた。僕はひとり汽車中にゐて、さういふことなどを思ひおこしてゐた。

（大正十五年十二月）

續山峽小記

一

それから丸一年過ぎた。初冬の或日一人の女と一緒に信濃國上林溫泉に着いた。宿に着いたときにはもう日は暮れ、水の流れる音が谷間の方に聞こえるばかりで、山の聳えてゐる工合などは全く判らなかつた。部屋を一つおいてその隣の部屋から、濁みた男の聲と澄んだ女の聲とが聞こえる。それがいかにもむつまじさうに話してゐるが、別になまめかしく巫山戲るといふのでもない。

僕等二人は始め不愉快さうな顔をして、その聲を聞いてゐたが、夕食に鯉こくを食つたり、澄んで盛んに湧いてゐる溫泉に身體を浸し、いゝ加減つかれて

部屋に歸つて來たころには、向うの部屋もひつそりしてゐた。僕らは別にこれといふ話しもなく、僕は煙草を喫まず、友は一ぷく喫つて眠りについた。

一夜明けると、寒い空が綺麗に晴れて、向うには高山がたゝなはり、その間から僅かに見えてゐる鋭い山の峰にはもう雪が降つて眞白になつてゐた。

僕等が二人で宿を出て、田と田との間の道を歩いて行くころには柔かい日光が山も河も田も畑も萬遍なく照らしてゐて、僕は心中光明遍照といふところだなどと思つた。それほど僕の心は靜かになつてゐた。田には男女の農夫がせつせと稲を刈り、すぐそのそばで稲を扱いてゐるので、その器械の音が、そこにもこゝにも聞こえてゐる。

『おや、あれは妙高ぢやないか。妙高だつたね』

『さうでせう』

『あれが妙高とすると、その左は黒姫だね』

『さうでせう』

『確かかね』

『一寸あやしいんですが、聞いてまゐります。』

友は田の方に下りて行つた。やや暫らくしてまた別の田に行き、到頭戻つて來た。そこに働いてゐる老若の農夫は、向うの山嶽の名を全く知らずにゐるのであつた。このやうにして數回たづねて歩いたうちで一人の若者は『日本アルプスの續きでせう』と答へたが、あとの農夫はさういふ山の名などには全く無關心のやうな面持をしてゐた。忙しく働いてゐるには、遠い山嶽の名などを知る必要がないといつてよかつた。

日本の高山だの、名山だのといふ山の名は大概、字音讀みのもので、特に佛典ばりの名が多いのは古代の人々は、高山に名をつけるといふことに直接必要を感じなかつたことが判る。さういふ高い山には狩に行くといふことも無いの

であつただらうから。

二

こゝから一山越えると喃發といふ小さい溫泉がある。一晩とまるつもりならば行つて御覽になるのもいゝでせう。かう友はいつた。一晩とまるつもりはないが、兎も角喃發の方へ行つて見ようといふので出かけた。その時僕の宿から出て來た二人の客は、その一人は六十を越えた老翁で、一人は二十ぐらゐの女であつた。この二人がゆうべ僕等の部屋から一つおいて向うの部屋でむつまじさうに話してゐたのを僕らが聞いたのであつた。

道を挾んだ兩側の田からは、稻を刈る農夫の話ごゑと、たまには唄なども聞こえる。それから器械で稻を扱いてゐる音が勢ひよく聞こえてゐる。路傍の小草はもううら枯れかかつてゐるのに、薊や龍膽の花が小さくなつてまだ萎れずにゐる

るところなどもある。それ等の草にも花にも水霜が一ぱいに溜つてゐるのを見ながら僕達は坂を上つて行つた。

さびしい山道には馬糞がまだくづれずにあるのなども目についた。それからは暫らく森のなかを歩いた。

森を出た處が少しく開けて、明るく日の光が射してゐる。そこのところを水が流れてゐるのを見ると、日光が淺い流れの底まで透つて小石の影までが見えてゐる。その流れは暗い向うの谿から出て來て、極く僅かの間だけ明るいところを流れ、二たび暗い谿の方へ下りて行くのであつた。ほとりに大山神などいふ石碑が立つてをり、人が休むと見えてマッチの棒などが落ちてゐた。

また森になつて暫らく行けば向うの山の中腹に西洋館のやうな物が見えた。それは水力發電所であつた。坂が急で、あへぎ喘ぎ上らねばならぬが、その發電所の右側を少し迂回してそこからもう一つの險しい坂を越すと、哺發道にな

るのである。

『こゝの坂で牛が二頭死にましてね』

『どうしてです。』

『あの發電所を建てゝゐる時です。トロツコの綱が切れて重いトロツコの奴が一目散に飛んで下つたところが、下の方から上つて來た牛がそれと衝突して死んでしまひました。牛は二頭です』

『さうですか。そいつは困つたな』

『先日兒童を連れて啼發まで遠足しましたが、その時聞いたのです。牛のやられたのはあの邊でせう。』

そこはもう眼下になつて見える。僕等はそこに暫時佇立してゐた時に、雉子がけたたましく飛立つた。僕等はその場所のあたりに行つて見たが、何も見付けることが出來なかつた。併し、僕等はその林中の道のところに腰を下ろして

休むことにした。初冬の午前の日光が林間の小道をも照らしてゐる。小鳥が啼き、風の音が幽かにするのみで、萬事がすべて靜かである。僕が東京で、忙しく張つめた暮しをしてゐることを思ふと、この場面はいかにも不思議に思はれる。二人は無言で何か恣な聯想にふけつてゐたけれども、その障礙になるやうなものはない。僕の官能はいつか小さい蚯蚓が一つ道の上に出て來てゐるのを見つけてゐた。その蚯蚓は日に照らされると體を轉がす。しばらく匍ふうちにまた體を轉がす。さういふ工合であるから、蚯蚓の行かうとする方向が少しも分からない。僕は土中に住む蚯蚓なら日に照らされれば苦しからう。そんなら本能的に濕り氣のある物蔭にでも這入ればいゝと思ふが、なかなかさういふことをしない。蚯蚓は體を延ばせるだけ延ばして一寸ばかり匍うたかと思ふとまた體を轉がすし、折よく礫のかげなどになつたかと思ふとまた日向に出てしまふので、さういふ工合で、三十分間も經つた。そのうち加減で蚯蚓は小さい

朽葉の下に潜つて行つた。そこは日の光も射さず、濕り氣もあつたので蚯蚓はそこに潜みかくれるだらうと僕は思つた　さうすれば、あんなに體を轉々反側しなくとも濟むだらう、さう思つて見てゐると、蚯蚓は二たび朽葉から體を出して日向へ匍ひ出した。そして日に照らされるとまた體を轉がしはじめた。僕は、急に身を起して、『いまいましい畜生だ』といつて靴で蚯蚓を踏みつぶした。蚯蚓は僕にはひとごとではなかつただらう。

『歸らう。晡發は止めて歸つて湯にでも這入らう。』

『もうお疲れですか』友は怪訝な顏をした。

『これ以上骨折るのは面倒くさい。……けふはこれで上等といふことにしませう』

二人は元來た道を下つて來た。昨夜の冷えは嚴しかつたと見えて赤土の日かげになつてゐるところは凍つて解けずにゐた。

三

僕らは午餐を濟ましたころには氣が二たび落付いてゐた、午後は別な方向の谷間の方へ這入つて行つた。深い谿の水を見おろしながら谿深く入つて行くと、不思議にも谿が平地のやうに河原が出來てをり、水はそこで淺くなつて流れてゐる。深い山間にかういふところを見るのはいかにもいゝ氣持なので、僕らはその川原に下りてしばらく遊んだ。そしてかへりがけに一人の童子にあつた。童子は學校通ひのカバンを肩にかけてゐるほかに、手に提燈を持つてゐる。童子はもつと奧谿の方から里の小學校にかよふが、冬の日は暮れ易く、午後になつて間もなく、日は山に遮られるので此處の谿などは日がもうかげつてゐた。それであるから學校の當番の日などには、童子のこゝの河原にさしかゝるころには日はとつぷりと暮れるだらう。さういふ時の用心に童子は毎日提燈を持つ

て學校に通ふのであつた。

僕等は谿を流れに沿うて下つた。ゆふぐれに近いので、炭を負うた炭燒きが幾たりも僕等を追越した。もう里が見える。そこに粗末な橋の架かつてゐるのを渡つた。僕等はその村はづれの神社の境內に入り、神前に參拜してそこでしばらく身體を休めた。境內には杉の大ぼくが幾本も植わつてをり、相撲をとつたと見え土俵の跡などが殘つてゐる。德川あたりからの神社だらうなどと思ひながら僕らは境內の石碑などを見てゐると、側の木の立札に『森林ノ中デ煙草ヲ喫ッテハイケナイ』と書かれてゐるのが目についた。これはそれでかまはぬが、その字ごとに他國文字の註があつた。それは朝鮮文字を添へてゐるので、凝視すると文字は墨汁で毛筆で書いてあり、毫も躊らふことなく、物馴れた手つきで書いてあるのは、僕にとつては何しろ珍らしかつた。

僕は朝鮮人の勞働者が日本の內地で、どんな役目をしてゐたかも餘り知らず、

關東大地震のあつたとき、地震と朝鮮人との事などを遠くドイツのミユンヘンの假寓で聞いて腑に落ちない點もあつたのである。ドイツにゐる朝鮮人系の者等が、日本の惡口をばドイツの新聞に盛んに宣傳した時にも、やはり腑に落ちない點があつた。それほど僕は實世間から遠ざかつた暮しをしてゐたのであるが、その狀態が今でもさう變らない。僕が立札の朝鮮文字を珍らしいとおもふのは、分かりきつたことが分からぬに本づくだらう。

四

野澤溫泉の宿で或朝、納豆を食はせた。小さい豆で作つた納豆でそれに生の葱をきざんで入れてあつたが、なかなか工合のいゝものであつた。聞けばこの納豆はこの地方の町で製造するのださうである。この納豆を次の朝も注文すれば今度は砂糖で味をつけて來た。これはしくじつたとは思つたが、到頭我慢を

して食べた。その次の晩は中學校の生徒が大勢演習をやりながら來てこの溫泉に一泊するといふので、女中どもゝ非常に忙しいため納豆がなかなか來なかつた。やうやくにして小女が倉皇として持つて來た納豆を食ふと、その納豆にも砂糖が入つてゐるではないか。僕等は相顧みて、苦笑をした。しかし爲方がないから女中を呼んで、二たび砂糖を入れないのと取換へさせた。女中は皿を持去りしなに、『旦那さんがまた入れなさつた』と小ごゑでいつた。この納豆に砂糖を入れることは宿の主人の特別のもてなしで、今夕も女中どもが忙しいので主人みづから納豆をこしらへて呉れたのであつた。

　この主人は物識でいろいろのことを話してくれた。或る朝、木天蓼の實の鹽漬を持て來てそれに回春の功徳があるといつて食べさせた。味が苦く少しひりりとするあたりは何かの成分を含んでゐるやうであるが、その純成分はまだ分からない。併し、心臓の働きが高まると一しよに、神經を鎮める作用があるや

うでもある。猫は鹽漬にした木天蓼の實をもくふ。そして、眼を瞑つて、いゝ氣持さうに眠るやうである。

野澤温泉には、たぎつて湯の湧いてゐるところが幾箇所もある。そこでとり立ての茸をうで、菜をうで、卵をもうでる。山の篠竹を束にして漬けておき、曲つたのを眞直にするのださうである。

『七年に一ぺん小供が墜ちて死ぬさうです。』

『綺麗な色をしてゐるからね。泉のやうなものだからね』

『七年に一ぺんは少い方だ。蛙なんかも死ぬだらうね』

『それは死ぬだらう。』

『あゝいふ動物は、戰々兢々としてゐるやうで存外呑氣だからね』

『ひよつとすると、地の中で湯の通つてゐる熱いところに頭を出したりして死ぬ奴なんかもゐるでせう』

五

妙高温泉から池の平温泉の方に廻つたころは、こがらしが毎日吹いて、妙高山の裾などは萬目蕭條といふ感じであつた。

『もう二度は山まで來ましたからねえ。もう一度で此處まで來るでせう』寒い風の音を聞きながら、越後うまれの小女が僕らに降雪の話をするのであつた。

宿には雪の深いころに集まつてくる人々のスキイが廊下のところにずらりと立て掛けてあつた。小女は縁側に雜巾掛をしながらスキイ節といふのを歌つた。女學生向きの西洋まがひのものである。またスキイ踊といふのもあり高田藝者等は先づそれをおぼえるといふ話をもした。

『ねえさん、明日の朝一つ頼みがあるがね』さういふと廊下にゐた小女は障子をあけて手をついた。

『あすの朝の味噌汁は茸にして呉れ』

『へえ』

『いろいろ交ぜてもいゝよ』

『へえ……では苔にしませう。かしこまりました』

『何。苔があるのか』

『へえ。杉の澤の方から澤山取つてまゐります。』

『そいつあ面白いね。どういふ苔か』

『いろいろございます。ぬめり茸。栗茸。紫しめぢ』

『何だ、そいつあ茸ぢやないか』

『へえ。茸でございます。ほゝゝ』

こんな會話などもあつた。僕等はそれゆゑ池の平に行つても『こけの味噌汁』を注文した。同行の土屋文明君は、雜食家だから、『苔の味噌汁』と聞いて、味

覺の期待をしたのであつたが、それは駄目になつた。しかし苔と茸と同じ意味に使ふ言葉を聞いて、苔を食ふことが駄目になつた不滿を埋合せてゐた。

こゝの宿から池の平の方に小さい女中さんが一人手助けに行くのに僕は附いて行つた。女中さんは十六歳ぐらゐである。女中さんは寡言でずんずん先に立つて行くが、坂路にかゝつた時、くるりと羽織を脊中にまくつた。さういふのを見ながら僕と同行の土屋君とが附いて行くのである。

池の平の宿で一湯浴びて、横になつてゐると、信濃の電氣會社職員の觀楓會といふのが催された。いま膳についたかと思ふのにもう歌が始まる、そして猛烈に歌ひ猛烈に騷いだかとおもふうち、一時間ぐらゐでさつさとみんなが歸つて行つた。いはば嵐のあとの物足らなさのやうなものである。中にへべれけになつた者一二名ゐたけれども、さういふ者は二三人で持つやうにして山道をくだつて行つた。

僕らも少し後れて宿を出たが、向うが足の速い連中なのでもう先が見えなかつた。妙高の麓あたりから引いてある湯が、木の樋の中を流れて通つてゐる。その樋が地中深く隱れてゐることもあり、全く地上を通つてゐることもある。あるところに來ると、地上に露はれてゐる樋の板の上に獸の糞がしよんぼりとあつた。貂か鼬で、さう大きな山の獸ではない。そこのところが湯の氣で溫まつてゐるので、いゝ氣持で貂か鼬かまたは何かの獸が糞を垂れたのだらうと思ふと惡い心地はしない。

その夜は、茸はあひにく取り立てのが無いといふので、鹽漬にしてゐたのを水で洗つて味噌汁に入れてくれた。またその鹽漬の儘のを、煮ずにも食べて見たが、少し粗い香がして親しめなかつた。

（昭和二年冬記）

牡雞の記

大正十五年四月十五日の朝、八時半頃であつただらうか。僕は床の中に目をあいて、焼けこげた天井板と、焼け落ちた天井に西洋紙を貼つてふさいだその移行のあたりを茫然として見てゐた。

いかにも雑然とした、むさぐるしい部屋の隅の方に小さい鏡臺が置いてある。そこに妻が來て髪の手入をし初めた。そして、鏡に向いたまま『ゆうべ牡雞が到頭殺されてしまつたわ』と云つた。

『なんだ』

かういつて僕はいきなり床から跳ね起きた。けれども妻は冷然として髪の手

入をしてゐる。』たうとう何かにやられてしまつたわ。茂太なんかそれこそ大喜びだわ。ひとりで下の風呂へでも何處へでも行けるなんて大喜びだわ』こんなことを云つた。

僕は妻にはかまはずに、あたふたと梯子段を降りて行つた。そして年老いた女中に牡雞のことを根掘り葉掘り訊いた。女中は物しづかに答へていふに、昨夜十一時頃、床に這入つてやうやく眠に落ちようとしてゐると、雞の羽ばたく音が二度ばかりしたさうである。いつもなら、威勢の好い羽ばたきと一しよに必ず鳴き、宵の口から餘り度々鳴くので縁起が惡いなどと云つた程であつた。併しその時はただ羽ばたきだけでちつとも鳴かなかつた。女中は錠をはづして戸を繰つて見た時はもう牡雞は殺されてゐたといふのである。

『ただ、ぱたぱたと音がしたのでございます。ケケツケケケツとも何とも云はなかつたのでございます』と女中は云つた。

僕は戸をあけて見た。家と煉瓦塀との間の狭い地べたに、牡雞は死骸になつて橫はつてゐた。僕はその日一日快々として樂しまなかつた。

大正十三年の暮に僕の家に火事があつて、六十羽もゐた雞が殆ど皆猛炎のなかで燒死んだ。それでも六つばかり生殘つたのを集めて飼つてゐたのであつた。それが暫くすると犬の襲撃に逢つて一つ減り二つ減り、つひに牡雞三つのみが殘つた。そのうち春が來、一つは喧嘩して死に、一つは犬に食はれて、晩春ごろには牡雞が一羽のみになつた。

牡雞は晝のうちはひとりで遊んでゐる。夜になると家と煉瓦塀の狹いところに入つて來て眠つた。併し少しでも赤兒が泣いたりするとそのこゑに應じて宵の口でも何でも啼いた。僕はそれを一つの『神經過敏』の證に歸したが、弟はそれに反駁の說を云つた。『あの牡雞は、雛から育てたのですから、つまり啼方を知らないんでせう。時のつくり方を本當に稽古しなかつたせゐだと僕は思ひま

すね』などとも云つた。『本能』といふことに氣付かない弟の說に僕は從はなかつたが、雛の世話などを焼くことを妙に好いてゐる弟のいふ說であるから、僕は直ぐは否定しなかつた。

その孤獨な牡雞に、いつのまにか僕は同情するやうになつた。そして注意するともなく注意してゐると、ありふれた性質と變つた性質があるやうに思へる。その牡雞には『勇猛』の性質があつた。思ひ當る節々は、その『勇猛』の性質のためにこの牡雞は生殘つてゐたのである。

氣の弱い僕が不運に遭遇してまさにへたばらんとした時に、七書の類を愛讀するやうになつた。そのごとくにこの牡雞をば、『勇猛』の標號、象徵に思へたのであつた。この牡雞の顔に僕の靴を突付けると牡雞は頸のところの羽を逆立てて戰鬪の姿勢で向つて來る、それを見て僕は滿足するのであつた。

牡雞にはその性質と伴うてもう一つの性質があつた。牡雞は女や子どもを襲

ふので、子供などはたびたび泣きながら家に逃げ込んで來た。赤兒を抱いて庭を逍遙してゐる妻がたまさか悲鳴をあげるので、『何のざまだ、それは。……そんな下等なこゑを出すもんでない』などと僕は云ひ云ひした。

はじめは、神經過敏の證だと思つてゐた僕は、或る日一二の女の子を連れて庭を歩いて來ると、牡雞はあたかも牝雞を呼ぶやうなこゑを立てて寄つて來た。そして、片方の羽をひろげ片方の足を妙な恰好にして牝雞に挑むやうな風をした。

これはいかにもおもしろいと僕は思つた。そしてこれは、„Libido“に違ひないと思つて見ると、牡雞は、人間の男と女とを明かに區別して行動するやうに思へる。人間の女性を見、それから稚い人間を見ると、いつも牝雞を呼ぶやうなこゑを立てて寄つて來た。僕はそこで、Autoerotismus といふことを思つた。そして禽獸の徒は、フロイドなどの謂つてゐる、autoerotische Befriedigung と

いふことが無いからかういふ形式を取るに違ひなからうといふやうに思つたのであつた。

そのうち晩夏も過ぎて秋になつた。僕は生活のことでいろいろ苦しんでゐる間に、孤獨な牡雞をあはれに思ひ、牝雞を一つ買つてやつた。それ以來二つはいつも一しよに遊んでゐたが、牡雞はやはり時折人間の女子供を追ひかけた。牝雞はそのうち脚を惡くし、それが本でつひに死んだ。牡雞はそれから幾日かの間孤獨でゐた。僕は牝雞一つでは不足だらうと思つたので今度は二つ買つてやつた。羽の白い丈夫な牝雞であつた。

牡雞は丈夫な牝雞二つ率ゐて毎日燒あとで遊んでゐた。卵も生むし、牡雞も得意な風をしてゐるので僕は心中祕かに滿足した。そのうち寒も明け寒さも何時かゆるんで來た。然るに三月十五日の午ちかくに、八百屋の小僧が白い牝雞の死骸を臺所のところに持つて來て、

『いま犬の畜生から分捕つて來た。この雞はお宅のではありませんか。も少しで門を出るとこでしたんです』

こんなことを云つた。見ると僕の處の牝雞である。それから驚いて家の境内を見たがそこには牡雞も牝雞も見えなかつた。僕は非常に不機嫌になつて、『もうお前たちは生物なんか飼ふな。面倒見られないぐらゐなら、却つて殘酷だから殺して食べてしまへ』などと云つた。そして、一閑張のまへに頭をかかへてゐた。

ところが三四時間經つて『お前よく歸つて來た。よく歸つて來た。ようく殺されずにゐた』といふ女中のこゑがするので、急いで下に降りて行つた。臺所のそばには牡雞は一羽の牝雞を率ゐて無事でゐた。そして今しがた女中の呉れた青菜を食べてゐるところであつた。それでも牡雞は興奮したと見えて雞冠がひどく充血してゐた。

その日、牡雞は二つの牝雞を連れて燒跡に遊んでゐた。そこに大きな犬が襲撃したものと見える。そしてつひに牝雞一つを殺したときに、牡雞ともう一つの牝雞は塀を飛越えて往來の方に逃げた。そして助かつたのである。その時も僕は心中ひそかに牡雞の勇猛を稱へてゐたのであつた。

けれども、それからは、二つの雞を圍から出さなかつた。二つは狹いところに遊んで居り、そこで時もつくり、卵も生んだ。併し、時が經つとあんまり不自由させるのもどうかと思つて圍のそとに出してやることもあつた。それからもう一羽牝雞を買つてやつた。今度のは茶褐色の羽を交へた小さい牝雞であつてつぶされてしまひさうであつたが、さうでもなく、牡雞の挑みに堪へてよく卵も生んだ。それから間もなく牡雞が殺されたのであつた。

牡雞を襲つたのは、鼬だらうといふことであつた。「鼬といふ奴は幾晩も隙を狙ふものと見えるね。そして咽笛のあたりに飛ついて、頸動脈から血を吸ふも

のだ。その動脈のあり場處をよく知つてゐるから溜まらんね』かういふことを來合せた友が云つた。

『何しろ寢てゐる時なんだから駄目だ。鬪つたうへでやられるんなら、あきらめもつくが、啼く暇も何もありあしない』

『廿利と佐橋甚五郞かね。ふふ』

僕はずつと前に與謝野鐵幹さんの新體詩を讀んだことがある。それは、『消息。君戀ふとつと走り書き、墨吸はぬすひとり紙を、はらだちて二つに裂きぬ、門の前人行きさわぎ、星亭刺さるると云ふ日。』といふのであつた。勇猛な牡雞が殺された時この新體詩を聯想した。星亭の刺された頃は僕はいまだ少年で、淺草の三筋町から鳥越町を通り、天主堂の傍を拔けて佐竹原の通りに出て、市村座の前から淡路町の中學校に通ふのであつた。僕は佐竹原の通りで星亭の殺された新聞號外を見たことをおぼえてゐる。

一日置いて僕等は殺された牡雞を煮て食べた。生きてゐた時分の牡雞のことを思ひ浮べると變な氣持である。『この牡雞を食べると、氣が强くなつて困るやうになりはしないか知ら。』などと妻が云つたりした。『馬鹿いへ。おれが皆食ふから、おれによこせ。』僕はいつて、たたいた肉を呑み込んだ、今から思ふと、『勇猛の象徵』を呑み込むやうなつもりでゐたのであつただらう。この勇猛象徵のことは一旦書いたが、厭味なので消さうかと思つた。併し火事後弱りきつてゐた時のことを追想するに、消してしまふのも惜しいやうな氣がしてならない。厭な語句だが記念に取つておくことにした。

第一高等學校思出斷片

○

あの時分は新學期が九月から始まるので、行李二つばかりに入用の品物をつめて、もの馴れない不安なやうな面持で寮の番號をうろうろしながらたづねたことなどが、もう夢のやうになつて今私の意識のうへに蘇へつてくるのである。新しい帽子をわざわざ雨に打たせて古いやうに見せかけたり、あの白い二本すぢに羅馬字で名前を書き入れたり、さういふことが何かから一つの誇に似た甘いやうな快感を起させるのであつたが、さういふ心の狀態は人生のうちで幾たびも來るものではあるまい。働きのある人が、それももう老境に入つて、細君

のまへに大臣になつた辭令を見せるときのやうな心持と比すべきであらうか。それでも夜半人定まつて、なほ寢つかれないやうな場合には、漢詩人のうたふ所謂遊子の悲哀が心を襲うて來る。小用がしたくなつても、窓の戸をあけて導水管を傳はらせて濟ますといふやうな勇氣が未だ無い。爲方が無いから、あの長い廊下を小走りに走つて便所に行く。月の光が流れるやうに滿庭を照らして、蟋蟀が無間斷に鳴いてゐる。それが一種の波動をなして聞こえてゐる。いまだsexualの實行を敢てしない、うら若い第一高等學校の學生は、細々としたSentimentalismus を、かういふときに味ふのであつた。

『一高』の學生になつた以上は、寮歌といふものを稽古しなければならぬといふので、夕飯後などにそれを歌ふことを習ふ。ときには二年生の先輩を聘して稽古するのであるが、これにも上手下手の差別があつて、いつまで經つても節まはしの旨く行かないものがゐる。私なども唱歌の方が得手でなくて、ひどく

骨が折れたものだが、それでも二年生の新學期のはじまる頃には、新入生のまへに一寸聞かせてやりたい氣持で寮歌の一つも小ごゑにうたふやうになるのであつた。

○

大正十二年の大震災で、時計臺のあつた赤煉瓦の本館はくづれたとおもふがあそこに教員室もあつた。

その窓から今村有隣先生が顔を出して、も少しで校門を出ようとしてゐる小使に言附けてゐる。今村先生は當時の教頭で、ながく垂れた髯がすでに白くなりすました老翁であつた。股引をはいて襟に第一高等學校と白く染拔いた半纏を著た小使が、も少しで校門を出ようとしてゐると、

『二つだよ。かけ二つだよ』

かういつて、今村先生は、右の人差指と高高指とを揃へて高く空中に擧げた。小使は『へえ、かしこまりました』といつて校門を出て行つた。さういふことが今私の心に再現されて來るのはどうしたことであらうか。そのころの私は、高等學校の先生などは何かかう神の如くであつて、かけ蕎麥などは召上らぬものと思つてゐたのであつた。

Dr. Menge といふ獨逸人の教師が居た。これは伯林大學出身の文學士で、何でも歴史が得手であつた。獨逸語の發音も自慢で、いまから思ふと、Hoch-Deutsch を話した。その先生は午餐後の散歩をすまして、大きな林檎を皮もむかずに噛みながら校門を入つて行くのを私は見たりした。私は日本の東北の山村に生れて、林檎などを食ふときは皮をむかずに食つた。然るに明治二十九年に十五歳の少年にして上京し淺草三筋町に住んでゐる間に、林檎の皮もむかずに食ふのは、それは田夫野人の爲業だと教はつたものである。それゆゑ私は高等

學校のMenge先生の行爲に注意したのであつた。

○

賄は小川といふのが請負つてゐたと思ふ。雜音の絶間なく聞こえるあの食堂に行つてしばらく飯を食つてゐると、けたたましく鋭い音がして、洋皿がたたきの土間のうへに微塵になつて碎ける。その音が、あちらい方でもする。私の隣のあたりでもする。私は、罪人が首を斬られるのを目のあたり見てゐるやうな氣がした。併しそれもいつの間にか馴れて、砂の多い飯にもおのづから恐れないやうになり、當時の學生が『雪駄の皮』と名づけた牛肉の菜では奈何にも足りないので、熱した牛乳を一本とる。そして、高音で

『おおい賄。生薑もつてこい』

と叫ぶ。すると鮮紅色の生薑漬を皿にのせて持つてくる。それを二度も三度

も請求して、飯に牛乳かけてはかきこんだものである。この方法は、後で處々の食卓で流行するに至つた。

或時、私の食卓の者が、飯の來るのが遲いといふので、奮然として立つて、洋皿を土間のうへに投げつけた。しかし未だ鍛煉が不足なので皿はちやらちやらちやらと云つて向うの方に辷つて行つた、その時隣の食卓の先輩が『そんなことでは君駄目だ』といつてあらためてその皿を微塵に碎いてしまつた。けれどもその時には、もう私は斬罪を見るやうな氣もせず、そんなことからは全く興味が失せかかつて居たのである。

今の學生もあゝいふ眞似をしてゐるか知ら。

○

先生は先生で、新入生の學期の始などには一種の氣持がそこにあるに相違な

かつた。好奇心もあるし、みづから任ずるに秀才を以てする少年どもの前に一つの儀容を作すやうな、さういふやうな氣持が識閾の下の下の方に動いてゐるのかも知れなかつた。

先生らは裁判官の著るやうな、ぶわぶわした黒の教授服を著て、挨拶する、それから教科書と參考書などを一寸云つて出て行つてしまふ。それを私などは菩薩か何かを見るやうな氣持で、目迎目送したのであつた。それらの先生のうちで、數藤先生と岩元先生とが心を引いたことをいま想起する。

もの靜かで、特有の瞬をされて、數學上の解明をなされるのに、一語一音をもゆるかせにしない。後に聞けば正岡子規門の俳人で五城と號して居られた。私の中學の親友で吃なのが居る。ある時、伊澤氏の吃音矯正實習會が夏季休暇を利用して酒匂川のほとりに催されたことがある。私の友はやはり俳人であつたので、その會で數藤先生と相識になつて、數藤先生のことをいろいろと話し

て呉れた。數藤先生も吃なので、それを直さうとして先生は酒匂川のほとりの催に行かれたのであつた。その話を聞いて以來私は一種特有のなつかしみを先生に持つやうになつた。數學上解明の言葉の一語一音をもゆるかせにせられなかつたのは、吃に本づいてゐたのである。野球の仕合などがあるときに、先生は寂しいやうな面持で、群衆のうしろの方からのびあがつて見て居られることなどがあつた。先生は晩年に和歌をも作られて、秀歌を殘されたことは『數藤斧三郎君』といふ書物に據つてそれを見ることが出來る。

岩元先生が益々健康でおいでになることは私どもをして非常に幸福に感ぜしめる。私が大學を出て東京府巣鴨病院の助手になつてからも、時折青山から來る電車のなかで御一しよになつたものである。何でも先生が夜の二時ごろまで讀書されるので、杜鵑のこゑをよく聞かれるといふ、さういふ御話であつた。

二年生になつたばかりの、語學力のおぼつかない私どもは、レッシングの『ラ

オコオン』でぐんぐん講ぜられるのに魂を拔かれたものである。醫者になるのに、かういふ藝術論なんかどういふ役をするだらうかなどといふ學生も居つたが、私などは先生の御かげで、彼の卷頭の有名な文句をいまだにおもひおこすことが出來るのであつた。

○

當時の校長狩野先生もまた私の崇敬の的であつた。私は一人で祕かに先生を尊敬して居た。對校仕合などがあると、先生はいくら遲くなつてもお一人で校長室に殘つて居られたものである。農科大學の運動場でやつたランニングの競走で一高が負けて歸つた時などは、もう日が暮れてしまつてゐた。その時も先生は本館の戸口から出て來られて心配さうに學生と何か話して居られたのを私は見た。

先生は、當時二部と三部の一年生の學生に倫理學を講ぜられた。その中で二つばかりここに記入しておきたいことがある。

その一つは、『還元傾向』といふことである。二部三部の學生は、現在も將來も自然科學の研究である。精神科學にまでも入らないのが普通である。was の問題であつて、warum の問題ではない。然るに二部三部の學生が大學に進む頃になると、銘々のやつてゐる自然科學の一部で、萬有の眞髓が分かるものだと極めてしまふ。人生觀も世界觀もそれで片付けてしまふ。然るに實際はさういふものではない。『還元傾向』といふことがあつて、斯樣かくかく云々である。二部三部(現今の理科)の學生は常にこのことに留意せなければならぬといふのである。

その二つは、『疾病の倫理觀』である。先生は、疾病をば倫理學的に觀るなら『疾病といふものは自己もしくは祖先の罪惡である』といふのであつた。そし

て、このことは三部(醫科)の學生は特に氣を付けて考へなければならぬといふのであつた。

三年生になつて私どもは、岩元先生から、Dialektik der Seele といふレクラム版の書物を習つた。そのなかにやはり狩野先生の信念に等しいやうな句があつて、私はいまだに忘れずにゐるものがある。『ははあ、狩野先生の說はこゝへんから來てゐるな』などと思つたことがあるが、先生の說は恐らく東洋哲人の考に本づいたものであらうか。それはずつとずつと後に私の考へたことである。

私の二年生の時に、寮生の一人が腸窒扶斯に罹つて死んだ。然るに同じ病に罹るものが一人出、二人出て、それ等が皆大學の附屬醫院に入院して死んだ。つひに死んだ者が五六人に及んだ時に、寮生全體に危懼の念が瀰漫して、『寮を閉ぢよ』といふ結論のもとに、委員が强剛に狩野校長に迫つて行つた。然るに先生は頑としてそれに應ぜられない。寮生の言論はだんだん劇しくなつて行き

なかには『校長などを中に立てずに直ちに當局に告げん』などといふものさへあつた。けれども先生はどうしても寮生委員の願を聽許せられない。

先生の意見はかうであつた。今、多數の寮生が一どきに世間に出るといふことは却つて病源を世間に散らすやうなものである。これは社會醫學上から看ても當を得た所置ではない。吾等はここに籠城しなければならぬ。それから吾等は病氣を恐れてはいかぬ。疾病は自己もしくは祖先の罪業である。かく觀じて謹しんでみづからを護るがよい。

かういふ先生の意見であつた。そしてあの大講堂に寮生を集めて『訓示』を與へられ、そのままずつと歸つて行かれた。けれどももはや腸窒扶斯のまへに戰々兢々としてゐる寮生の耳には先生のこの結論の這入り得るものは一つも無かつたと謂つてよい。寮生はなだれを打つて狩野先生に迫らうとしたとき、今村老先生は、まあまあ、お待ちなさい。わしにも考があるからお待ちな

さいつから云はれて、此の事件は到頭寮生の意見が徹り、消毒といふ名下のもとに一時寮を閉ぢた。狩野先生はさういふ意見であつたが、その訓示に到るまでには、周到の研究を遂げられた後で、當時新進の内科助教授橋本節齋氏を新に顧問といふことにして、熟慮のすゑに極めた結論なのであつた。けれども、寮生の勢が强かつたので奈何ともなし難かつたのである。私は間借をするのに困難して駒込へんの寺院をたづねまはつたことを覺えてゐる。

○

私の平凡な思出も少しく長引いた。あの storm などいふことも、驚いて、神經の弱い私などは、もう二たび眠り難くなつて布團のなかでもぢもぢして居ると、今しがた私の布團を引はいで行つたらしい一人の寮生が、泥のやうに醉つてゐるやうな風で、へべれけで唐人の作つた詩などを吟ずるつもりらしいのが

廊下に聞こえて、それがだんだん便所のある方に遠ざかつて行つたりするのを聞いてゐる。癪にも觸り、變な氣持もし、もの悲しいやうでもあり、混沌とした心のうちに、また幾らか眠ることも出來るといふ工合であつた。

蚤でもさうである。いつも萬年床で、參觀者でもあると、小使が少し先に立つて、その萬年床を二つに折つて行く。そのあとを、狩野校長と谷山舍監が參觀者を案內するのであつたが、午食の後などに一寸寢室に用足に行くと、蚤がばらばらつと脛に飛びつく程であつた。私は病院用のベットの上蔽を持つて來て、それを巾著の口のやうに頸の處で締めるやうな袋に作つて、そのなかに入つて寢てゐた。

あの蚤は何とか退治しなければ駄目である。春に、疊の下に新聞紙を敷いてナフタリンを撒布して置くといい。そのことを私は大學を出てから、記念祭の日か何かに嚶鳴堂にでも行つて演說しようかと考へたことがあつた。けれども

蚤退治の演説では他の堂々たる議論と釣合がとれないのだらう。さういふ堂々たる議論に負けないやうにするには、警句でも出すことが必要だと考へたのであつたが、それが旨く行かず、演説も罷めてしまつたが、蚤のことは未だに私は心配してゐる。演説をしないうちに私も初老期に入つた。

警句のことであるが、私は青柳有美さんの文章を讀んで、岩元先生の意見を叩いたことがあつた。すると先生は、何の馬鹿な。あんなかすはよまんがよいぞ。ニイチエの Aphorismen だつて大したものではない。ショペンハウエルぐらゐを讀め。こんなことを云はれたことがある。博渉家の岩元先生は、青柳有美のものまで讀んで居られた。

さてそのニイチエであるが、私はつい近ごろ、岩波書店の雑誌『思想』で、ニイチエの墓を訪ふ小旅行記を書いた。そのなかの Nietzsche の綴がみんな Nietsche になつてゐる。これは私の無學のためで、つまり z の文字が一つ足りないので

ある。横文字で折角書いて、N一つで文章がだいなしになるといふのは殘念であつた。

○

それから夏目先生のことも藤代先生のことも畔柳先生のこともいろいろあるが、私も少しく謹まなければなるまい。ただ私の在校中に日露戰爭のあつたことを記入しておきたい。

宣戰の大勅がくだつた日、狩野校長は全職員全學生を校庭に集めて訓示を與へられた。その夜また嚶鳴堂で御話があり、學生の本分を守り、學問の勉强をおろそかにして輕擧に出づるやうなことがあつてはならない。かういふ意味のことを云はれた。それから二三先生の御話があり、次いで學生の三四が演壇に立つて申合せたやうに、戰爭は戰爭、學生の本分は學生の本分であるといふ意

味のことを云つた。そのとき、最後の學生の演說が未だ終らないのに、丸山通一先生がつかつかと壇上にのぼつたかと思ふと、その學生を引擦りおろしてしまつた。

そして火炎のやうな言葉を吐かれた。今は國家多難の際である。國民は命を賭して戰つてゐるのである。それに學生の本分の何のと洒落くさきことを言つて居られるか。いかにしてかういふ場合には安閑として授業などをしてゐられるか。どしどし授業を休み、新橋の停車場に行つて出征の軍人に向つて萬歲を唱へろ、獨逸の大學あたりでは、學生どもは決してそんな洒落くさいことは言はない。さういふ意味のことを云はれたのである。

日露の役が日本軍に利があつて、つひに旅順が陷落したとき、第一高等學校が提灯行列をやつた。その長い行列が丁度日比谷公園を通つてゐるとき、學生の一團が丸山先生を空中に向つて胴上げした。先生のあの肥つた體が一丈餘も

虚空に飛上つたと思へば間違なかつた。その時感極まつて泣いた學生が幾たりも居る。さういふ國家の大事件にも會ひながら、私どもは一高をどうにか卒業して大學の門をくぐつて行つたのであつた。

○

かういふやうな、第一高等學校在學時代の私の小さい思出が、幾つも幾つも續くのであるが、盡く私の弱さ淺薄さを暴露するやうなもので恥入るから、ここで筆を擱かうとおもふ。そして心から母校の前途を祝福しようとおもふ。

（大正十五年正月記）

結核症

おなじ結核性の病で歿した近ごろの文學者でも、やはり行き方に違ふところがあるやうに思ふ。正岡子規とか國木田獨歩とかを一つの型と看做せば、高山樗牛とか綱島梁川とかは又一つの型のやうに思はれる。

總じて結核性の病に罹ると神經が銳敏になつて來て、健康な人の目に見えないところも見えて來る。末期になると、病に平氣になり、呑氣になり、將來に向つていろいろの計畫などを立てるやうになるが、依然として銳い神經を持つてゐる。それであるから、健康の人が平氣でやつてゐることに强い『厭味』を感じたり、細かい『あら』が見えたりする。

正岡子規なんかは、三十六歳の若さで死んでゐるが、やはりその『厭味』といふことが強く身に答へたものらしい。現在の私はもう子規よりも十年生きのびてゐるが、いかにしても子規よりも甘いところがあり、厭味から脱することが出來ない。子規も病氣になるまへには露伴の風流佛などに傾倒したこともあり、西鶴ばりの文章なども書いたのであつたが、晩年の隨筆では、當時、露伴が非常に骨折つて書いた『二日物語』の文章をば貶してゐる。

子規の隨筆『墨汁一滴』には、『露伴の二日物語といふが出たから久しぶりで讀んで見て、露伴がこんなまづい文章（趣向にあらず）を作つたかと驚いた。それを世間では明治の名文だの修辭の妙を極めて居るだのと評して居る。各人批評の標準がそんなに違ふものであらうか』。かう子規が云つてゐる。子規が寫生文を創め、細かく平淡なものを書いてゐた時であるから、『二日物語』の文章に厭味を感じたのであらうか。

子規のものは、センチメンタリズムから脱却してゐるが、感慨が露はでなく沈痛の響に乏しいのは、單に俳人としての稽古から來てゐるのでなく、疾病から來てゐるのである。このへんが芭蕉のものと違ふ點であつて、子規は芭蕉の句にも隨分厭味と思はせぶりとを感じてゐるのである。このへんの事は私にはなかなか面白い。

獨歩も、もとは甘い戀の新體詩なども作つたのであるが、それがだんだん除れて行つた。子規ほど病牀生活で苦しまなかつただけ、呑氣ではなく、鋭いところが未だ消えずにゐる。石川啄木などでもやはり同じ徑路を取つてゐる。

そこに行くと樗牛とか梁川などは、趣が違ふ。『我が袖の記』から『淸見潟の記』になると餘程平淡になつて來てゐるが、やはり感慨が露はに出てゐる。前二者の客觀的なのに較べて主觀的であり、抒情的である。樗牛がニイチエから日蓮に行つて、アフオリスメン風の文を書いてゐるとき、梁川は莊重で佳麗

な見神の文章なんかを書いてゐる。是等はおなじく、神經の雋鋭になつたための一つの證候であるが、これは氣稟に基づく方嚮の違ひであると謂つていゝだらう。樗牛でも梁川でも若くて死んでゐるが、健康な人には出來ない點がやはり存じてゐる。

森鷗外が、『遺言には隨分面白いのがあるもので、現に子規の自筆の墓誌杯も愛敬が有つて好い。樗牛の淸見潟は崇高だらうが、我々なんぞとは、趣味が違ふ』云々と云つたのは、たいへん面白い。子規の墓誌は簡明な履歴で、日本新聞記者タリ月給四十圓などと書いた文章をいふので、樗牛のは、有名な『吾人はすべからく現代を超越せざるべからず』をいふのである。

若し結核性の病で倒れずに、病に罹りながら五十年も文學者的生活を續けられるものならば、興味あることに私は思ふが、佳境に入れば死んでしまふし、癒つてしまへば平凡になつてしまふからやはり駄目である。

雑草記

ここの庭には昨年からかけて雑草が思ふ存分にはびこつてゐる。昨年の春は草が未だ小さい時分に幾らか除いたが、今年は手が足りないので、ただ延びる儘に任せるより爲方がなかつた。

七月に入つたころには、もう雑草は延びられるだけ延びた。そして花を持つまへの、油ぎつた光を見せ、僕の脊丈の沒するまでの高さに達した。

雑草といつても、僕がその名前を知らぬものが多かつた。しかしいろいろの草の生える有樣を見てゐると、暇の無い僕のやうな者の心を引く點も一つ二つはあつた。燒跡に立てた風呂の歸りなどに、僕は幾らか落付いた氣持になつて

雑草のだんだん延びて行く有様を見てゐることがあつた。

春の初に萌え出でた『あかざ』は數でこなして無數に生えた。その柔かな時分には、よく茹でて食つたが、丈も延びて行つて、ほかの雑草の領分をも犯す勢を示した。『あかざ』は縱ひ他の雑草のなかにあつても、滅びない草だと僕はおもつた。

それから、咲いた花を見ると菊科植物で、多分、『やましろぎく』ではないかと思はれるのが無數に生えた。この草もいつの間にか僕の脊丈を追越し、小さな白い花が澤山咲いてゐるのを見ると、如何にも繁殖力の強いことを思はしめた。それらの間に生えてゐる犬蓼だの、金線草などは極めて弱々しい幽かな花のやうに見える。『どくだみ』なども一時強いはびこり方を示したやうであつたが、今はさういふ丈の高い雑草の下蔭になつてしまつてゐる。

その間に葉の大きい竹煮草の繁りがまた一段と目立つて見えてゐる。併して

れは株の數がさう多くは無い。

さういふ草の中に立交つて、數も多く、丈もどんどん延びて行く草があつた。これは春先には葉の柔く可哀らしい草として、すさまじい燒跡に一種の風致を添へてゐるのであつたが、春も更け初夏になり夏も眞中に近づく頃は、ほかの雜草を壓迫する勢ひを示して行つた。そして尖端の方に細かい枝がさいて、無數の小花を附けようとしてゐる。

風呂の歸りなどに僕はこの草のまへに突立つて、一體何といふ草だらうと何時も思ふのであつたが、計らずも僕のところの事務員がその草の名を知つてゐて、『ひめむかしよもぎ』といふことを教へて呉れた。その事務員は少し俳諧をやるから、俳諧の歳事記などにはもう出てゐるのであらうか。

それから一寸書物を調べると、成程この草の名が出て居る。この草は近世舶來して來たもので、鐵道草。御一新草。明治草などともいふと書いてある。そ

して非常な勢で殖えることもまた書いてある。僕は、この草が外國から渡つて來て、傳來の雜草を壓迫してゐる有樣を見てゐたのである。いつのまにか遙々と海を渡つて來て、異境に根をおろさうとするものには何か猛烈な强いところがある筈である。また異境といふ一つの要約が既にこの根强さをつよめさせることもあり得るのである。黴毒が歐羅巴の西班牙に入つて來て、西班牙の兵士がそれを伊太利に扶殖したときには、伊太利の女をば非常な勢で犯して行つた。これなども新鮮な伊太利女を犯したために繁殖力が强かつたのである。黴毒に限らずそのほかの流行病が矢張りさうである。そんなら、その勢がいつまでも猛烈の度を保つてゐるかといふに事實はさうではない。こんな果敢ないことを聯想してゐると、今幾年か經つうちに『ひめむかしよもぎ』の繁殖力も衰へるかも知れぬ。そして、傳來の雜草が、今は異國草の下くさの形になつてゐてもやはり滅びずに、追々は二たびその異國草を牽制してその繁殖をさう恣にはさ

せないかも知れぬなどといふ空想も浮んで來て、五分や十分の時は經つてしまふ。そして風呂あがりの汗も乾くのである。

眞夏も過ぎて、馬追の鳴く頃になると、脊の高いのも低いのも、花を附け實を結ぶやうになる。さうするともう雜草の風趣は全く變つて來て、油ぎつたやうな色調は見られない。

月雪花

曉紅、落日、月光などいふこと、もつと普通にいへば月雪花といふやうなことは、文章でも歌でも俳諧でももはや陳腐として見棄てられてゐるが、是等の顯象には奈何にしても棄てられないところがある。陳腐として顧みたいのは、人間の『倦厭』の心理に基づく點が多い。陳々相寄つて、生動の氣は全く失せた和歌俳諧の中にも、やはり題材として棄て難いのがあるのである。

生活の和歌俳諧、プロレタリア文藝などといつても、あゝいふ材料が繰返されてゐれば、品切になり、月雪花の陳腐より以上に陳腐になつてしまふに相違ない。自然主義が勃興したことは本邦の文學に一大革新を與へ、歌人なども影

響されたものが多かつたが、二たび芭蕉、亘寛などを云々するやうになつて居る。このなかには、人間の『倦厭』の心理に基づく點も必ずある。

九月一日、淺草觀世音菩薩に參詣祈願し、ついでに浪花節を聞いて見た。暇がなくてしばらく聞かずにゐるうちに、浪花節も衰へてゐたやうであるが、聞けばやはり棄て難いところがある。それから、桃中軒雲右衛門が工夫して創めたといつて好い一種の節まはしが、彼が死んでも、若手の誰彼に模倣されて滅びずにゐる點も僕を喜ばせた。浪花節よりも、左衛門節の方が好いが、いつのまにか淺草でも聞けなくなつてしまつた。併しあゝいふものは山間の湯治場で聞く方がいい。八木節の味ひでもさうだ。浪花節かたりがテーブルを前に置き椅子に腰かけるやうにしたのは、雲右衛門に始まると思ふが、愚なことをしたものだ。然るに、當時の寄席に行くと必ず雲右衛門を罵つた者までが、いつのまにかテーブルを置き、椅子に腰かけるやうになつたのであつた。淺草公園で

も安來節に代つて、そろそろ浪花節が二たび繁盛しかけてゐるのなども淺草らしくて面白いとおもふ。

蟲類の記

大正九年の一月半ごろであつた。長崎にゐて重い流行性感冒に罹り、ひどく苦しんだ。けれども、幸ひに七十日ばかりで大體癒えた。

そのころの流行はなかなか猛烈で、同僚の一人の教授は、私と同じ頃に發熱し、これも幸ひに一時癒えたが、中耳炎より乳嘴突起炎を併發し、それから腦膜炎になつて遂に死んだ。その間に私のゐた學校の校長の如きは、發病してより七日も經たぬのに死んでしまつた。私は病後のまだ青い顏をして勤めてゐると、校長の容態が愈々わるいといふので、私の血を採つて校長に輸血しようといふ相談まで受けた程であつた。私の體は幸ひに重い病氣に持こたへたので、

私の血の中には抗體が豐富に出來て居るだらうといふ考へからであつた。

併し、六月になつてから、私にも餘病が起つて、私の咽から血が出て來た。毎朝出る僅かばかりの血痰がなかなか止まない。そこで縣立長崎病院に入院してそこに二週間ばかりゐた。恰もその時に、私の敎へた學生で腎の結核を患つてゐる靑年が矢張り入院してゐて、毎日私の病床を見舞つて呉れた。學生のは小便から血がくだるのであつた。『先生、そんなに心配しても、あかんですばい』等と云つて私をなぐさめて呉れたりした。

それから、退院をして、東中町の小さい借家で寢てゐた。内科の助手がひとり隔日ぐらゐに來て私の靜脈のなかにカルシウム劑などをさして呉れた。

その家には一坪ぐらゐの狹い中庭がある。その隅の方に棕櫚の木が一本植ゑ

てあつて、あとは木も草もなく、飛石が五つ六つあつた。私は午後になると二階から降りて來て、中庭のところの緣側に腰をかけて沈默してゐるのが例であつた。長崎の夏はなかなか暑いので時には丸裸になつてゐるときもある。その暑い日の太陽もやうやく傾きかけるころから、きまつて蜘蛛が軒端から巣をかけはじめる。蜘蛛は大小おほよそ三つぐらゐ居て、急がしく巣をかけ、かけてしまふと、中心のところに無生物のやうな恰好をしてをさまつてゐる。それを私は毎日見て、別に倦きるといふことはなかつた。さういふ現實を見てゐるだけでも何か生存の義務を私が果して居るやうな氣持で、幾らか心が和らいだ。

さういふ新しい蜘蛛の巣も、買物に出た女中が歸つて來、私も夕餐を濟ますころには、細かい生物が幾つか犧牲になつて、蜘蛛の巣の亂れかゝるのが普通であつた。すこし大きい蛾などが飛んで來てかゝると、蜘蛛はいかにも殘酷な

本性をあらはしてそれを食つた。雨の降らぬかぎり、私はさういふ有様を毎日見てゐた。そして時々いやな氣持を起す時もあつた。かういふ現實にくらべると、植物性の食物は殘酷でなくていゝなどといふことをも思つた。物質說から行けば、草食でも肉食でも違ふ道理はないが、感味が違ふではないか。精進食は單に淫慾克服のためのみではあるまいなどといふことをも思つた。

そのうち、東京の島木赤彥が遙々見舞に來て吳れた。そこで連れ立つて溫泉嶽に轉地した。七月二十六日に登山し、次の日赤彥は下山した。私は溫泉嶽の溫泉地に八月十四日までゐたが、血痰の出るのが、それでも止まらなかつた。

その溫泉地の旅館の緣のところに夕がたになるといつも蜘蛛が巢をかけて、雨の朝などには、ゆうべの巢の殘りに露の玉がたまつてゐることなどもあつた。私は妙に蜘蛛の行爲に氣を引かれて夕方になるといつも蜘蛛の出て來るのを待

つやうになつた。

血痰の出るのが遂に止まらずに私は八月十四日に下山して長崎の家に歸つた。長崎はそのころ暑い日が續いた。或日いつものやうに蜘蛛が軒端から出て來て中庭の空中に巣をかけはじめて居ると、いきなりその蜘蛛を襲つて、一しよになつて中庭に下りたものがある。私は驚いて見るとそれは黒色の蜂である。蜂は蜘蛛を啣へてはゐるが、蜘蛛の重みで飛翔することが出來ず、しきりに羽を震動させて、それでも地べたに擦るやうにして蜘蛛を運んで行つた。蜘蛛は少しも抵抗することが出來ないで、圓ばつたやうになつて蜂に運ばれて行つた。

私は蜘蛛に妙な敵のあることを知り、その夜は何だかいやな氣持でよく眠れなく、訪ねて來てくれた知人に無愛想にしたり、小さい事に氣をいらだたせて女中を叱つたりして床に入つたのであつた。併し、私は次の日も次の日も中庭で蜘蛛が巣をかけ生物を食ふのを見てゐたが、蜘蛛は一つ數が減つただけで、

いつもの如くに行動して居り、黒蜂が二たび來て蜘蛛を襲擊することもなかつた。

私の血痰はそれでもなかなか止まなかつた。私は人と談話するのが惡いのかも知れんと思つて、それ以來無言で暮すやうにし、女中とも來客ともすべて筆談で用を濟ますことにした。煙草を喫むこともその頃から廢した。

それから、齒醫者に通つて左の奧齒を一つ拔いた。これは約一年の間しじゆう氣にしてゐても、勤めの身分で齒醫者に通ふ暇のなかつたのを、この機會に拔いたのであつた。齒醫者には友人が紹介して吳れたので、私は矢張り筆談で濟ますことが出來た。

八月三十日に長崎を立つて肥前國唐津海岸に行つた。溫泉嶽に轉地しても好くなかつたので、海岸に行つて見ようと思つたのであつた。助手のT君が藥等

一切を持ち私を啞といふことにして唐澤にも同道して呉れた。唐津海岸でも每日寂しい日を送つた。晝のうちは海岸の日かげに行つて時を過ごした。ある夜蒲島の遊廓などを見に行つたが、私にはちつとも興味が無かつた。古城址にも行つて見たが、そこで氷水などを飲んで戻つて來たに過ぎなかつた。

ある日の午後、私は海岸の砂原に來て茫然としてゐると、私の傍に一つの黑蜂が飛んで來た。黑蜂は意外にも蜘蛛を啣へて來てゐたので、私は突嗟の間に長崎の家の中庭で見た黑蜂のことを想起し、なるべく邪魔をしないやうにしてその黑蜂の行動を觀察した。

黑蜂は、啣へて來た蜘蛛を其處に置いて、しきりにそのあたりを步いたかと思ふと、細い禾本科の草の生えて居るその根方のところの、小さい砂の斜面に口と足と翅とで穴を掘りはじめた。穴がだんだん深くなるに從ひ、蜂は穴の中

に入り足で砂を掻出すやうになつた。穴が、一二寸も深くなつたとおもふ頃、蜂は穴から出て來た。それから咥へて來た蜘蛛を二たび咥へて穴のなかに這入つて行つた。だいぶしてから蜂は穴を出て來て、さうして穴の口をふさぎはじめた。口がふさがると蜂は暫くその邊をさまようて居たが、何處かへ飛んで行つてしまつた。斯うして見ると、蜂は蜘蛛を食ふのではなかつた。次の日、私は念のため穴を掘りかへして見ようと思つたが、さうせずにしまつた。

　唐津海岸は潮風の強いところである。それに血痰もいまだ止まらぬので、思切つて此處を去ることにした。私は唐津海岸で、『爲刑死靈菩提。享保二丁酉歳九月十七日願主觀峰念徹居士、俗名關善左衞門』などと記されてゐる石塔の文字を手帳にとゞめたぐらゐで、九月十一日に唐津海岸を立つた。それから、T君に長崎に歸つてもらひ、私ひとりになつて、佐賀縣小城郡古湯といふとこ

ろに行つた。こゝは川上川の上流にある、極くぬるい湯の湧く浴場で、多勢の淋病患者などの行くところである。

長崎で病んで、暑い暑いと云つてゐるうちに、此處の田の畔にはもう曼珠沙華が群がつて咲くやうになつた。

ある日、私は川上川の川原の石に腰をかけて谿流を見てゐた。苦くさい様な水の香が幽かにして來たりして誠にいゝ氣持である、そのとき私は傍の二三尺ばかり丈のある藜に似た草にとまつて、一つの蟷螂が黒蜂をつかまへて食つてゐるのを見た、凝視するに、その蜂といふのはまがふ方なく長崎の家の中庭で蜘蛛を襲撃した蜂に相違なかつた、私は實に驚いてこの現象を見た、黒蜂は抵抗も何も出來ずに蟷螂から食はれてゐた。

私は十月四日まで古湯に居た。そしてその間に私の血痰は止まつた。私は何事にも感謝し、古湯を立つて長崎に歸つた。長崎では既に諏訪神社の祭禮が始まつてゐた。それから、九月十一日に長崎を立つて、西浦上、木場郷、六枚板といふところに行つた。こゝには、さゝやかな鑛泉旅館があるので、暫く其處に隱れて生を養ふつもりであつた。けれども此處は食物がまづいので流石の私も辛抱しかねた。それでも毎朝、鹽みづのやうな味噌汁を飲み、夜は油煙の立つランプのもとで西行の家集などに讀み入つた。

それから、この近郷にはいまだ古の天主教徒の子孫が存續してゐるので、その墓なども見てまはつた。『ドメナ松下ヒサ墓。行年九十二歳』などといふ十字の附いた墓もあり、『ドミニカ柿本マキ之墓行年九歳』などといふ墓などもあつた。

此處から山道三里を越せば、長崎の西山へ出られるといふので、或日その途

中まで行つた。一つ峠を越して、のぼりつめると大きな谷間になる。そこを越せば西山の峠になるところまで行き、展望を恣にしたのであつた。

その途中で、一つの澤蟹が、蟷螂を殺して鋏で運んでゐるのを見つけた。これも私にとつては實に不思議な光景であつたが、若かすれば、その蟹は人間の足などに踏みつぶされはしまいかとも思ひ、藪の中に追ひ込んでやつた。

十月十五日に六枚板を立つて、小濱溫泉に行つた、それから諸處をまはつて十月二十六日長崎にかへつた、朝宵は肌寒くなり、私の病は大體癒えた。そして、病中はからずも觀察した蟲類の世界は動物學者には當然のことゝして受取られる平凡なものに過ぎないとおもふが、病中であつただけ私は強い感動を受けたのであつた。つまり、如是の小事件でも、無限に繰返るべき、生物爭鬪輪廻の一相と思へば思へたからであつた。『生存のための鬪ひ』Kampf ums Dasein

といふ語は、何か威勢よく聞こえて、寂しい響きの無いのが物足りないが、校長が愈々息を引取つて、皆が校長の家を辭して歸るとき、校長の臨終の呼吸の有様がシャインストックの型になつて、さうしてから息が絶えた。そのことを同僚の一人は『鯉が水からでもあがつた如ある』などと形容しながら歩いたことを思ひ出し、私は二たび學校にも病院にも勤めた。

大正十年三月になつて、つひに私は長崎を去つた。あそこに丸三年五ヶ月ばかりゐた。それから十月に出帆して、伯林に行つて、たまたま、アルツールシュニッツレルの作『輪舞』といふ芝居を見た。これは場面は維也納で、あそこのドーナウ運河の土手のところから兵士と家婢とが下りて行く光景にはじまり、愛慾輪廻をあらはしたものであるが、爭鬪は爭鬪でも甘美の心持に始終し居り同じ輪廻でも蟲類の命のやりとりを見てゐるのとはまた全く別の興奮を惹起さ

せる種類のものであつた。

此芝居も、私の見た時には既に演出法はだいぶ改良されてゐた。元はなほ露はであつたのだが、伯林の小劇場で演出した以來、警視廳の方面からも、それから一般觀客の方面からも議論が出て、そのために裁判まで開かれたのであつた。演出法の改良されたのはさういふ理由に基づいてゐた。

そこで、『輪舞のための鬪ひ』(der Kampf um den Reigen) といふ書物まで出來た。これは裁判での議論の記錄を集めたものであつた。何でも幕をおろしてから二たび上るまでの幕間が、恰もある感動を起させるにいゝ時間だといひ、家婢が二たび出て來て、衣裳の亂れを直す爲方が丁寧過ぎるといふごとき、いろいろの議論があつたやうに覺えてゐる。けれどもさういふ議論はさういふ議論に過ぎず、さういふ輪廻は畢竟戀愛に伴ふ輪廻に過ぎない。

私は幸ひに丈夫で歸つて來て、時折蟲類のことをおもひ出すと共に、『鯉が

水からでもあがつた如ある』といふ同僚の言葉をも思ひ出すので一筆書きとどめて置かうと思つたのである。

（七月二十日記）

雜語

○

先日、日本青年館であつた第三回『鄕土舞踊と民謠』は皆おもしろいものであつたが、その中に青森縣八戸町の『ゑんぶり』といふのがあつた。

これは毎年舊暦の正月に行はれる田植踊の一種だと說明してある。私の小さかつたころ、やはりこの『ゑんぶり』に似た田植踊が私の村にもあつた。様式が少し違ふけれども、急調な動律で體を屈伸し、錫杖やうの物で威勢をつけ、東北地方に共通な間の延びた唄をうたふあたりもなかなか似てゐるので私は興味ふかく見物した。

しかし私の村にあつたさういふ田植踊などは、もう遠に滅びてしまつて、今では近村では見られなくなつた。八戸町の『ゑんぶり』なんかも早晩滅びる運命にあるのだが、柳田先生やその他の熱心な郷土史家の盡力によつて僅かにそのおもかげが保存されてゐるに過ぎないとおもふ。

さういふ古風な踊などよりも、土地の農民を滿足せしめるものがどしどし出來て來たから、自然にさういふ行事が滅びて行くのであると私は思つた。『何むきせち辛い世の中で、あゝいふ悠長な踊などに暇をつぶしては居られなくなつたんです』。かう村の青年がいふのであり、成程さうかと私も思ふ。變な氣持が漂つてゐて、小地主も小作人も双方困つてゐる。踊など踊つてはゐられないという理由も一つはあるだらう。

けれども、今の農民は、天明天保ごろの不作で餓死するものがどしどしあつたに較べたなら、實は非常に好い狀態にあるのである。今の世に縱しんばあの

やうな不作が續いても餓死などはさせないだらう。

○

私は十二歳で、町の小學校に通つてゐた時である。或日洪水のために村の橋が流されてしまつて家に歸れなくなつた。そこで町の役場が費用を出し、私ともう一人の兒童をば旅籠屋に泊めて吳れた。私等は溫泉場の旅籠屋に泊めてもらひ、幾度も幾度も入浴したりして小學校に通つた。

ある日、鹽辛くない鰯が二尾づつ膳にのぼつた。私等はこれまで鹽辛くない鰯といふものを食べたことがなかつた。それを燒いて醬油をかけるのであるから、私ももう一人の兒童も、その鰯を頭から骨まで皆食べた。今は汽車がかゝり、仙臺方面からどしどし魚が輸送されるので鰯も鹽漬にしなければ食べられないといふやうなことはなくなつた。それだから、いかなる山中の農民でも私

が小さい時に食べたものよりも旨い物を食べてゐるわけである。

○

今の山國の農民が鹽辛くない鰯をどしどし食べてゐるのは、日本にニイチエが這入り、タゴオルが這入り、オイケンが這入り、ベルグソンが這入り、マルクスが這入り、アインシユタインが這入つたやうなものだとすると、さういふ便利な世の中であるから當然と謂へば當然に相違ないが、農村問題は依然として殘されてゐる。その中には、田植踊の滅びて行くのは、單にせち辛い世の中になつたといふばかりではあるまいといふことも含まつてゐると思ふが奈何。

○

こゝにアインシュタインが出て來たから聯想したが、伯林にゐる友人から、アリチエ・シヤレクといふ墺太利國の女の著した『日本』といふ書物を送つて呉れた。

この書物は、不統一の日本。雜然たる日本。ごちやごちやの日本さういふものをあつぱれ觀察のつもりの書物であるから、徹頭徹尾皮肉から出來てゐる。その女は、神戸に上陸するときから、物の値段の高いのに驚き、それをしじゆう繰返してゐる。亞米利加合衆國よりも餘程高いといふことを繰返してゐる。

その女が神戸に上つて日本の役人に旅行免狀を示した時のことを書いてゐる。役人のしぐさが悠長でのろのろしてゐるので、日本觀光には先づ『耐忍』といふことを學ぶ必要があるといふやうなことを書いてゐる。役人は二三行の英語を書くのに十五分もかゝり、もぐもぐ口で讀みながら一々手の指でおし當てゝ見ねば氣が濟まない。五人の役人が一々そんなに手間取るので、旅行免狀

の手續が濟むまで四十分もかゝつたと書いてゐる。どうも日本人といふ者の腦味噌の具合が別だらうなどゝいつてゐる。Gehirnanlage といふやうな通俗な言葉を使つてゐた。

○

この女は墺太利を出る時、日本公使にせがんで、神戸に上陸する際、白人の女の一人旅であるから荷物をあけないでくれといふ添書を書いて貰つて來たらしい。そこで荷を檢査されずに濟んだと書いてゐる。さういふ小づるいことをしておきながら、いかにも當然なやうな顏付をし、日本の役人どもは不思議なやうな顏付をしてなどといふことを書いてゐる。しかしその女は、荷を運ぶのに赤帽に五圓とられ、十分間五圓は高過ぎるといつてゐる。それから人力車に乘らうとしたが、餘り高いので乘らずに歩いて行つてゐる。そして一體人力車

は日本でも藝者か金持か商人しか乘らないものである。しかしそれも世界大戰のおかげだから、今に、車夫連も支那の車夫のやうに、客の奪ひ合をしなければならなくなるといふこともいつてゐる。

それからこんなことも書いてある。『小さい酒店に立寄つて紅茶を一杯飲んだ。そこには娘が二人ゐて唄を歌ひ、樂器を鳴らしてゐる。これは下等の部類に屬するゲイシヤで、酒を賣るあひまに折があれば自分をも賣る。吾々のそばに一人の日本人が酒を飲んでゐる。酒は日本で出來る米の酒である。男は吾々に何處の國の言葉だか分らぬやうな早口の言葉で話しかけながら洋服仕立の見本を見せた。それから直ぐ、僕も大にアインシユタイン先生を歡迎してやりました。たゞ商賣の都合で先生の講演に列席することの出來なかつたのは殘念でしたなど丶云ふ。しかし彼男の歡迎といふのはたゞ埠頭に立つて歡迎したといふことなのであらう。』

『それが日本に來てから二日目のことであつた。私には何も彼もめづらしい。第一、ゲイシヤの概念とアインシユタインの概念とをどういふ工合にして融合させ調和させるかゞ私にはむづかしい問題である。併し誰でも今日の日本を理解しようとするには、先づこの問題を解決することが大切である。』これがこの著者の得意な點でもあらうし、日本觀察の第一豫感がこの點に堅く根をおろしてゐるのであるから、日本全體がごちやごちやに置かれた日本だといふことになるのである。

またこんなことも書いてある。『或時、獨逸人である船の無線電信技師と日本人の案内者と三人で散歩して、一寸したバアに這入つた。そこに技師の可愛がつてゐる娘がゐる。娘は笑ひ顏をし、媚びるやうに手を差出した。それから、夢でも見てゐるといふ工合に、こんな工合に頸を曲げて、早くお金を兩替してまた入らつしやいと云つた。』

『そこを出てくると、ふたりのキモノ人形に通りすがつた。技師はそれに話かけようとすると、日本人の案内者はあわてゝ技師の手をひきもどし、止めなさい。淑女です。といつた。』などと書いてある。かういふ事柄をはじめにして、政治を論じ、新聞を論じ、教育を論じ、婦人問題を論じ、芝居を論じ、能を論じ、商工業を論じ、繪を論じ、音樂を論じ何の事でも孤疑逡巡することなしにいかにも穿ち盡したやうな顔付をし、北は仙臺、南は鹿兒島まで歩きまはつてゐる。

○

この書物のことは雜誌『山繭』で靑木氏が伯林通信中に書いて居たのを讀んでたいへん面白く感じたことを覺えてゐる。それから間もなく、伯林にゐる友人がこの書物を送つてくれたのであつた。

この書物の著者の名は、何處かで聞いたことのあるやうな氣がしてならなかつた。著者は西暦一九二三年の一月に日本に着いて所々を歩いたのであるからひよつとしたら私が墺太利維也納にゐたとき私等の爲事する教室をたづねて來た女がこの書物の著者ではなかつただらうか。

さう思つて私は西暦一九二二年(大正十一年)の維也納日錄を檢して行つた。日錄は極く簡單に表のやうにしてつけたものである。十二月、十一月、十月と逆に繰つて行つたところが十月廿一日のところに、果してアリチエ・シヤレクといふ名が明瞭に出て居る。

日錄を少しく布衍して書くと、十月廿一日は土曜で、寒い日であつた。朝に雨が降つて夕がた晴れた。朝のうち二時間教授の講義がありそれを聽いた。それが濟むと教授が一人の女を紹介し、日本の知人に紹介狀を書いて呉れといふことであつた。女は維也納の新聞記者で、教授が嬢々と呼ぶところを見れば老

嬢と見える。しなびたやうな猶太族の女である。

私も、それから友人も、日本の知人に宛てゝ教授の紹介状を書いた。教授も亦書いたといふことであつた。この女記者は、戰後はじめて獨逸ハムブルク港から東洋に向ひ出帆する獨逸船に乘つて日本觀光の途にのぼるのだといふことであつた。

午後、マルガレット浴場に行つて入浴した。二月半ぶりで湯に入つた。夕がた家に歸つてみると、きのふ忘れて來た伊藤長七さんの鞄が屆いてゐた。夜讀書した云々である。

その時から算へると今日までもう五箇年を經過してゐる。無論私はさういふ女の存在などは忘れてしまつてゐた。然るに突如として彼女の皮肉に滿ちた紀行文を拾ひ讀みすると、或興味がおのづから湧いて來るのであつた。

彼女は日本に來てから實にいろいろの階級の人々に接し、さういふ人々から

貰に丁寧なる世話を受けて居る。それは私等にまで紹介狀を書かせ維也納の日本公使館に頼んで日本に上陸した時、荷物をあけないやうにする手紙を貰つたほど、用意周到に立ちまはつたその結果に他ならぬのであつた。

然るにかの女は盡くその厚遇を種にして皮肉で奇警な描寫を敢てしてゐる。それゆゑこれは小泉八雲のものと反對の意味の特色ある著書と看做していい。そしてこの著者の傾向をば、千年來も養はれ來つた猶太族の氣性を以て說明することが出來るとはじめ私は思つたのであるが、單にそれのみではない。やはり旅馴れぬ一女性の氣疲れも手傳つてゐるとおもはれるのである。それゆゑ、日本を去つて滿洲を訪ね、張作霖から失拉克先生惠存と署名した寫眞などを貰つて喜んでゐるあたりは、追々旅馴れがして氣が柔になつたと看做してもいいところがある。

○

私がシャレク老嬢の日本紀行に興味をひくのは、私がこのしなびた様な女と曾て維也納で會つてゐるからでもあり、かの女の猶太族であるからでもある。

ある晩春の日の午後に私は一二の友と共に東葛飾郡の或村を散歩したことがある。せまい路地を幾まがりして來ると、二人ばかりの可哀らしい娘とお上さんと媼と四五人してかたまつて何か話をしてゐた。私等が通つたとき娘の一人が一瞥したかと思ふと、

『あら、みんなプラチナさんだわ』

と云つた。さうして、上さんも媼も一しよになつて笑つた。それがいかにも嬉しさうである。私はそのとき思つた。かういふ皮肉は直ぐ消えてしまふ皮肉である。シャレク老嬢の皮肉はさうは行かない。何となし根ざすところが深い

から、そこがやはりおもしろいのである云々。

○

維也納あたりに幾代も住んでゐる猶太族は、わし等は波蘭の猶太族とちがふといふことを好くいふ。これに似た事は、バウエルの説に基いて意見を吐いてゐるカアル・マルクスの言にも當はまるだらうとおもふ。

マルクスは猶太族を云々する場合にはどうも Sabbatjuden を觀察したゞけでは分からぬ Alltagsjuden を觀察しなければならぬと云つてゐただらう。つまり彼等は安息日に猶太殿堂に集合して殊勝に振舞つてゐるのであるから、さういふところを見ても分からぬ。日々彼等がどうして生きてゐるか、その爲事の有様を見ねば分からぬといふ意味であらう。

そんなら、彼等の日常の生方は何かといふに『錢人』だといふのである。守

錢奴だといふのである。この族の胤のやうな不思議な國民性はつまりそれだとマルクスがいふ。しかし『錢人』になるには氣を働かせねばならぬ。鋭く立ちまはらねばならないのであるから、シャレクのやうな女の心持は『錢人』の一つの變形と看做していいとおもふ。

かの女の紀行文を讀むと、環境に細かく反應しても、素直にそれを受入れるといふことがない。何かそこに難癖を附けねば止まないのである。そこに行くと、仙臺にゐたモオリッシュ教授の日本通信などは實に素直なものであつた。例へば『能』についての記事でも、理解の出來ない點では二人とも同じであらうが、教授の方は素直に柔かに書いて居るし、一方は惡口を書いてゐるのであるから、そこに差違が生じて來るのである。

それであるから、外國通信などいふものは結局自分の腹の中をあばいて見せるやうなものかも知れぬ。

長崎追憶

一、猶太殿堂

長崎に居たのは、もう十年も前のことであるから、追憶といつても切れ切れにしか浮んで來ないほど、もう遠い世界のやうな氣がするまでになつた。町の名なども大部分忘れてしまつたと謂つていい。その追憶の一つに猶太殿堂に行つたことがある。殿堂といふけれども極く低い普通の西洋家屋のやうな恰好をして、ただ日本づくりの家とは稍趣を異にしてゐたに過ぎないものであつた。

大正八年九月二十五日のことである。けふと明日は恰も猶太暦の新年にあたるので、この南山はその殿堂で新年の祈禱が行はれるから見に行かないかと誘つて呉れたので、時間の都合をしてそこに行つた。

そこに猶太人が十人ばかりゐて、もう儀式が始まつてゐた。常には商人として愛想よく働いてゐる、Lessner とか、Cohn とかいふ人等も、立派な僧服を著、帽を冠つてゐるのがひどく私らの目をひいた。

十人ゐなければこの儀式をやるわけには行かないといふので、朝鮮からと滿洲からと魯領ウラジオストックからと三四名呼び寄せたといふ話であつた。もとは、長崎にも西洋人が多く住んだので、從つて猶太人も多かつたに相違ない。今は追々西洋人の數も減り、猶太人も十人に足りなくなつた さういふことも私等の心をひいた。その盛な時に、兎も角この殿堂を建てたのに相違ないが、今はもうさびれてゐる。

何か變なものに、高價な衣裳を著せ、それに金色の冠をかぶせて、それを安置し、禮拜し、持ちまはつて銘々接吻をしたりする。これの中味は、どうも經典であつたやうにおもはれる。モオゼ經典の如きものであつただらうか。

幕も立派で、これも幾年か使ひ古したもののやうであるが、人間の手掌が二つばかり縫ひ取つてあり、その兩側には、葡萄に腹が赤く羽翼の青い鳥が縫取つてある。その上の方に妙な文字が横に縫取つてある。これは猶太文字であつた、その下の方に三角を組合せた印が縫取つてあるが、何かの象徴だらうが、今は忘れてしまつた。

經を讀んで、しまひに『オウメン！』といふ。これは耶蘇の方とおなじであつた。

それから、銘々、先程いつた金いろの冠をかぶつたものの前に行つて、禮拜し、何かいろいろの事をいふ。私等の心をひいたのは、二人の痩せた貧しい装をした男が支那人の歌のやうな節をつけて何かいつてゐたが、しまひに聲を立てて號泣した。それが、隨分長くつづくので、實に變な氣がしたのであつた。そのつぎの小柄な男もまた同様であつた。かういふことは佛教の儀式にあるか、

加特利敎の儀式にあるか、私は知らないが、何しろ陰欝な寂しい光景がある。誦經のこゑも加特利敎の方の朗々たるものでなく、細く、しやがれて音が高くて、支那人の歌ふのに似てゐる。歐羅巴人が、東方といひ „Orient" といふ特徴がやはりこのへんにもあるやうな氣がした。

彼等は、つまみ鼻をかむ。これも普通の歐羅巴人とちがふところかも知れぬなどと思つた。

新年の祈禱はさういふ悲しい陰欝なものであつた。彼等は、イエルサレムにていのち終らむといふことを禱つたのだと云うた。同行は、長崎の歴史家古賀十二郎氏、長崎高等商業學校教授武藤長藏氏であつた。

そこを出ると、支那街でも何となし陽氣で明るい。私等はそこの店で、籾がらの未だついてゐるピーダンといふ雞卵などを買つた。

二、婢

長崎に行つてから、婢のいいのがないので困つた。それに獨身で半年以上も暮らしたので、不自由の目に遭つてゐる。

ある時、五島うまれだといふ小女を雇つた。十七ぐらゐであつたかと思ふが小柄で脊がひくく、せいぜい十五ぐらゐに見えた。いろが淺黑いが、顔が圓く二重瞼などをしてゐるので、一見のうへ直ぐ雇入れたのであつた。

女は甲斐甲斐しく立働いた。晝のうちは私は勤めに出るので家にゐない。夕がた歸つて來て夕食をすますと、いろいろ用事が溜まつてゐるので二階に上つてしまふ。女は階下で用を濟まして夜もはやく寢るといふ風であつた。

二三日立つと、毎日曜に早朝から中町の天主堂に禮拜に行きたいといふことであつた。女は切支丹信者の流れで、先祖以來ずつと今まで續いてゐるのであ

つた。私は女の振舞を殊勝のことにも思ひ、長崎のエキゾチズムについてはかねがね興深く思つてゐたから、そのことを直ぐ許可した。

女は日曜毎に天主堂に通つた。時にはなかなか歸つて來ぬので、朝食の支度に間にあはず、私はみづから味噌汁を煮たことなどもある。併し私は女の行爲をとがめようとはせず、いろいろ禮拜のことだの、經文のことなどを訊ねたが、女はさういふことは餘り知らなかつた。浦上村あたりの老女なら、みな羅甸語の御いのりを知つてゐるが、私の所の小娘が其れを知らぬといつて、私は直樣輕蔑する氣にはなれないのであつた。

このやうにして數ケ月立つた。ある日、病院の事務長が私に向つて、私の家にこのごろ毎日鼠が巣を喰つてゐる。めすの鼠と、をすの鼠が毎日ままごとをしてゐる。何せ頭の黒い鼠だから氣をつけなさい。といふことを長崎辯で注意して呉れたのであつた。それから私が女に詰問すると、あれは五島の兄さんが

訪ねて來たのだといふことであつた。

それから一二週間も過ぎて、あるゆふがた私が歸宅しなに臺所に顏洗ひに行くと、その刹那いきなり戶を排して逃げて行つたものがある。私ははづした近眼鏡を慌しくかけてそれを見きはめようとしたが、その時はもう誰も居なかつた。女に强く問ひただしても女は强情に言ひ張つて白狀しなかつた。

ここではじめて私は女の行動に注意し、ある日曜に、女が出て行つたあと、一つしか無い女の行李をあらためると、中から澤山の手紙が出て來た。手紙は鉛筆で書いたのもあり、薄墨で書いたのもあり、いろいろである。私は時には動悸させながら其等の文句をひろひ讀した。

『デウスさまの、みめぐみにより……』といふやうな文句で、甚だあまい戀愛的文章に滿ちてゐた。事務長が調べて吳れたところに據ると、男は三菱造船所の職工で每日曜に中町の天主堂に來てゐるうちに、私の家の下女に目をつけ、

たうとう戀愛成就をしたのであつた。『何のあれは三菱の職工ですたい』などと事務長が云つたのを覺えてゐる。私は其等の手紙の文句を幾つか寫し取つてしまつて置いたのが、大正十三年の火事で燒けた。これはどうも惜しくないやうで惜しい。

女は、ねちねちしてゐて、つひに强情を徹さうとした。それを私はやはり『切支丹氣質』の一種類だとあとで思つたのであるが、切支丹宗門に對する迫害史は近來諸家の研究によつて益々細かいところが世に分かつて來、同時にマルチリウムといふ語も、殉教等の語と共に異樣な光を帶びて來たやうであるけれども、當時の役人の憤怒の心を釋明して呉れる史家がどしどし出なければ、私が『デウスさまのみめぐみにより』云々の文句に憤怒を發した心理が永久に分からないのである。

（昭和三年七月）

谿谷

肥前國、溫泉ヶ嶽の溫泉の湧くところを通り越して、外國人どもの爲めに設備した高原のゴルフ場に行く途中に誠に深い谿がある。その谿は、群がる大樹ですつかり埋まつてゐるが、併しよくよく諦視すれば、谿の底の方に水の幽かに流れてゐるのを見ることが出來る。

私は大正九年の夏に溫泉ヶ嶽に轉地したことがある。長崎では暑くて暑くて溜まらぬといふ頃であつた。私は流行感冒後に疾を得て毎日紅い痰を出してゐた。

私は溫泉ヶ嶽のその谿谷に下りて行つて、終日日の光の差さぬ石の蔭に暮ら

すのを常とした。たまたま目前の苔の生えた石に私は紅い色のついた痰を吐くと、いつしか彼の酢蠅といふ奴に似た蠅などが來て、それを甞めてゐることなどもあつた。

芥川

香川景樹の歌に、『津の國にありとききつる芥川まことは淸きながれなりけり』といふのがある。僕はいつかこの一首を見付けて直ぐ芥川龍之介さんのことを聯想したのであつた。然し大した歌でも無いと思つたし、面と向つて景樹の歌などを持出すのもわざとらしいので誰にも口外したことはない。そのうち芥川さんは亡くなられてしまつた。さて、この歌をおもひおこして口ずさむと妙に心を引くものがある。舊派歌人の歌ではあるが、芥川龍之介さんの挽歌に出來たもののやうな氣がしてならないこともある。

晩秋小筆

宵闇の空にもう雁のこゑが聞えるやうになつた。飛行機などが時々空中を轟かすので、雁の飛ぶのも少くなつたやうにもおもふが、それでも渡り鳥はもう空を渡つて來るやうになつたのである。

さういふ時節が來た。この夏は避暑にもゆけず忙しく働いて居り、輕井澤へんに避暑してゐる友などから繪葉書などを貰ふと、ひとり寂しくおもふこともあつたが、雨がしきりに降り續いて盛夏も盛夏らしくなく、書物にも着物にも黴が吹き、つゆ時の再現らしき日が續いたかとおもふと、いつのまにか立秋になつてしまつた。

そのうち蟋蟀などが鳴いて、秋の彼岸になつた。夏の休みぢゆう元氣を盛り返した人々も勤勉に立働き出したが、夏の休みぢゆう休む暇のなかつた人々も何か新鮮な爲事にありついたやうな氣持になつて立働いてゐる。蠶の出來も惡し、不作だらうといふ心配が、一時人々の心を領してゐたが、美しい天氣が幾日も續いて二たび愁眉をひらくやうになつた。栗の實も金に色づいて笑んで落ちた。

　雁のこゑはものあはれである。それであるから古人もこの聲に心をひそめて詠歎した。それらの詠歎は詩として今に殘つてゐるから、僕らは現今その詠歎に接することが出來る。芭蕉の、病雁の夜寒におちての句の如きは、今もなほ僕らの身に沁み徹るのをおぼえる。

　舶來の近代主義は、西洋流であつたから、花鳥風月を除去しようとし、風流は一顧の價もないものとせられたことがある。これは陳腐を動搖せしめるのに

利目があつたと僕もおもふ。近時、唯物說の舶載と共に、生產、生產力、生產關係、階級爭鬪といふやうなことが威勢よく叫ばれるやうになつて、そこで勢ひ、花鳥風月の道はひどく輕蔑されるやうになつた。しかしこれもすべての沈滯の氣を破るのに利目があつたと僕はおもふ。

ただ、雁のこゑの感味は、これを直接の感覺にうつたへ、現實のものであると飽くまで理解することによつて、はじめて古人の感情と並行して行くことが出來るのであらうか。

一日の勞働を終へ、少くも一ときのゆとりを得た時に、それであるから僕等は、雁の一聯を小手をかざして見てゐるミレエの畫境にも參入することが出來るのであつて、これは必ずしももはや一通りの陳腐ではない。況して此處は佛蘭西ではなく、汀の葦に霜のはげしく結ぶ國柄であることを、僕は今思ふのである。

大正十四年の春に、家の燒あとに、鐵道草といふ草が一めんに生え、秋に至るまで威を逞しうしたことがある。鐵道草は舶來の雜草であるから、さういふ名が附いてゐる。一名明治草などといふのもさういふ關係に基づいてゐる。この草は、春先には細かく柔い愛すべき形をして萌えるが、夏分に五六尺にもなり、花が咲くやうになると極めて風情のないものになつてしまふ。

この草が盛に萌えると、從來の日本にあつた雜草が壓倒されてしまひ、あかざのやうな繁殖力の强い草でも、鐵道草の生えてゐる範圍に及ぶことが出來ない。そのほかの日本從來の草などは、秋ぐちになり、鐵道草の下かげになつて幽かな花をつけてゐるやうな工合である。

僕は、そのころ家財全部を燒いてしまひ、心にひどく苦しんでゐた頃なのでかういふ植物界の繁殖爭鬪のありさまにも心を留めて觀るやうになつた。そこで、その觀察した記事をば或る雜誌に書いた。そのとき僕は、今は鐵道草は、

このやうに威を逞しうしてゐるが、ひよつとしたら二たび從來の日本の雜草の方が根づよい力を見せるかも知れない。といふやうな一種の感傷的な言葉を附加しておいたのであつた。

然るに、大正十四年が過ぎ、大正十五年が冬になる頃までは鐵道草は依然として繁茂し、その冬枯れたものを刈取つて、風呂の焚付にしたくらゐであるのに、昨年、つまり、昭和二年ごろから何となし鐵道草の繁殖力が減少して來、そこには細かい日本の從來の草が一めんに生えるやうになつた。そこに從來の平凡な、名も無いやうな草も雜つて生えるので、鐵道草の勢はひどく減り、今年卽ち昭和三年のこの冬には、風呂の焚付にするやうなものはつひに見つからなくなつてしまつたのである。

この現象は、若かつたころの幸田露伴翁の趣味であるが、僕といへども是等について趣味のないことはない。よつて一筆書きとゞめておくのである。

南京蟲

結婚して漢口に行つてゐた妹が懷妊したので東京へ歸つて來た。それは二月の事であつたが、五月になると丈夫な子が生れた。ところが暫くすると家に南京蟲がわいて、女中などはそれに螫され、紅く腫れたところに大小種々の水泡まで得てひどく驚き恐れた。私は癇癪を起し、妹を罵詈したりした。けれども、妹も素直にはそれに服從してゐなかつた。『それはお兄樣が船からお持になつたのだかも知れないわ』などとも云つた。實際その懸念もあつたが、何むき私は、これは實に困つたことになつたと思つた。

嘗てアルプス山系が延びて來てまさに盡きようとしてゐる所の溫泉村を歩い

てゐて、とある店でかういふ古びた繪を見たことがある。一人の老爺があの山鳥の尾の羽の著いた帽をかぶり、半ずぼんに縫取のしてある胸當を著てギタを彈じてゐる。その老爺の前では家がどんどん燃えてゐる。炎は不器用な手附で紅く空にのぼる所を畫いてある。老爺はギタを彈じながら訛の多い詞でこんな唄を歌ふ。南京どらみの畜生、これでもいかぬか、これでもいかなきや勝手にしろ。この繪は南京蟲退治の困難なことを示してゐるのである。火事にでも會はねば駄目だといふことを示してゐるのである。さういふ繪も實は偶然にして出來たものでないことを私は好く知つてゐる。

そこで私は實に困つた事になつたと思つたから、いろいろな退治の方法を毎日やつた。けれども夜になると何處からか出て來て私共を襲つた。そのうちにいつか梅雨もあがり八月になり九月になり十月になり十一月になつた。私はいつのまにか南京蟲の事を考へなくなつた。これはいつのまにか南京蟲が出なく

なつてゐたからである。調べて見ると九月ごろから誰一人螫されたものはゐない。或時は私の國語辭典の間に大きな奴がつぶれて死んでゐたりした。

私はやうやく蚊帳をとりはらつた床の上に居り、一時あんなに繁殖する勢を示し、今は一つも出なくなつた南京蟲のことを思つて、獨逸語の „gedeihen“ といふ語を聯想した。これは繁榮するといふ意味の語である。少し悟りめくが、宗教の渡來、思想の傳播などにしてもさうだ。私の家はたまたま南京蟲に都合が悪かつたやうに、國土によつて gedeihen しないものが幾らもあるだらう。これには微妙な因縁があるだらう。そこで例へばゲーテのファウストあたりから旨い用例を拾はうとしたが急の間に合はない。„Der Herr der Ratten und der Maeuse, Der Fliegen, Froesche, Wanzen, Lause...“ などを見つけたに過ぎなかつた。

山蠶

今では養蠶の術が驚くべき程發達したから、結句、山蠶のことなどは餘り云はぬやうになつた。併し以前には熱心に山蠶を養ふことを稱道した人もあり、地方によつては普通の養蠶の片手間に養つた。それを手廣くやらうといふ人は先づ先づ空想家であつたと謂つていい。

普通の蠶は、溫度、濕度の變化によつて發育の障礙を受ける場合が多いが、山蠶は野生のものであるだけ、さういふ外界の刺戟に堪へしのぶことが出來るが、そのかはり外敵からしじゆう襲はれることを免れない。天然の林中におのづと生育する山蠶は青い色の保護色でそれらの外敵から免れてゐるが、人工を

加へて養ふとなると、その外敵に遭遇する場合が多くなつてくる。

僕の祖父の藏書のなかに、備中の人、佐伯義門といふ人の書いた『山蠶養法』といふ小册子があつた。僕は今でもこの小册子を愛してゐる。そのなかに、やはり山蠶の外敵のことを書き、その外敵をのぞく工夫を述べたところがある。

山蠶ノ害ヲナスモノ甚グ多シ。青蛙。蝸牛。蛇。蟻。蜂。蜘蛛。鳥。鼠ノ類皆妨害ヲナスモノナリ。蟻ヲ防ニハ、樹根際ニ髮毛ヲ卷キ付、或ハ心太草ノ煎ジ汁ヲ濯ギ置ヲヨシトス。又鳥黐ヲ卷ケバ獨リ蟻ノ害ヲ防グノミナラズ、諸蟲ヲモ防グベシ。鳥類ヲ防グニハ飼場ノ中央高キ處ヘ番小屋ヲ設置キ、其小屋ヨリ滿面ノ飼場ヘ數條ノ繩ヲ引亘シ、其繩ニ幾多ノ鳴子ヲ釣リ置キテ之ヲ守ルベシ。鳥類ヲ追トテ鐵炮螺貝等ヲ用ユルハ響キ强クシテ蠶ニ害アリ。サレドモ鴉ナドハ繭トナル後マデモ好ンデ喰フモノナレバ、蠶スデニ生長シタル上ハ、時々威シ筒ヲ用ユルモ苦シカラズ。蜂ヲ防グハ夜中飼場ノ傍ラニテ篝ヲ焚ケバ火

中ニ飛入燒死ルモノナリ。

このへんの文章は僕にはなかなか興味があつた。山蠶といへども無間斷の外敵を無視するわけには行かず、佐伯氏は山蠶の敵として蝸牛などまでも觀察してゐるのが僕には面白かつたのである。

僕の少年のころは、楢、櫟の林中で山蠶を見つけて、その幾つかを飼つたものであつたが、山蠶の食用樹葉は、その他に椎。栗。柏。樫。楊梅。などをも數へてゐるから、さういふ樹葉でも飼養することが出來ると見える。併し『楢、櫟を以て最上とす。繭糸の大小美惡收納の步合等專ら其食葉の種類に係る。宜しく爰に注意す可きなり』と書いてあるから、やはり、楢、櫟、かしはの類を尊ぶのである。

『山蠶養法』には木版の繪圖が附いてゐて、山蠶飼養の法を示してゐる。その一つに、內飼の圖といふのがある。これは、楢、櫟の類の枝を土甕、竹筒、酒

櫓の明きなどに挿して、家屋の中に置いて飼ふのである。それゆゑこれは大規模には出來ない。それから池飼の圖といふのがあり、大池の中に處々に挿樹とした楢、櫟の小林を形成してゐる。鳴子が一面に張られてゐる。一人の男が小さい筏に樹枝を満載して漕いで歩くところが描いてある、向うの方は森に續きその向うに山が見えるやうに描いてゐるのは大規模のところを示したのである。それから溝飼之圖といふのもそれと大同小異で、溝のある遙か向うまで、挿樹の林が見えるところが描いてある。それから、簀飼之圖といふのは、簀を以て圍つてあるところで、丁度菊花壇のやうに保護してあるのである。もつと大規模になると、山一めんが楢、櫟の林で、そこに山蠶が澤山育つて居り、鳴子が遙か向うまで一めんに張つてあり、一人の男が櫓の上にのぼり、鳴子の糸を引いてゐる。群鴉が飛びまはつてゐる。さういふところの繪が描いてある。

佐伯氏は、收獲地坪表を作つてゐる。繭收獲數は一坪に就き繭三十個とせば

一畝に九百個、一反に九千個、一町に九萬個、百町に九百萬個、一里方に一億千六百六十四萬個になる。生繭代價は、一個の價二厘とすると、一坪六錢、一畝に一圓八十錢、一反十八圓。一町に百八十圓。一里方二十三萬三千二百八十圓。さういふことを細かく計算してゐる。

それから『山野の遺利巨大なること實に意外に出づるを知るべし。一里方は廣きが如しと雖、僻地山村に於ては一區內を出ずして一里方の槙山を得るは難しとせず。凡槙樹は切取後十年以上を經るにあらざれば再び薪木となすに堪へず。其薪木に堪るものも一反歩の代價僅かに四五圓に過ぎず。若し之を轉用して山蠶の養木に備ふれば、三年目にして前文の利益を見るべし。此利益を知らずして、妄りに薪炭に伐り荒すは惜むべきの至りにあらずや』と云つてゐる。此處で『槙山』は楢、櫟等の雜木山を意味して居る。

佐伯氏の書物は明治初年のものである。それ以前にも、それ以後にも同樣の

書物があつたとおもふが、結局、山蠶の養方は普通の養蠶ほどに發育せずにしまつた。野生のものは、人工を以て思ふ勝手な結果に至らしめることはむづかしいと見える。

僕は高等小學校を卒業しようとしたころ、將來はいろいろの空想を有つてゐた。併し直ぐ中學校などに入學させては吳れなかつた。僕は小學校のかへりに春も追々深くなつてゆく林中に寢ころんで、ひとつ繪かきの修行にでも出掛けようか、それとも寶泉寺の徒弟になつてしまはうか。或はここの新道のところで百姓をしながら山蠶でも飼はうか。そんなことを思つて時を過ごすことが多かつた。僕の寢てゐる林中には、もう山蠶は餘程大きくなつて幾つも動いてゐるのが見えた。

僕の祖父なども、或る時期には山蠶飼養を空想したことがあつたと看ていい。併し實行は爲なかつただらう。山蠶の寫象は妙に僕を親しくさせ、また妙に僕

を沈欝にさせる。年はすでに初老を過ぎ、山蟄を見ざること十數年であるのに、その寫象は殆ど幻覺にひとしいやうな現實性を以て、僕の眉間にあらはれてくるのはどういふわけであるかと思ふことがある。

かてもの

出羽米澤藩の施本に、『かてもの』といふ小冊子がある。米澤藩はさう大藩ではないが、代々賢君を出し、極力産業を奬勵したから、藩としては富んでゐた方であるが、東北地方の度々の飢饉にあひ逢ひ苦しい經驗を嘗めたので、まさかの時の用意に一般の士民にまで『かてもの』の知識を普及せしめようとした。その用意周到な點に僕の注意したのは、同じ出羽でも僕の方は他藩の領分であつたから、餘分に斯ることに注意したと謂つていい。

『かてもの』は糅物（かてもの）の義（ぎ）である。この施本の序には次の如くに書いてゐる。今讀易からしめむために、假名を漢字に改めたり、送假名をしたりして書寫する。

『かて物。凶年備の事、年來御世話の下候末、深き氣遣は有まじく、其年次に當らば、猶も御手當の事はいふまでもなく候へども、行立がたきものもあるべく、又二年三年つづきての不作も知べからず。然らば、飯料は餘計に貯ふべく麥、蕎麥、稷、稗の蒔植より、菜大根の干たくはへまで年々の心遣はいふまでなく、其他もろもろのかて物をば、其相應に混へて食ふべき事に候。然ども其の品、其の製法を知らずして、生をあやまる事の御心元なく、廣く御儒者衆におほせてかて物になるべき品々、其の製法までを撰ばせられ候間、民々戸々豊かなる今日より萬々一の日の心がけいたすべく候。』

この書物は、はじめに、常には菜として食はぬが、非常の場合には食ひ得るといふやうな野生の草木の類をば、いろは順に分類し、糅物として役立たせる方法を記載し、その數八十二種類に及んでゐる。藤の葉の條に『若葉を灰水にて煮、水を替へ、二三宿さはして後食ふ。又かて物とす。味噌鹽なくば食ふべ

からず。但し産婦（おぼこなし）は食ふべからず』とあり、杉菜の條に、『能くゆびき食ふ。又かて物とす。但瘡疹ある人は食ふべからず』などとある如きを以てその一般を推することが出來る。

說明は單にそれにとどまらず、總體の注意にも及んで居る。例へば『右、木葉、草根は人の常に食馴れぬ物にて、口腹に叶はぬはいふまでなく、特に凶年に當て、身の衰に食あたりのあらん事、必ずその筈の事。尤も此ゑらみは御醫者衆各製し嘗みたる上には候へども、嘗に少しく食ふと、衰たる腹に多く食ふにも違も有べく、製方には幾ばくも念を入べく、又味噌鹽をまじへて食はねば大事に至るよしに候へば、必ず味噌鹽にて調食ふべく候事』

『草木のもへ（萌）はたち。去年の凶作に今年必ず食物乏しからんといふ其春は何木にても何草にても嫩芽（おひはたち）嫩葉（わかば）を摘とりゆびき干し、一人のつもり五七俵八九俵も圍ひて、かて物を足すべし。嫩芽嫩葉のゆびき干し

たるは草も木も大かたは毒なしと云ふ。然といへども、どくだみ、とりかぶと、大せり、鬼せり、などいふたぐひは必ず除くべし』

それから、村役ども常々心を用べき箇條といつて『凶年に當つて穀に次ぐ大事の物は味噌と鹽とに候。平年、穀食するだにも味噌鹽なくしては穀の用をなさず、況んや穀食乏しく木の葉草の根を食ふ時をや。然らば鹽と味噌との世話に心を盡すべし』云々。また、味噌仕入の法といつて、ぬか味噌の法。その叉法三種。五斗味噌の法。飛彈味噌の法。末醤の法。とち味噌の法。凶年用心圍ひ味噌の法。さういふ方法を說いてゐる。

もつと持久戰のつもりになり、かて物の心懸に蒔植おくべき物。干かて數年を經て變らぬ物などの見出しのもとに、いろいろの物を書いてゐる。

僕が幼かつたころ、祖父はよく天保飢饉の時の有樣を話して呉れた。僕の村界隈では原の野生で食へる草は皆食ひ盡してしまひ、松樹の皮を剝いで糅餅に

するので、一めんの松樹が赤肌になつたといふ話であつた。信心ぶかい村民も野獸狩では足りずに到頭犬も馬も食つたさうであつた。

さういふ東北地方の飢饉は、及んだ被害は單に東北地方のみに限られてはゐなかつた。江戸でも上方でも米價がどしどし騰貴して、富豪に對する反感から米屋こはしとなり、大鹽平八郎の亂といふやうなものになつた。プロレタリアートの思想運動のごときも晴々の裏に釀されてゐた。それであるから、幕府の爲政者も米價の調節に骨折つたこと、森鷗外先生の文章、本庄氏の著書その他の時代史によつて知ることが出來る。歐羅巴に於けるさういふ思想は概ね猶太人によつて唱へられた如く、太平安樂の境にゐては、さういふ運動は先づ先づ起らずに濟んでゐる。佐藤信淵の思想の一部でも、豐穰な地方に起らずに、飢饉の多い邊土にあつて起つたのは決して偶然とは云はれぬであらう。

歐羅巴大戰の時、戰やぶれた墺太利あたりでは食物の不足を告げたと云はれ

てゐる。戰すんでからも土地の人民は、當時を追懷して幾月も幾月も一片の肉をも食はなかつたことを悲しさうな顏をして話した。併しさういふ場合でも或る食店の地下室では富豪の群は芳醇な酒の栓を拔き油ぎつた獸肉をむさぼり食つてゐたといふことをも話した。話する時には彼等の顏に紅の潮してくるのがありありと見えた。

米澤藩で『深き氣遣は有まじく、其年次に當らば猶も御手當の事はいふまでもなく候へども』といふ達しをしたのは、眞心があり簡潔で旨い文章である。それのみではない。『かて物』の說いたところは、先づ草木類の食料であつた。ついで味噌の製法であつた。ついで干物として貯ふべきもの、かて物として栽培すべきものを說いた。これは人民の多くが穀食草食であるからである。併し『かて物』は最後に肉類の事をも記載することを忘却せない。これなども歐羅巴人の場合と反對であり、戰爭中の獨墺人は食物に窮したなどと謂つても、日本

東北の飢饉のひどかつた時などに比して、まだまだ生温いと考察していゝ。

『魚鳥獣肉の心がけ。凶年ならぬだに、魚鳥毛ものの肉を食はねば、生を養ふの助少し。況や老いたるものは肉にあらざれば養ひがたし。特に凶年穀食乏しきをや。かゝる年次によきもの與へがたきは云ふ迄もなし。責めては鹽鰯、ほしこ、にしん、などの類まれまれにも與ふる心づかひも其世話の一つなるべし。野猪の肉を厚さ二三寸長さ六七寸に切り、蒸籠にて蒸したるを取上げ、灰を塗り、繩にてあみ火にほしかため、火棚か梁のうへかなどに吊し置けば數十年を經て變らず。用ゐる時はあくを洗ひおとし小刀にてけづり用ゐるに鰹節におとらずといふ。但能くむして脂を去らざれば蟲ばみて永く圍ひがたし。よくよく蒸すべし。然らば野猪ばかりにも限るべからず。何毛ものの肉も同じなるべければ、是等の心がけも亦其心懸の一なるべし。又田螺(たにし)もからを去りゆでて干し圍へば幾年を經ても蟲ばまずと云。魚鳥毛もののあぶら、老い衰たる腹を

養ふべし。是も亦心得の一なるべし』

僕が稚くて尋常小學校に通ふころ、おほぜいの兒童は冬の大火鉢を取かこんで、銘々の握飯を火で温めて食ひ食ひした。その握飯は糅飯のが大部分であつた。糅は單に麥ばかりでなく、菜、大根の葉を少しく天日に干しそれを細かくきざんで糅にするのである。糅の三分のもあり、四分のもある。半々ぐらゐのもあつた。糅の少い白い色をした握飯の方を小供どころにも尊敬し、菜の糅の多い握飯が出ると、皆で笑つた。菜大根の糅は多く冬季にこれを用ゐ、麥の糅は四季にわたつてこれを用ゐた。然し僕が町の高等小學校に通ふころは、町の兒童は士族の子でも商家の子でも、盡く眞白な飯の辨當を持つて來て居つた。それを先づ僕は驚いて視なければならなかつた。

「かてもの」補遺

米澤藩の『かてもの』を印刷したのは、享和二年三月あたり（西暦一八〇二年）であるから、無論、天明の飢饉を土臺として將來を慮つたものである。天明の飢饉は三年四年と續き、四年は奧羽地方が最もひどかつた。不作はなほ續いて七年には諸國の飢饉、窮民の騷擾があり、江戸にも米屋こはしがあつた。さういふ場合であるから、寛政と改元してからも、華美な調度の賣買を禁じたり、旗本からはじめて節儉を守るべきことを命じ、寛政二年には全國に布令して鄉藏を作り穀類を貯藏せしめてゐる。

米澤藩の『かてもの』はそれ以後であるが、『かてもの』の配本があつてから

約三十年を經て天保の飢饉があつた。卽ち天保四年に諸國が不作で特に奥羽の地がひどかつた。それから不作が續き、米價が暴騰した。七年の飢饉についで八年のはじめに大鹽平八郎の亂があつたのである。

『かてもの』の知識は天保の飢饉に役立つたことを僕は疑はない。特に結文の『右は今の豐かなる日に能々心得させよとの御事に候條、油斷すべからざるもの也』といふ趣意は、幕府の意圖に出でたと謂ふよりも、實際の苦しい經驗から割出したものと看做すべきである。

米澤藩は右の如くであるが、僕の鄕里に近い上山藩でもやはり略同樣のことを爲してゐる　以前のことは略して、天保四年六月から氣候が不順で不作であつた。それから天保七年がひどかつたことは前にも記した。上山藩では天保四年の不作に鑑みて天保五年に『かてもの』を農民に配布して居る。これは恐らく米澤藩の例に習つたものともおもふ。

いま、『上山見聞随筆』（上山町史収）に據ってその一端をうかがふ。

一、天保四年。癸巳、饑饉の事。この年氣候不順にして凶作となる。前年辰の冬は寒氣殊に甚しくして堪へがたく、木の枝にとまる鳥からすまでこごへ落つ。竹木枯るゝ、田植付に至りても季候寒く、田植布子といふことわざの如く、實に布子着て田植する程の事なり。暑中の節、かたびらを着たる日は三日に過ぎず、こま鳥は里に來りて鳴く。この鳥は奥山にのみ居て、常の年は里にくることなし。出穂に至りて、穂のこごむ處更になくして、翌年の種子うしなふ。糧つきて窮民塗炭に苦しむ。飢て路傍に倒るる者數をしらず。溝に菜の葉流れず。塵塚に大根の切くずもなし。草盡き根ほりて、はては松皮をはぎて食し、親は子を思はず。子は親をかへりみず。かかる有様は、實に餓鬼の境界とやいはん。おそるべきの甚しきことなり。

一、越後國御領分、七日市御陣屋に於て、御奉行高橋文大夫氏、御領分の御物成米を嚴重に御取立ありて、一時に船に積入れ酒田に廻して、舟町に揚げ、其頃裏町萬屋善輔（高橋）前川筋を堀り替て、舟町より舟の通路を開きし頃なれば、右の米穀を舟にてのほ

せ、藥師庵の裡に揭げ、これを以て諸民をすくふ。人別割符を以て、壹人前貳合づつ其日毎に、町會所に於て賣下げに成る。其外町在身元有志の者、最寄に安米を出し、或は粥を煮てこれを施しなどして、やうやうにしてこの困苦を救ひき。

一、高橋庄三郎(豐昌)高橋善助、其外の有志者奮激して、窮民を救はれ、藥師庵に於て粥をたいて、飢渴の者をすくはる。此外有志者も時々すくはれしなり。されども救ひの手に及びがたく、路頭にたふれ死する者多くして、毎日番太の手にかゝり、地藏堂坂に大いなる坑を掘り、これにつみ重ね、埋めしなり。其所に無緣法界、平等利益の供養塔を建つ、實に目もあてられぬ有樣なりしとぞ。

一、此巳年の米御直段は、金拾兩に米拾貳俵なり、翌年春に至りて、壹俵代金壹兩貳朱までに成る。されど賣る人なし、其節米穀他處出を停止せらる。

一、天保の凶歲の折、牧野村彥右衛門と云者、妻おけさのすゝめに應じ、德政願の企を成し、藤吾村與總吉と云ふものと、兩人打首に行はる。十日町最上屋勇吉、依賴によつて德政の願書を書たる咎によつて、青竹閉門に成る。

天保五年は豊作であつたが、窮民業務を失つて困厄した。高橋庄三郎といふものの土工を起して失業者を救はうとした。また藩で救荒植物副食物を調査せしめ、題して『かてもの』と名づけ、郷村に分與してゐる。町史の文は次の如くである。

一、天保五年の春に至り、窮民活計の途を失ひ、困難の折から、高橋豊昌氏、中川郷村の者をして、多く石を運ばせ諸人の仕事無きを助け、また廣く貧民をして、砂利を運ばせ、右の石を以て、湯尻川下大湯の處より、新丁欄木橋下迄、石を積ませ、法圓寺裏より、稱念寺裏橋端迄、石垣を積む。是にて窮民活計の途につく。此外種々に諸人を救助せしこと擧てかぞへがたし。

一、天保五年甲午は、また近年稀なる豊作にて、夏中毎日晴天となり、田畑共に稀なる上作なり、稻六十束にて、米四俵ありしと、米壹俵代貳分貳朱位になる。

一、はすのは。一、へびあさ。一、とほな。一、とこわかのわかば。一、とうごほうのは。一、おけらのわかば。一、からすうりのは。一、かばのわかば。一、からすのや一、かやな。一、がつきのわかば。一、たびらこ。一、つゆくさのわかば。一、うしひたい。一、のにんじん、一、のぎく。一、くわんざう。一、やちぶき。一、かざうつぎのは。一、またたびのわかば。一、ごんがらみ。一、くずのわかば。一、ひるがほ。(ながくく へばあし) 一、あさしらげ。一、さいかちのわかば。一、ひしきぐさ。一、ゐごな。一、すぎな。(かさはあふ みゝはあし) 右はさ水にてよくゆでて食ふべし。又ほしてかてものとす。一、どろのわかば。一、よもぎのは。一、こくさきのは。一、韮のわかば。(きくは にいむ)

右は灰水にて能くゆで、水にさはし喰ふ、又ほしてかてものとす。

一、いちび。實をとり生にて喰ふ。ほしてひき粉にし、だんごにして食す。一、はたけしちこ。一、かはらしちこ。莖も葉も灰水にてゆで、麥か米の粉にまぜ餅とす。一、ところ。横にきりて能くゆで、流れに一夜ひたせば苦味なし。又灰水にてゆで、二夜鹽水にさはし、かてものとす。但し老人病人病後などのもの宜しからず。また大便つ

まらば、おもゆ度々呑べし。

一、とちのみ。皮を去り能く煮て、一夜流にひたし、むして食、又皮のまゝ日にほし皮をわりて流に二三日ひたしあげ、灰をまぶり、又二三日して實をわり、黄色になりたる時、灰をあらひもち米にまぜ餅とす。

一、どんぐり。製法とちのみと同じ。又皮を去り十日ばかり流につけほして、たくはふべし。

一、おけらの根。黒皮を去り、うすく切、二夜水にさはし、苦みを去り、よく煮て食し

一、わらび。一、ぜんまい。こまかにきざみ、灰水にてよく煮て、水をかへ、二夜ほどさはし、かてとす。流にひたせば食ひやすし。又ほして貯ふべし。

一、くわんざうの根。ゆでて日にほし、粉にして麦米のこぬかなどに交て餅とす。一、ぶなの木のみ。いりてきなこにしてくふべし。一、まめの葉。あづきの葉。さゝげの葉。何れも能くほし、手にてもみ、粉にしゆでてかてとす。

右かてものこしらへ方は、随分念をいれ、味噌塩を交て喰ふべし。わらびの粉、ぜ

んまいの粉、其外常に用ゆる草木のかてものは、しる處なればしるさず。

一、こぬかみその法。こぬか壹石、豆貳斗、又は壹斗にても、鹽貳斗、豆を釜にて能く煮、その釜へこぬかを水にてしめり合ふほどにねりて入、まめの汁にてむし、よくむせたる時、火をやめつきあはせ桶に入置、三十日程過て用ゆ。

一、とち味噌の法。とちの實(み)を臼(うす)にてつきくだき、からを去り、むしたるを壹斗、豆壹斗、能く煮て鹽五升を合せ、臼にてつき、風の入(いら)ぬやうにして置べし。

右かてものは、村々爲ニ御救一被レ下間、小前々々不洩樣相渡し、村役人無ニ油斷一致ニ世話一可ニ相貯一者也。

天保五、甲午、正月　　上山役所

右の上山藩の『かてもの』の記載を見ると、米澤藩のものより餘程簡單で、米澤藩のものを全部模倣をして居るかといふにさうではなく、やはり上山藩(かみのやまはん)特有のものもある。また、車前草(おほばこ)を『びつきぐさ』と方言(はうげん)を使つてゐるあたりもおもしろい。

米澤藩の配布本『かて物』に類したものに、『救荒食物便覧』があり、『救荒植物集説』がある。私は、これを通讀して興味を覺えたのは、學問を實用向にし爲政の一端ともしようとした點にある。

この救荒植物を記載した著述の數はなかなか多いが、伊藤圭介先生のが一番精細であり、明治十七年の官報に載り、後、博文館の『明治名著集』（明治四十年）の中に收められた。それより先き福島縣編輯の『救荒誌』（明治三十六年）の中にその大部分が轉載された。

いま、米澤藩の『かてもの』と『救荒植物集説』との比較を一つ二つ書記して見よう。

からすうり。　莖も葉も柔かなるとき、ゆびき食ふ。又かて物とす。からすうりの根。皮を去り、白き所を寸々に切り、一日に一度づつ水をかへて浸す事四五度にして、搗ただらし汁を取り水飛すること十篇あまりし、餅だんごにして食ふ。（かて物）

きがらすうり。葫蘆科。かうり。やまうりかづら(泉州)。ぬめうり(用藥須知)。漢名 瓜洋名 トライコサンセス、ビアボニカ。野生亦諸國に多し。春宿根より蔓を生ず。其の葉五七尖をなし王瓜(からすうり)に似たり。夏月其の花亦王瓜(からすうり)の如く瓣頂細裂し亂絲の如し。後ち結びたる瓜は圓くして頂尖れり。冬に至りて黄熟す。故にキガラスウリの稱あり。此根の澱粉は即ち漢藥の天花粉なり。其仁は亦藥品とす。漢土にも此の根を研り粉となし餅を製し此の瓜の瓤を粥となし、又仁を以て油を製するの說あり。本邦にても荒年には山人根を堀り、ウリネ(和州)と稱し、搗碎き水飛し米麥等の粉に和し餅とし食ふ。此の瓜嫩なるものは糖漬又鹽藏とし食ふべし。(救荒植物集說)

うるゐ。ゆびき食ふ。又かて物とす。(かて物)

ぎばうし。百合科。いはな(勢州)。あまな(越後)。うるいば(木曾)。うるみな(濃州)。なもう(羽州)。うくるきな(北海道)。漢名 紫蕚。洋名 フンキア、オバータ。諸國山中に多く生ず。又人家園庭に栽うるもの、タウギバウシ、タマノカンザシ其の他數品あれども山民の食用となすものは尋常の品にして、葉形尖頭卵圓其色淺綠其の柄長く葉間より梗

を抽き數花を綴る。形鐘狀花冠六裂各々披針樣をなし反張す。紫花白花あり。山民此の嫩葉を摘み食用となす。陸中にては六月此の葉を採りて熱湯に灌ぎ日に乾し貯へ食用に供す。日光又甲州にては此の葉柄を煠き擘き日に乾し山乾瓢（やまかんぺう）と呼び、再び煮て之を食ふ。（救荒植物集說）

なほ、『救荒誌』には、以上の集說を參考して救荒植物を記述したほかに、有毒植物、例へば、せんにんさう。きんぽうげ、たがらし。きつねのぼたん等五十種あまりと、有毒の菌蕈（きのこ）類、十七種を分けて記述してゐる。なほ、『補食調理法』として、精細に記述した中には、『かてもの』中に既に記したものもあるが、記述が精しくてなかなか有益である。種々の餅の製法、種々の團子の製造等、種々の粥、雜炊の製法等である。

飢饉に際しては、右の如く救荒植物の知識を普及せしめ、食物の貯藏を奬勵したのであつて、『饑年要錄（きねんえうろく）』といふ書に、『飢饉は時有て來る故に、免（まぬが）るべきに

あらねば、常に其備なくては叶はぬことなり。古へ聖人の教へに三年耕必有二一年食一。九年耕必有二三年食一。以二三十年通一。雖レ有二凶旱水溢一。民無二菜色一となり。三年耕して一年の食ありとは其人々の年中に取入るゝ所の物成を四つに割り、其三つにて其年を賄ひ、一つを殘すなり。」云々といふ文章を見てもその趣が分かる。

なほさういふ、食物の應急手當のほかに、いはゆる「救荒政務」が行はれた。根本の趣旨は節倹であるが、差當つては役に立たぬから、穀物の支給のほかに、穀類の買占を禁じ、或は米穀隱を禁じ、他領へ穀類の賣渡を禁じ、いろいろの手段を講じて居る。いま、極く小規模の「御觸」の一つを次に錄して參考となす。（救荒誌に據る）

御觸之覺

一、當年凶作に付、祝儀不祝儀、さる巳年相觸之通、急度相守可申事。

一、穀物之儀、村々相互に賣買の儀は勝手次第に融通可致候。他村へ賣渡の儀は、相伺

之上、差圖を請可申事。

一、於百姓家、濁酒造り候者も有之哉に相聞、當年柄不埒の事に候。假令一升作りの小樽たり共、造込不相成候間、其旨相心得小前へ不洩樣可申付候。無據筋有之候はゞ、其段相伺差圖を請可申候。若し疑はしき義有之候はゞ、其家日へ踏込相改、濁酒造り相違無之候はゞ、其品取あげ縄手の上、急度申付方有之候。

一、濁酒請賣の義は、當年柄難儀致候事故、少分の義は兎も角も、一升賣の義は不相成、五合迄賣り可申候。夫れ迚も樽に入れ所持步行候し者有之候はゞ、差押相改め、五合餘有之候節は、賣主共嚴重申付方有之候。

但村内酒樽決而不相成事、且清酒請賣不相成候。

一、酒造人共濁酒賣方右に准じ候事。

一、村々山糧相貯の義、兼而申付候通り精々心掛可申候。所により候ては、右等の義不精の者も有之哉に相聞、不埒の事に候。第一葛、蕨等澤山に製作致し、取高小前に相改、書上可申候。稻刈〆之儀は、少々相後れ候共、右の處無油斷可申付候。不相用候

者有之候はゞ、嚴重に申付方有之候。

第一商人別により、正實、得と穿鑿之上、些〔此々?〕の村方は急度糺方有之候間、

心得違無之樣可致候。

一、兼而申付置候通り、無人別之者一夜たりとも差置申間敷候。

右之通り申達候間、小前末々迄も克く克く申聞かせ不洩樣可申付候、此段申達候以上

九月晦日(天保七申年)　　衛門七

石川郡村々名主中

饑饉小記

饑饉のことを訛つて『ガス』といふことは郷里の古老からよく聞いたことであるが、この訛は、『餓死』から來てゐる。天文とか、天明とかの饑饉以來、いつのまにか餓死といふことが饑饉の同じ意味の語として東北の山村にまで傳はつてゐたのである。そこで僕の母などは、『ガス』といふ語以外の同じ意味の語は知らなかつた。

「饑年要錄」に、『饑饉は異國の說に五穀不ㇾ登を饑と謂ひ、十穀不ㇾ登を饉と謂ふ。日本にても此說に本づく成べし。今の世に唱ふる處は、米穀不熟して萬民飢渴に及ぶことを總て飢饉といふ。是人生第一の患にして、窮民是に遇ふて命を失

ふ者少からず。幾年も續く時は國の亂とも成程の事にて、此上の災ひあるべからず。是天より人の怠を罰し給ふなり。然るに此患へ數年遠ざかれば、人怠り奢に長じ、己がさまざま縱に日を送り年を重ね、財ある者も施すことを思はず、匱しき者も業を怠り、飢饉は昔の噂のみに聞て、其時に遇はば嘸かし憂き事ならむとは思へども、其患へに遇はざれば、朝にきゝ夕に忘れて昔はありて今はなき事のやうに思ひ、今にも我身の患へと成べきことは更々思はず、徒に年を經何の覺悟もなき折に、天災來り五穀實らず、食乏しきに至り、周章驚き身の怠りは顧ず天を恨み時を呵し、昔よりなき事の俄に來りしやうに思ふは淺ましき次第なり』云々と書いてある。

いま次に、「救荒植物集說」の中の、饑饉時悲慘のありさまを記述した部分を手抄して參考にしようとおもふ。

『凡救荒の策たるや、其書古來夥多にして、漢籍は姑く置き、我が邦先輩の著

書亦尠からずと雖、專漢籍に拱由して、親試實驗に出でたるもの鮮きを以て、其の說果して錯誤なしとせず。故に凶歳に臨み饑民之を信じ往々其の弊害を被るものあり。豈慨歎すべきにあらずや。茲に登載する所の植物品種は、我が徒多年自ら摘み親ら食ひ以て實驗せる所のものを主とし、且去る天保七年の凶歳に於て伊藤圭介の編輯上梓せし救荒食物便覽亦實驗の品なるを以て之に依り、其の他諸書に參考し、更に賀來飛霞の增補をも加へて此の說を編輯せり。就中近年小石川植物園に栽培する和漢洋の品種中救荒の裨益とすべきものは一々之を實驗し、尙稿を繼ぎて陸續記載せんとす。

古來の凶荒は姑く擱き、寬永十九年壬午の饑饉を首とし、後三十三年にして延寶三年乙卯の歉あり、後五十七年にして、享保十七年壬子の歉あり、其の後五十一年にして天明三年癸卯の歉あり、後五十三年にして天保七年丙申の歉あり、（今明治十七年は天保七年を距る四十八年に及べり）凶歉の至る年數凡四五十年の前後にあること右の如

し。就中天明の如きは其の慘狀最甚しく、奥州等は到る處餓死を見ざるものなく、或は村を擧げて僵屍狼藉たるものあり。强壯の徒は黨を結び僅少の食物ある家に亂入し暴行をなすに至れり。

今の世に於て災荒の狀を目撃せざる徒の想像にては必謂はん。未開の世人智猶啓發せず、各地相鎖し五穀互に融通せざりしを以て、固より此の憂を免るゝこと能はざるべし。然れども今日に至りては汽車汽船其の他運輸の便昔日の比にあらず、加之、外國と交通自由にして相輸し相扶くるを以て、決して此の慘狀あること無しと。故に今日に於て尙斯の救荒の舊談古說を講ずるは、無益の贅言として一笑に附するもの亦無きにしもあらざるべし。然れども、深く慮れば決して之を度外に置き此の策を等閑に付するを得ず。故に歲豐饒に遇ふの時に於て豫講し以て之に備ふるは固より當然の策なれば、渴して井を鑿り、鬪ひて兵を求むるの狼狽無からんことを希望するなり。』云々。

かくの如くに記してある。これは、救荒植物集說の序文であるが、なかなか注目に値する言葉に充ちてゐるとおもふ。なほ、伊藤先生は、集說の跋文として次の如くに記してあるから、僕自身のために次に之を手抄する。

『凡救荒植物は、以上編を累ねて集說せるものの外尙ほ遺漏寡からざるべしと雖も、姑く之を以て其大要を盡せるものとし、是より以下和漢の書籍を參閱し若くは曾て古老より傳聞し、若くは我が徒の親しく目擊したる古今荒凶の慘狀を略說し、以て爰に本說の局を結ばんとす。

天保十五年甲辰新秋、賀來飛霞奧州松島に遊びし時、路傍に建つる所の卒塔婆を見るに、天保七年丙申饑饉餓死人供養の爲と題せり。又松島瑞巖寺にも餓死人施餓鬼の塔婆あり。又仙臺より出羽の山形に至るの途、偶々山中の孤驛に投宿せしに、此驛たる人家寥々として其中間々廢屋のあるありて、屋內佛壇傾き位牌轉倒し竹木床を串きて叢生するを見、爲に愴然たり。是れ餓死者の遺蹤

なりと云ふ。又古老の話を聞くに、古來奥羽の飢民殊に悲歎を極めたり。凶歳の後曾て該地を經過せし旅客あり、山路に迷ひ高嶺の頂に攀登り四望するに、山間に若干の茅屋あるを見出し、辛くして谷を下り其の里に至るに一の人影を見ず、唯頽屋竹を穿ち破窻葎を絡ひ白骨狼藉たり。客之を見て悚然たりしと云ふ。

夫食物盡くれば金銀亦瓦礫に齊し。享保十七年西國大に饑ゆ。當時途中にて饑死したる者を見るに、其の頸に金百兩を懸居たりと云ふ。又天保の凶歳に、濃州に於て小判を以て團飯三個と交換したるものありしが、其の金を得たるものは饑死し、團飯を得たるものは之を食ひて幸ひに其の生命を全ふせしと。顧ふに此の如き悲慘の例は、亦甚多かりしならん。天明の饑饉に一旅客あり、九州の山中に行き、日暮れ其の近傍の民家に就きて投宿を乞ひしに、中に一老人一少女あり、食物なきの故を以て之を謝絶す。旅客其の携帯する所の貯米あ

るを告ぐ。二人共に落涙して曰く、妻と男とは既に餓死し、我等二人も亦食せざること既に數日なりと。旅客之を聞き、直に携ふる所の燒飯を與へしに、彼等互に相讓りて食せず。旅客諭して曰く、余尚ほ一升の貯米あり、汝等心を勞する勿れと。老人之を聞き涙を拭ひて曰く。厚志實に謝する所を知らず。然れども、假令今宵此の飯を喫して僅に今宵の命を全ふするも明日を奈何せん。食ひて苦を長くせんは、寧ろ片時も早く死するの優れるに如かず。少女は年尚幼なり、宜しく一日も永く生存すべしと。亦自ら食ふ氣色なし。旅客爲に袂を絞りたりと云ふ。又南部仙臺津輕等に於ても、餓死せしもの甚多く、數條の白骨路傍に纍々とし、又身を井に投ぜしもの夥多ありて、井水爲めに用ふ可らざるに至れりと云ふ。

漢土にても凶荒の慘狀亦想像するに堪へたり。鄭板橋の逃荒行の句に、十日賣二一兒一。五日賣二一婦一。と。又、山東遇二荒歲一。牛馬先受レ殃。殺レ畜食二其肉一。畜盡人

亦亡。の句あり。又、水曹清暇錄に馬柳泉賣子嘆云。貧家有兒貧亦嬌。骨肉恩重那可拋。饑寒生死不相保。割腸賣兒爲兒曹。臨門一別何時見。徧撫兒身舐兒面。有命豐年來贖兒。無命九泉永抱戀。卽木石腸與兒讀之應亦憮然。卜陶柴桑之此亦人子也。願役人者時留意焉。とあり。

清國光緒十二年（我が明治十年）山左青菜の旱損に、飢民楡皮を剝ぎ石粉を煮て以て其の糧となししが、猶其の飢腸を充すに足らず。遂に人々相食むに至り、白骨路傍に堆積し、飢民溝壑に轉じ、或は散じて四方に之く等、其の慘狀實に名狀すべからず。而して其飢餓甚しくして起つ能はざるものは、唯口を哆て天に呼ぶのみなりしと云ふ。同年、山左邊の飢民は隊を成し軍器を携へ、多く民家に闖入して其貨財を奪ひ、或は又索借を名として肆に掠奪し、而して慘酷の最甚しきは、小孩を大道の傍に置きて、每斤七文と大書し秤に照し其の肉を賣りしことあり。又老人の飢餓して起つこと能はざるものあれば、其の死せざるに先ち其の

子姪等相集りて其肉を分け食へり。而して其の言ふ所を聞くに、抑々尊屬の肉を喰ふが如きは素より人情忍ぶべからざる事なれども、之を喰はざるときは、亦他人の餌となるを免れざるに因ると。但し此等の事實は親しく之を目撃せし人の說話に係る。嗚呼慘酷も亦甚しと云ふべし。光緒戊寅（我が明治十一年）河南の災慘は近世聞かざる所にして、死人の肉を喰ふは勿論、竟に生人の肉を取りて烹食ふに至れり。而して今日他人の肉を喰へば、明日は又他人のために我が肉を食はる。輾顚共に食ひ、一日中に死するもの其の數を知らず。

又近歳南亞米利加ブラジルの飢饉の景況を聞くに、毎日餓死せしもの數千人甚しきは我が子を殺して其の肉を喰ひ、漸く我が枵腹を凌ぐものあるに至れりと云ふ。』云々。

『抑も近年の如く豐熟擊壤の時に當りて、斯の如き凶年の事を談ずるは、無用の贅言に似たりと雖、其一旦凶荒の變に遭ひ飢民枵腹の堪難きに於ては、草根

木皮犬猫諸獸は早く已に食竭して土石を嚙んとし、殆ど狂する者と擇ばざるに至る。此の時に當りて其の甚しきや、或は父母の屍肉を喫ひ、或は子を殺して僅かに吾が一日の命を保たんとするの殘忍を見るに及ぶこと、亦右に記するが如し。其の事たる實に言ふに忍びざるのみならず、正に殆ど吾人平生の情理を以て能く想像し得べきに非ず。是に由りて之を觀れば、此の如き慘狀を平年に記して當時を追想せしめ、以て救荒の道の決して忽にすべからざる所以を感心せしむるは、蓋し其の要なしとせざるなり。』

この救荒植物集說は、明治十七年二月十八日から十一月二十六日に至るまで十五回にわたり官報「學事」欄に載つたものであり、東京大學教授伊藤圭介述同御用掛賀來飛霞記と署してある。この救荒植物集說は、明治四十年六月に雜誌太陽臨時增刊『明治名著集』の中に收められた。なほ、救荒誌に『明治十八年京都府勸業課報告』云々と記してあるのは、右官報からの轉載をいふのであ

らう。

なほ、明治十八年の官報に、有毒植物集說が載り、東京大學教授伊藤圭介述同御用掛賀來飛霞筆記と署してゐる。序にいふ。賀來飛霞（加來睦之）は明治二十七年三月に歿した。著書に、日州採藥記、油布嶽採藥記、島原採藥記、救荒本草略說、小石川植物園草木圖說等がある。

ここに抄したごとく、饑饉の際の、人間畜類のありさまは實にこの悲慘である。併し、この實際は饑饉に遭遇して見なければ全く想像し難く、今時の如き世界文明の發達した時に當つて、かかる悲慘事を目睹することは不可能だとさへ思はれたのであつた。

然るに私は、ミュンヘン留學中、西暦一九二一年から一九二二年にわたる、

露西亞の饑饉の有様を報告した、ミュレンス教授の論文を一讀して、身戰慄を
おぼえたのであつた。

教授は、獨逸ハムブルク市の熱帶病研究所にゐる學者であり、當時露國饑饉救濟の目的で獨逸十字社から派遣せられた救護班長である。

饑饉と饑饉の隨伴現象である疫病の流行のことを獨逸語では,,Hunger- und Seuchenkatastrophe"とやうに言ひあらはしてゐる。,,Hungerseuchen"の語は昔から出來てゐた語である。

饑饉の本は、西暦一九二一年から續いた凶作が始で、それに對外戰爭と、革命動亂とが近因をなして居る。試みに農作物の收穫を年別によつて比較すると次のやうになる。地方、ウォルガ地方。單位プウド(Pud)。

西暦一九一四年　　一千八百萬
西暦一九二一年　　三百五十萬

西暦一九二二年　　　　八十萬

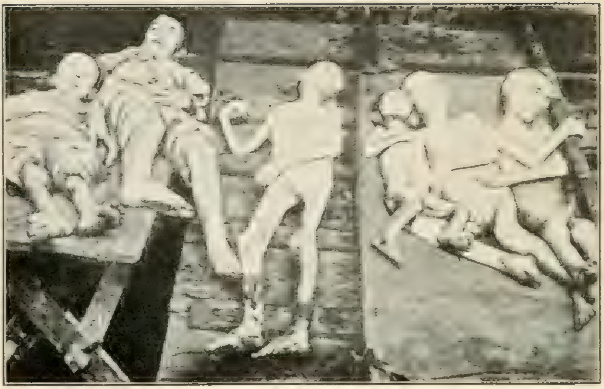
これは主に穀類の收穫高の割合であり、露國の重量一プウドは一六・三六基瓦に相當して居る。右は一つの例であるが、凶作の有様を大體想像することが出來る。

饑饉は西暦一九二一年の秋から冬にかけてであり、東部露西亞から北部露西亞に及び、次いでウヤッカ、ペルム、カザン、ウファ、サマラ、サラトフ、オレンブルグ、アストラハンから、ウクライネ地方に及んだ。今十五地方の人口と饑餓に陷つた人數との表も大體明かになつてゐるが、それを約めれば次のごとくになる。（西暦一九二二年三月調査）

大人全數	11357700	饑餓大人	8827310	百分率	77.7%
兒童全數	8855800	饑餓兒童	6951140	百分率	78.7%
合計全住民	20213500	饑餓全數	15778450	百分率	78.05%

かくの如くである。それであるから饑餓に陷つた人民は五〇―九〇％と看做すべく、その大部分は生命救濟の困難なもので、數千萬人が餓死して居る。ウーファの救護所收容の兒童も七〇―九〇％は餓死し、時には一〇〇％の餓死者を見てゐる。

饑餓のはじめは、畜類が餌の無いために斃れる。それを人間が食ふけれども食ふ畜類に限があるから、終に犬・猫・鼠・野鼠・田鼠等あらゆるものを食ふに至ることは、東洋國の記載と全くその趣を等しうしてゐる。また、屍を食ふこと人間を食ふこと、即ち、Nekrophagie 又は、Anthropophagie が明かに記載されて居る。生兒を殺して食ひ、墓地の屍を發掘して食ひ、その骨をも粉碎して食ひまた東洋國で謂へば、救荒植物の凡てを食ひ、馬糞牛糞を食ひ、遂に粘土をも食つてゐる。これを支那河南地方の記載と比較するに毫も異なるところなく、『今日他人の肉を喰へば、明日は又他人のために我が肉を食はる』である。ま





た、『草根木皮犬猫諸獸は早く已に食竭して、土石を嚙んとす』であり、『父母の屍肉を喫ひ或は子を殺して僅かに若が一日の命を保たんとす』である。

自分の土地を捨てて避難しようとして、途中で斃死する者も極めて多く、路傍に纍々たる屍を見る狀を報じてゐる。本書の挿圖にした墓地の屍の狀はナンセン(Nansen)の實寫に本づくものであつて、ナンセンは、『八十の屍がただ墓場に捨てられ、なかには裸裎のものが多い。また、路傍の屍は野犬から喰はれてゐるのを目擊した』と記載して居る。

その他、精神異狀、自殺、他殺、流行病の精細な記載があるが、差當り茲に手抄する必要を見ない。ただ、現代のごとく、文明の發達した時に當つてなほ一たび饑饉時に遭遇すれば、この慘狀を實現し得ることの實證を得たのである。

また、ミユレンス博士はかうも云つてゐる。饑饉に會ふ國は、すでに民に生

氣なく、興發力なく、怠惰だといふことを云つてゐる。さういふ狀態であるから、『慢性の饑饉』といふ語を以て言ひあらはすことが出來るとも云つて居る。これを救ふ道は、一時の救拔では能はない。精勵で自覺があり、克己潑剌たる農民として蘇生せしめねば、救拔の見込がないとさへ極言してゐる。

饑饉とそれに關した、本邦の文獻について少しく集めようと志したのであつたが、幸に救荒誌はその中に饑饉に關する文獻書目を掲げてゐるから、それを次に抄記する。

救荒書目　版本之部

農業全書	貝原樂軒	元祿十年
卷懷食鏡	香月牛山	正德年間
救荒本草	明周定王	享保元年

天平泰平豐年記	西宗庵一翁	元文元年
民間備荒錄	建部清庵	寳暦五年
備荒草木圖	建部清庵	明和八年
五穀無盡藏	上原無休	天明七年十一月
欽定康濟錄	清、陸曾禹	寛政年間
成形圖說	曾槃白尾國柱等	文化年中
農民懲戒篇	鈴木武助	文化五年
農諭	鈴木武助	文化八年
荒政輯要	汪志伊	清、嘉慶年中
製葛錄	大藏永常	文政七年
救荒便覽	遠藤義齊	天保年間
廣惠編像解	遠藤義齊	天保年間
みかけあふき	德川齊昭	天保年間

救荒餘錄	徳川齊昭	天保年間
三物考	高野長英 尼子佐々木	天保年間
經濟敎草	不詳	天保年間
徳川食鏡	大藏永常	天保年間
御世のめぐみ	和泉利愛	天保二年
開廠賑粥法	鎌原石見	天保三年
荒年充糧志	館柳灣	天保三年
救荒一助	礫川老人	天保三年
救荒野譜	明玉西樓	天保四年
御代の寶	畑銀雞	天保四年
救歉舉要	阿部櫟齋	天保四年
おろかおひ	足代弘訓	天保四年十月
忘飢草	半井宗玄	天保四年

農家心得草	大藏永常	天保五年
饑年要錄	福澤憲治	天保五年
濟急記聞	太田旦暮庵	天保七年
救荒活民補遺書	宋、董骨 明、朱熊	天保七年
ききんのこころえ	中山爾助 羽田野敬雄	天保八年
飢饉食物製法	鳩居堂	天保八年
救荒孫之杖	枕雲洞主人	天保八年
救荒新策	長谷川猷	天保十年
救荒野譜啓蒙	小野職孝	天保十三年
救荒本草啓蒙	小野職孝	天保十三年
救饑提要	博古堂梓	嘉永三年八月
備荒類說	吉田寅次郎	安政二年
農家必讀	山崎美成	安政年間

增補救荒事宜	齋藤拙堂	文久元年
仁風集覽	平塚清影	慶應三年
洪水圖說	南坡草人	慶應四年五月
鄭繪餘意	小野長愿	明治二年
農家永續救助講法	織田完之	明治八年
凶荒曆	不詳	明治十三年
備荒餘錄	赤城廣敬	明治十三年九月
二物考	高野長英	明治十三年九月
山口縣備考論達	山口縣廳	明治十四年
救荒植物集說	文部省原著 日本農會抄錄	明治十八年六月
備荒貯穀考	愛知縣農商課	明治十八年十二月
救荒要錄	江本清彌	明治十八年
凶荒圖錄	小田切春江	明治十八年

登済備考	織田完之	明治十八年
勧農殖産法	平山省斎	明治十八年
凶歳必携	竹内拙蔵	明治十九年六月
家々要用凶歳必携	竹内拙蔵	明治十九年六月
成田饑饉誌	服部秀毅	明治二十年六月
凶荒誌	梅森三郎	明治二十六年
救荒児孫訓	太田百世	明治二十六年
日本災異誌	小鹿島果	明治二十七年
奢是我敵論	農商務省	明治二十八年
農家凶防策	阿部泰次	明治二十九年十一月
貧民救治論	大野直輔譯	明治二十九年
經濟會成蹟	石川理紀之助	明治三十一年
山居成蹟	石川理紀之助	明治三十一年

庵の手鍋	石川理紀之助	明治三十一年
社倉私議	中井竹山	年代不明
社倉勸諭		年代不明
救餓録	健齋	年代不明
荒政要覽	愈汝爲	年代不明
社倉附考		年代不明
萬代不朽救世粮飯傳	小林其樂	年代不明
豐饒策	本多利明	年代不明
社倉解話	酒彥	年代不明
飢饉憂書誌	判養孟希	年代不明
農暇必讀	山崎美成	年代不明
濟急記聞	磐城田子吉所有	年代不明

救荒書目　寫本之部

社倉由來之事 附御條目	佐藤友信	寛永元年
寛永飢民錄		寛永十三年
牧民後判國字解ノ内	松平越中定綱原著 關戸呂雄註解	慶安二年 天明三年
盍徹問答	山崎闇齋	元祿年間
農事大全ノ全	寛然居士	延享三年
凶年藏土穗	村上某	寶暦六年
奧州津輕洪水記	武夷山人原著 櫻井淸秀諺解	明和四年
天明凶作記	岩代相馬素哉所有	天明年間
凶年藏土穗後編	忌部正興	天明四年
砂降以來三年記		天明年中
天明三癸卯年凶作飢饉 翌甲辰年豐作記	常松次郎右衛門	天明四年八月
天明年度凶歲日記		

天明淺間山砂降記	常見一之	寛政三年四月
救荒本草便覽 附救荒野譜便覽	坂元愼	享和元年
かて物書（刊本あり）	上杉治憲	享和二年三月
會津外史	岩代初瀨川建增所有	文化六年
社倉法割合	雨森正煥	文化十四年九月
天保饑饉奥羽武藏聞書		天保四年
忘飢草	半井宗玄	天保四年
補饑新書	東條耕	天保四年
耕作豐凶試抜書	林大助	天保四年二月
氣候考 洪水考	曾根仙右衛門	天保四年十月
救荒瑣論	奥山操	天保八年四月
三倉私議 附社會勸喩	齋藤拙堂	天保八年四月
天保年中已荒子孫傳	柿崎彌左衛門	天保九年十二月

救荒諸食製法 附高田闕左衛門傳農家心得		天保年間
保四羅談		天保年間
自享保七年至天保七年見聞錄	岩代相馬素哉所有	天保年間
天保年中絶作飢饉留		天保年間
弘化二年備荒御觸書		弘化二年二月
紀州北浦つなみ記	若林多仲	嘉永七年十二月
舊和歌山藩社倉趣意並ニ法則等		明治二年
農家心得訓	田村吉茂 武井彌三郎	明治九年 明治十三年
陝川饑荒一班	衣笠豪谷	明治十二年
農家報國法基立順序	古橋義周	明治十二年四月
飢饉豫備慧茨仁圖解	池田輝秀	明治十七年
舊水戸藩民事要法	笠沼榮藏	明治十七年
社倉麥由來書	代官某	年代不明

地方御取扱演說書		年代不明
飢饉之節困窮人手當米仕法帳		年代不明
社倉議草		年代不明
救飢食品考	蕈溪主人	年代不明
鄉村手引ノ內	舊米澤藩	年代不明
四季旱降		年代不明
飢歲覺錄（附ケ作年毛 ラ商古書付）		年代不明

癡人の癡語

或日私は燒殘りの家の中に茫然として立つてゐると、窓の外にどやどやと人ごゑがする。その中の一人が何か芝居の臺詞のやうな口調で『眞人間で居てえや』などと言ふのが聞こえる　どやどやと人ごゑのしたのは私の家に瓦斯管を引くために働いてくれてゐる四五人のひとりが、『眞人間で居てえや』と云つたのであつた。炭でばかり飯を炊いだり汁を煮たりするのは不便だといふのでやうやく瓦斯管一本だけ引いて貰つたところである。職人は、燒けた私の家が精神病院であることを好く知つてゐた。そこで突如としてこの警句を吐いたのであつた。そして、單にこの警句を吐いたばかりではない。この警句につづい

て『氣違にあ』何とかだと言つた。そして『これ人情の然らしめるところかね。これ人情の然らしめるところでござんす』などとまた臺詞調で云つて、車の音をがらがらさせて歸つて行つた。

或る日、私は電車に乘つて足かけ五年ぶりで、神田の小川町のあたりを通つた。あの大地震で實際東京はひどいめに逢つて、町の家々は小さくなつて建つてゐた。電車には私の前に小娘が二人乘つてゐる。ある所に電車が來ると、小娘のひとりが斯う云つた。『ちよいと。この家だわ。まるで牢屋みたいでしよ。氣違でも居さうだわね』と、かう云つて除けた。

或る日、私は新聞を見てゐると、これは寫眞入で現世の種々相を傳へてゐるので、私は久しぶりにかういふ日本の新聞に親しめるのであつたが、そのなかに、『生ける屍として牢獄に等しい狂人病院の一室』といふ句があつた。

墺太利の首都、維也納の郊外に、Steinhof の大精神病院がある。これは歐羅

巴を通じての第一流の精神病院の一つである。私が未だ若くて東京巣鴨の病院に勤めてゐるころまでは、東京の人々は、巣鴨！　巣鴨！　と云つて、狂人、狂者、瘋癲、ものぐるひ、くなたぶれの象徴たらしめた。維也納の者どもは、矢張り Steinhof! Steinhof! といつて其等のものの象徴たらしめてゐる。私は維也納にゐたとき、或る日中央墓地を逍遙したことがあつた。もううすら寒い日で午後になつて時雨になつた。私は外套の襟を立ててあの廣大な墓地をいそぎ足に歩き、猶太人の墓地の一廓にさしかかつた。其處で私は、建つてからまだ間もないらしい、極く見すぼらしい、Steinhof といふ人の墓を見つけ、暫くその墓の前に佇んでゐたのであつた。東方の國から來たこの猶太人は、此の地に落付き、先祖から傳へた苗字を棄てて獨逸語の苗字を新たに作つた。維也納の郊外の其頃は未だ林か畠であつた土地の名を恐る恐る採つて自分の苗字にしたのであらう。それが今は『ものぐるひ』の象徴になつて、寂しくそして人々

から一種嘲笑の氣持を投げかけられるやうな墓石の主人公として此處に眠つてゐる。猶太人は財界の主な位置を占めるやうになり歐羅巴の漫畫家グロッスあたりからは、三世相の『富豪の相』のやうに、猪首肥太の暴富漢に畫かれ勝であるが、私は偶々この猶太人 Steinhof の墓石の如きに寂しい親しさを感ずるのであつた。

世間の人々よ。『眞人間で居てえや』などと云つたつて駄目だ。今に見ろよ。じたばたしても駄目だぞよ。

北白川宮殿下が、佛蘭西でおかくれになつた時、私はまだ維也納にゐてそのことを新聞で讀み非常に驚愕したのであつた。それから間もなく維也納のある新聞は、『ハラキリは非近代的だ』といふ見出で書いてゐた。 „Harakiri ist un-

modern“ としてあつた。その中味はかうである。何か事が起ればいいと狙つてゐる亜米利加人が、殿下がおかくれになつたとき、巴里でいろいろと探索してこの際御附の武官が切腹をするであらうと思つた。若し切腹をするならば興味あることだと思つたのであつた。

ところが一人も切腹はしなかつた。そこで亜米利加人は考察をして一つの結論を得た。このたびのは、将軍乃木の場合とはちがふ。将軍乃木は生涯、天皇睦仁陛下に仕へて、恩寵の重きをかうむつた。陛下の崩御し玉うた後にはもはや将軍の意志も願望も満たされるやうなことは不可能である。そこで将軍は夫人と共に切腹をした。殿下の武官の場合とはすでに前提がちがふといふのであつた。維也納の新聞は、さういふ何にまれ興味を捜し興味に飢ゑて居る亜米利加人のことを „Der sensationshungrige Amerikaner“ と書いてあつたので私は今でも忘れずにゐる。それから乃木将軍の場合の結論も、亜米利加流儀に

何事も功利的に二二が四的に片附けてゐたところにも私は興味を持つた。しかしなほ興味あるのは、切腹があればいいと思つたところにあるだらう。一體利害關係が直接でないと、傍看の態度に出づることが出來る。物好で物を看ることが出來る。蒙塵した獨逸皇帝をいち早くも附狙つたのは、やはり物好の亞米利加人であつた。感情移入の說が亞米利加から出なかつたことの偶然でないのを、私はいつか寢られぬ夜半の床のなかで思つたりしたこともある。

大地震で日本がひどい目に會つて困りぬいてゐるとき、亞米利加はびしやんと移民問題を極めてしまつた、その時私はまだ獨逸のミュンヘンに居つたが、ミュンヘンの新聞は報じて、熱烈な憂國の日本人二三が亞米利加大使館の前で„Harakiri"をしたと書いてあつた。その時ミュンヘンに居た一人の同胞は目を瞠り扼腕して云つた。日本は神國である。それぢやによつて神明の加護がある。今に亞米利加に神罰が來るぞ。云々。 併しその頃獨逸の或るポンチの雜誌には

米國に於ける日本人移民問題を取扱ひ、日本人を『猿』に畫いてあつたので、私はひどく不快に思つたのであつた。

『かの岡に瘋癲院のたちたるは邪宗來より悲しかるらむ』といふ歌を作つたことがある。これはもう十二三年まへの作で、墓地から青山腦病院を見てそれを咏じたものである。しかし今おもふに、世の此の歌を讀んで吳れた方々は、どうこの歌を解して吳れたかとふと思つたことがあつた。それは、私が精神病醫になつてから、もう十五年も經つて、『狂人守』などとみづから稱してゐた、その氣持をどう解して吳れただらうかといふのと同じである。

"The happy valley" といふのを、新嘉坡では『歡樂園』と云つてゐる。香港では『愉園』と云つてゐる。『譯』は、やはりかうあるべきものと私はおもふ。

熱帶の土人は、あのやうに辛いものを食ふ　錫蘭流のカレー料理でも辛くて口腔が燒け爛れるやうである。それを邪氣のない童男童女が、やはり旨さうに食つてゐる。さういふことを船中のつれづれに語ると、南洋にながくゐた先輩が、『犬がやはり辛いものを食べますからね。何でもあゝいふものを食べんと胃腸がどうにかなるんぢやありませんか。』かういふ話もしてくれた。そして私はコロンボから乘つた印度人にカレー料理の按配のことなどを教はつたりし、

　汗にあえつつわれはおもへりいとけなき瞿曇も辛き飯くひにけむ

といふ一首をこしらへたのはその時分のことであるが、これだけの註があると

幾らか私の氣持も分かるであらうと思ふ。それだけ抒情詩の一體としての短歌は單純にせねばならぬのである。

青山腦病院は大正十三年十二月二十八日の夜半を過ぎて間もなく火事を出し一部を殘して燒けた。私はこの火事のとき世の厚き同情に對して感涙にむせんでゐる。此の病院も創立當時はあのあたり一面は原であつた。それから直ぐ隣は墓地でそれも墓石は極めて稀であつた。また續いて畑があつた。肥料の匂が風のまにまに漂つて來る。それから一段低い處は一面の稻田で目高が群れて泳いで居たり、水の溫むころは蛭が思出したやうに浮いて來たりするのであつた。ある時私は崖の土から冬眠してゐて未だ醒めない蛇を掘り出したことなどもある。さういふ處にぽつりと青山腦病院が建つたのであつた。日露戰爭がだんだ

ん劇しくなつたとき、私の長兄が秋田の第十七聯隊から出征して、途中新宿の停車場で一寸下車するといふことであつた。そこで私は新宿の停車場に出かけて夜半まで待つてゐても到頭汽車は著かなかつたので、その時私は間道を通つてやうやく建つたばかりの腦病院に歸らうとして、道に迷つて夜ぢゆうさまよつたことを今想起する。何でも月の明るい晩で、夜半を過ぎてもこの月明りで農夫が稻を刈つてゐるあたりを通つて道をたづねたことなどを今想起する。その稻田が埋立地になり、私も隨分ながく住んで、『童馬山房』などと名づけた家が、その埋立地に建つたのであつた。病院と相對する向うの丘は一部は森林で一部は墓地であつた。そこで歩兵が小さい演習をしたり、喇叭の譜の稽古したりするのが手にとるやうに見えたものである。滿洲に出征した長兄は黒溝臺と奉天で傷を負つたが、それでも生きながらへて歸つた。ところが長兄の屬した軍の司令官であつた立見將軍は戰爭後病で歿して青山腦病院の直ぐ隣の墓地に

葬られた。長兄が上京して來て將軍の墓前にぬかづいて誓く詞のなかつたことなどを今想起するのである。

僧良寛の歌に、『くさのうへにほたるとなりてちとせをもまたむ。いもが手ゆこがねのみづをたまふとならば』といふのがある。童謠から來た旋頭歌であるが、初句、第二句あたりの音のつづけざまは、實に手に入つたものである。ひとはこのごろ良寛を神のやうに禮拜して、良寛の歌の句々は、これ盡く良寛の人格のあらはれで、決して『手に入つたものである』などの末技ではないと、さういふ工合に論ずるのであるが、さういふ論は未だ中途の論だと私は思ふ。

何だか悲しく寂しく、その日その日が暮れてゐる私の一閑張(いつかんばり)のうへに、計らず秋草道人會田八一さんの「南京新唱」が屆いた。一讀して秀歌があるのに私は驚いてゐる。『たまたま今の世に巧なりと稱せらるる人の歌を見ることあるも、巧なるがために吾これを好まず。奇なるを以て稱せらるるものを見るも、奇なるがために吾これを好まず。新しといはるるもの、强しといはるるもの、吾またこれを好まず。吾が眞に好める歌とては、己(おの)が歌あるのみ』と、かう自序の一節に云つてをる。その抱負おもふべきである。

　はたなかに眞日てりたらすひとむらのかれたるくさにたちなげくかな

これは『大極芝』を咏じたものであるが、極めて自然に流露してゐて、しかも無量の哀韻をこもらせてゐるあたりは、詞をやるに達者でなければ能はぬわざである。ことばが順直に行つてゐるから、一見無雜作(むざうさ)のやうにおもふが、これまでの域に達するには、並大抵の習練では出來まい。

かすが野にふれるしらゆきあすのごとけぬべくわれはいにしへおもほゆ

まめがきをあまたもとめてひとつづつくひもてゆきしたきさかのみち

一寸かういふ作を拾つても、實に充足(みちた)らうてゐる。これは萬葉の道、良寛の道、そしてこの作者の道であつた。それゆゑ形骸のみに興味をもつた眞淵門下などとちがつて、血が通(かよ)つてゐる。新鮮なところがある。『まめがきをあまたもとめて』がつまりそれである。私はこれを『寫生』と云つてゐるが、私に從ふことを欲しないものは、別に『寫生』といはなくもいい。私は、『寫生』といふのである。

わがすてしバナナのかはをながしゆくしほのうねりをしばしながむる

しぐれふるやまくにかはのたにまよりゆふかたまけてひとりいでゆく

これが『寫生』なのである。良寛が、『山路(やまぢ)は栗のいがのおほきに』といつたのは、『寫生』で行つて、單に萬葉の語呂ばかりを眞似なかつたところに良寛の

新鮮な性命がある。「南京新唱」の著者の歌調は、萬葉調であるが、むしろ萬葉調の良寛調に近い。それゆゑ愚なるが如くであつて行渡つてゐる。この著者も山中高歌では『みすずかるしなののはてのむらやまのみねふきわたるみなつきのかぜ』などといふやうに、眞淵流の歌もある。これは恐らく幾らか前期に屬する歌であらうか。『毘樓博叉まゆねよせたるまなざしをまなこにみつつあきの野をゆく』に至ると、もはや眞淵らの未だ思ひ及ばなかつた境地である。この『まゆねよせたる』あたりは、正岡子規あたりから目ざめたと謂つてよからう。この『まゆねよせたる』の句はいかに一首にひびきわたつてゐるかを私は今感服してゐるのである。「南京新唱」の著者は、明治新俳句の先進者だといへば、恐らくその方面からの悟入もあるに相違ない。『わさだかるをとめがとものかかふりの白きをみつつみち奈良にいる』にそのおもかげが一寸出てゐる。

なほ私は、ことばがき、題を拔きにして、十首あまりを次に手抄しておかう

と思ふ。

（大正十四年二月）

かすが野に押してるつきのほがらかにあきのゆふべとなりにけるかも
かすがののみくさ折りしきふすしかのつのさへさやにてるつくよかも
うちふしてものもふ草のまくらべをあしたのしかのむれわたりつつ
たかむらにさしいるる日もうらさびしほとけいまさぬあきしぬのさと
まばらなる竹のかなたのしろかべにしだれてあかきかきの實のかず
からふろの湯げたちまよふゆかのうへにうみにあきたるあかきくちびる
やまとより吹きくるかぜをよもすがら山のこぬれにききあかしつつ
あしびきのやまくに川のかはぎりにしぬぬにぬれてわがひとりねし
かすみ立つをちかたのべのわかくさのしら根しぬぎてしみづわくらし
野のとりのにはのをささにかよひきてあさるあのとのかそけくもあるか

母

私の母は家附の娘で、父は入婿に來たのであつた。母系の祖父は酒客であつたので、母は比較的若くて中症になつた。

その中症になるまで、母は農婦として働き、農婦として私等同胞を育てあげたのであるから、つひに、仙臺も見ず、無論東京も見ずにしまつた。仙臺といへば東北での都會であるから、大概のものは東京までは來ずとも仙臺までは行く。併し、母は仙臺まで行く旅費に不自由はしてゐなかつた筈であるのに、仙臺にも行かずにしまつた。

（一）私が孩童であつた時分、ときどき流行性の結膜炎を病んだ。村では、それを

『やん目』と稱してゐた。

私が『やん目』に罹ると、母はいつも小一里もある村はづれの山麓に祠つてある不動尊に參詣に連れて行つた。その不動尊は巖上に祠つてあり、巖を傳つて清冽な水が瀧になつてながれ落ちてゐる。

母は私を連れてゆき、不動尊に目を直してもらふやうに祈願禮拜せしめ、それから、その瀧の水でながく目を洗ふので一度の參詣は半日がかりであつた。かへりには、村はづれの茶屋で、大福餅のやうなものを買つてくれるのを常とした。その餅のことを、綿入餅と云つてゐたが、その大きな餅一つはそのころ二厘した。私はそれを買つてもらふのを嬉しく、急性の眼病を患ひながらも母に手を引かれ、よろこび勇んで不動尊に參拜したものである。

巖流島

大正十年十月二十六日、私は熱田丸に便乘して横濱を出帆し、十一月一日に船が神戸を解纜しようとするとき、中村德吉君は「宮本武藏」といふ書物を餞別に呉れた。この書物は明治四十二年、宮本武藏遺蹟顯彰會から編纂になつたものである。船が神戸を出て瀬戸内海あたりを行くころ私は其の書物を少し拾ひ讀みした。

熱田丸は十一月二日午前八時に門司に著き、出帆まで一晝夜以上の餘裕があるので、船客の多くは外出した。下關、門司を見物するものもあり、遠く福岡耶馬溪・大分あたりまで行くものもゐた。私も人並に門司方面に上陸して見る

と、形式的であるが稅關で荷物の檢査があつたりして洋行の旅の第一歩といふ氣持がもう其處にあつた。それから砲兵の一隊が屯して居り、一人の士官が『馬と車輛の相互の檢査！』などと切口上にいふ命令をも、私は一人の旅人として其を受入れてゐた。其處に電車が引かれてゐて電車の案内繪圖を見るに巖流島といふところがある。私は突嗟の間にそこに行く氣になつた。

電車に乘つて延明寺で降りそこの遊園地を見た。長州騎兵隊戰死墓、慶應二年丙寅八月建立などといふ墓碑があり、梅津熊之進、征見與五郎、春日與七、山城半吉、橋式部、矢玉助太郎、藤野波太郎、山本宗之進、などの名が見えてゐる。また同じ長州人の、柏村棣之丞、徳田脊藏、柏村作右衞門、徳田德三郎西安太郎、池田造酒之進、山田辰雄などといふ名も見えてゐる。慌しい心で讀んだのだから讀錯などもあるかも知れない。是等の人々はこのへんで死んだものと見える。路傍の草の露がいまだ乾かず、其處から田圃の方に降りて行くに、

稻は既に刈られて蝗がしきりに飛んでゐる。私は延明寺住宅經營地などいふ木柱の建つたところの崖を下りて田圃を越して道に出た。そこに宮本武藏碑が建つてゐて、『天卿實相圓滿兵法逝去不絕』などといふ句が彫つてある。

私は電車で大里に行き、巡航船で江浦まで行つた。巖流島は昔から船島ともまた向島ともいつて居る。此處からは遙か向うに、岸は石垣で堅められ、中ごろに松の大樹が數本立つてゐる。もとは小山であつた處をくづしてゐるらしく赤土の丘が高く聳えて見えてゐる。それから家が數軒見え、帆船が數隻泊ててゐる。

私は大分待つてやうやく渡船で島に渡つた。渡守の爺がゆくゆく話しするを聞くに、この島に日清戰爭ごろ避病院が建つたさうである。それも何時か廢せられ、其處に住むと魔物に憑かれると云つて誰も住む者が無かつたのに、三菱が測量に來たり船大工がやつて來たりしてゐるうち、二十日も立たぬに神戸の

鈴木が買取つたといふことである。なるほど上つて見ると神戸鈴木造船所といふ立札も見えてゐる。それは大正四年ごろと思はれるが、石垣を岸に築いたのは、明治四十一二年ごろであらうか。巖流島の岸には先程江浦からも見えたやうに帆船が泊つてゐる。その中には伊豫波方村明神丸などといふのがあつたりして、何か知ら旅情をそそり、また、家鴨が波打際に集つてこの島に流寄る野菜の屑を奪合つて食つてゐる光景などもまた棄てがたいものである。

慶長十七年の昔、佐々木小次郎巖流といふ劍客が宮本武藏のために打たれてこの島で死んだ。巖流島といふ名もそれに本づくのであるが、『死骸はそのとき小倉の方に持つていんだものぢやらうと思ひます』などと船頭の爺が話をしながら船を漕いだ。この島に住むと魔に憑かれるといふのは、巖流への同情に本づく心理なのである。此處に、佐々木巖流之碑があるのは近頃の建立で、明治四十三年十月三十一日、舟島開鑿工事成工之際建之、井上頁三郎、北村龍三

郎、栃木順作等なほ五六の人名が彫付けてある。おもふに巖流の墓はそれまでは此處の島には無かつたものではなからうか。或は武將感狀記の『巖流が墓を築いて今に其跡あり』といふのは、その墓がしばらく絶えてゐたのであらうか。

慶長十七年の二人の勝負の時には、辰の上刻までに兩名とも島に到着すべき約束であつたのに、武藏は故意に時間を後らせ、巖流をして非常に待あぐませてゐる。そして巳の刻過ぐる頃漸く島に着いてゐるから、巖流の氣を三時間もいらいらせしめてゐる。それから武藏が島に着くや否や巖流が怒つてなぜ時間に後れたるかをなじるに、武藏はそんなことは聞えぬといふ振をしてゐる。それから、巖流が益々怒り大刀を拔いて鞘を海中に投じたのを武藏は冷笑して、小次郎既に負けたりなどといつてゐる。これは一種の氣合であり、暗示であり此處に至つて巖流はもはや鬪はぬ先に精神的に負けてしまつてゐる。それから巖流は刀を以て渡合ふに武藏は重い木刀を以てし、巖流の刀の刃の武藏に及ば

ぬ先に、重量の大きい木刀は巖流の頭蓋を打くだいてしまつた。これがはじめからの武藏の戰術で、巖流ははじめから武藏の術中に陷つたと謂ふべきである。

當時の勝負は、分けて怨恨のための勝負ではなく、單に技を較べるといふ名目であるが、較技といふのは眞劍勝負なのであるから、負ければ一命を棄てなければならぬ。そこで較技といふのは單に劍術の勝負ではなく、それ以外の戰術があるわけである。武藏は以前から、この戰術をさかんに使つて居て、それを智術とも云つてゐる。また、武具の選擇については『武道具の利をわきまゆるに何れの道具にても、をりにふれ時にしたがひ出合もの也』と武藏自身云つてゐるから、武藏が小次郎との勝負に木刀を用ゐたのなどもやはり智術の一端と謂ふのであらうか。

併し私は巖流島に訪ねて來て、寧ろ巖流に同情したのであつた。いろいろ智

術をやつてゐる武藏を寧ろ私は憎惡した。幾ら智術だなどと云つても三時間も故意に敵をいらいらさせるなどは如何にも卑怯者であり、また一方が劍で鬪ふなら一方も劍で鬪はなければ、劍客の勝負としては、私は面白くない。斷りなく通知なくして木刀を使つたなども、卑怯者の所做である。武藏は六十度も眞劍勝負をしたといふから、餘りその勝負の骨を呑込み過ぎてゐて私には面白くない。私はそんなことがいろいろ胸に往來し、暫く鈴木造船所の帆船を造るところを見てゐたが、武藏の所做をひどく惡みながら此島を去つた。

江浦はいまだ新開の地で、三菱のドック第一第二第三號などがある。雜貨店八百屋、菓子屋、呉服店なども皆新しい。御料理あら玉などと看板のかかつたところがある。酒屋があり精米屋がある。馬關出張の教法寺といふ眞宗の寺がある。何だか誰かの別莊のやうな趣で、なかに嫗と稚兒のこゑがしてゐる。また日蓮宗護國寺出張所などといふところもある。また日本製氷株式會社江浦出

張所などもある。縦覧謝絶 no admission! などと書いてある。此處の境内から直接船に樋の如きものが作りつけてあつて、瀧のやうに氷が船の中に落ちる光景なども私にはなかなかめづらしい。

その日ゆふぐれて、大阪毎日新聞社關門支局長の藤井公平さん、大阪商船株式會社の奈良秀治さん、畫家の山口八九子さんと四人して下關の名所を見物し、その夜は萬歳樓で海豚をむさぼり食つた。座に來た女が、『やつぱり兄さんやな』などといふ關西辯も私にはやはり珍らしく、その夜ふけて其處を辭した。

しづかに古へ人をしたふ心もて冬の港をわたりけるかな
わが心いたく悲しみこの島に命おとしし人をしぞおもふ
はるかなる旅路のひまのひと時をこの小島におりたちにけり

かういふ短歌などを私は拵へたりした。翌十一月三日午前十二時に船は上海へ向つて解纜した。

墺太利の維也納に九一年半ゐるうち、友から贈られた「宮本武藏」を繙き、武藏の兵法の奥儀などを讀んで『能く習ひ得て鍛煉有べき義也』などいふ語句にしばしば逢著しても、武藏がこの鍛煉で巖流の頭蓋を打くだいたのだと思ふと、私の心はひとりでに武藏の兵法を憎惡した。特に教室に於ける私の爲事がはかどらず、論文がなかなか出來ないときに、この書物などを讀むと、益々私は武藏のペテン術鍛煉法を憎惡したのであつた。時には書物を牀上にはふり付けたことなどもある。それほど私の心はいらいらして居た。

維也納を去つて獨逸に轉學するとき、私は不要一切を荷にして日本に送つた。その一部が火災のとき水を浴びて燒けずに殘つた。「宮本武藏」といふ書物も燒けずに殘つたものゝ一つである。歸來寧日なく、はや七年目の年月を送りつゝあるので、武藏の兵法のことなどは遠に忘却してゐたのを、文藝春秋社の短文の需に應ずるために久しぶりでおもひ起したので

ある。

私はこの短文を書きつゝも、巖流島仕合の後、天下無敵新免武藏として名を轟かし、六十四歳の天命を完うした彼を、私はなほ卑怯ものとするの念を脱却することが出來ない。

（昭和五・六・十九）

念珠集卷末記

本書に收めた雜文は、私の歸朝以來、雜誌新聞の需に應じて、をりをりに書いた、果敢ない、きまりの惡い思ひのするものばかりである。それでも此度鐵塔書院主人が私の雜文をあつめて呉れ、それを發行して呉れるといふので、私は感謝しながら鐵塔書院主人の企を承諾した。かういふ果敢ないものでも讀んで呉れる人々がゐたら益私は感謝せねばならぬ。

本書には、日本に關する雜文のみを集めた。なほ私は西洋留學中の寫生文をも少しく書いてゐる。それ等はまた近いうち集めて見ようとおもつてゐる。

本書の校正は、村田利明君、山口茂吉君から助けてもらひ、救荒植物集說の

校合には柴生田稔君の手をわづらはしたことを深く感謝する。

次に私自身の遺亡に備へるため、此等の小文の載つた新聞雜誌の名を記しおく。そのうち未發表のものが二つある。

島木赤彥臨終記　大正十五年五月號「改造」
八十吉　大正十四年十一月號「改造」
痰　大正十五年四月號「改造」
新道　大正十五年四月號「改造」
仁兵衛・スペクトラ　大正十五年四月號「改造」
漆瘡　大正十五年四月號「改造」
初詣　大正十五年四月號「改造」
日露の役　大正十五年四月號「改造」
青根溫泉　大正十五年四月號「改造」

奇蹟・日記鈔　大正十五年四月號「改造」
念珠集跋　大正十五年四月號「改造」
佛法僧鳥　昭和三年一月「時事新報」
佛法僧鳥の辨　昭和三年二月「時事新報」
遍　路　昭和三年一月「時事新報」
山峽小記　昭和二年一月「大阪朝日新聞」
續山峽小記　昭和三年一月「大阪朝日新聞」
牡雞の記　大正十五年六月號「文藝春秋」
第一高等學校思出斷片　大正十五年二月「一高校友會雜誌橄欖樹」
結核症　大正十五年十月號「隨筆」
雜草記　大正十五年十月號「隨筆」
月雪花　大正十五年十月號「隨筆」

母　昭和五年三月號「短歌月刊」

巖流島　昭和五年八月號「文藝春秋」

挿畫のうち、島木赤彦臨終像は、大正十五年三月二十七日島木赤彦君が病歿したとき、二十八日に平福百穗畫伯の寫生せられたものである。原圖は小原節三君の所藏に係つてゐる。

父守谷傳右衞門寫眞は大正十一年五月長男茂太が山形縣を訪うた時私の生家で撮影したもので、父七十三歲、茂太七歲の時である。この寫眞は私の留學地維也納に逗つたために燒殘つたものであるから、記念のつもりで載せた。

露西亞人餓死圖二葉は、ミュレンス博士の論文、„Die russische Hunger- und Seuchenkatastrophe in den Jahren 1921-1922“から轉載したのであるが、當時私はミュンヘンの客舍でその論文を讀み戰慄をおぼえたのであつた。さう

いふ意味からも、私にとつては尊い材料なのでここに載せた

私は大正十四年一月留學から歸つて來た。それから間もなく、當時雜誌女性の記者であつた淸水彌太郞氏が私を訪ねられ、隨筆やうのものの寄稿を賴まれた。そのとき書いたのが、本書の後ろに載せた、「癡人の癡語」といふ文章である。私は、散文については全く自信がなく、それでも依囑されたことについて深く感謝し、心中おどおどしながらこの短文を書いたのであつた。

その後、たまたま賴まれて書いた短文が積つてこの一冊になつたのである。私は私ごとき者の文章を求められた新聞社、雜誌社に深く感謝して本書の結語とする。

昭和五年盂蘭盆

齋藤茂吉識

昭和五年八月十日印刷
昭和五年八月十二日發行

念珠集 【定價金貳圓】



著者 齋藤茂吉

東京市神田區一ッ橋通九
發行者 小林勇

東京市神田區三崎町三丁目一一八
印刷者 荻野德次

〔東京印刷株式會社印刷〕

發行所
東京市神田區一ッ橋通九番地
振替東京一三七八九番
電話九段二七八九番
鐵塔書院

齋藤茂吉著書

歌集	赤光	大正二年初版 大正十年改訂版	東京春陽堂
歌集	あらたま	大正十年初版	東京春陽堂
自選歌集	朝の螢	大正十四年初版	東京改造社
北原白秋選	齋藤茂吉選集（品切）	大正十年初版	東京アルス
	正岡子規選集（品切）	大正十年初版	東京アルス
歌論集	童馬漫語	大正八年初版	東京春陽堂
正續	短歌私鈔（絶版）		東京春陽堂
	金槐集私鈔	大正十四年增補改訂	東京春陽堂
選集	齋藤茂吉（絶版）	大正五年	抒情詩社
	短歌寫生の說	昭和四年	鐵塔書院
新訂	金槐和歌集	昭和四年岩波文庫	岩波書店